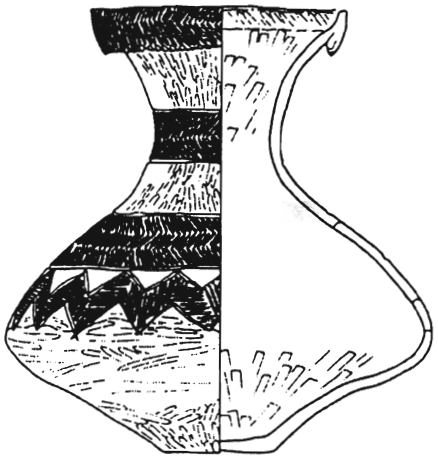
第26回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表要旨



日　程　2002年11月24日（日）
場　所　横須賀市文化会館

主　催　神奈川県考古学会
　　横須賀考古学会
　　横須賀市教育委員会

後　援　神奈川県教育委員会
　　逗子市教育委員会
　　葉山町教育委員会
　　三浦市教育委員会

開　催　日　程

2002年11月24日（日）
横須賀市文化会館

9:40～ 9:45　開会挨拶

〔調査発表〕

9:45～10:10　綾瀬市　上土棚南遺跡
10:15～10:40　横須賀市　佐島の丘遺跡群
10:45～11:10　中井町　比奈窪中屋敷横穴墓群
11:15～11:40　寒川町　宮山中里遺跡

12:45～12:45　昼　休　み

〔記念講演〕

12:45～13:45
「赤星直忠－偲ばれる研究者の姿正」横須賀考古学会 会長 川上久夫 先生

〔調査発表〕

13:45～14:10　逗子市　延命寺遺跡
14:15～14:40　茅ヶ崎市　国指定史跡 旧相模川橋脚
14:45～15:10　横浜市　史跡 称名寺境内旧伽藍跡
15:15～15:40　津久井町　津久井城跡
15:45～16:10　小田原市　小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡
16:15～16:40　小田原市　小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点
16:45～16:50　閉会挨拶

〔誌上発表〕

1．横須賀市　猿島遺跡
2．秦野市　稲荷木遺跡

〔図書交換会〕

10:00～15:00　横須賀市自然・人文博物館　講堂（1階）
（神奈川県考古学会刊行書籍を取り扱っています。）

表紙：横須賀市 佐島の丘遺跡群高原遺跡 出土土器

目　次

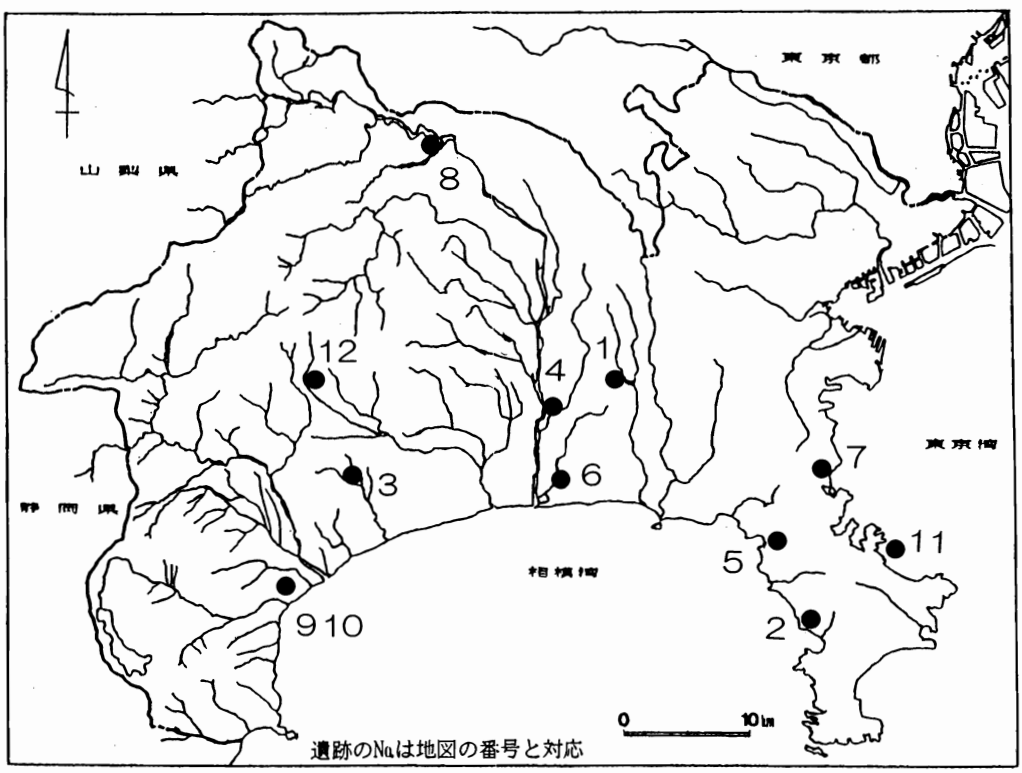
〔記念講演〕横須賀考古学会　会長 川上久夫 先生
「赤星直忠－偲ばれる研究者の姿正－」 ---------- 1

〔調査発表〕

①綾 瀬 市　上土棚南遺跡 ---------- 9
②横須賀市　佐島の丘遺跡群 ---------- 16
③中 井 町　比奈窪中屋敷横穴墓群 ---------- 21
④寒 川 町　宮山中里遺跡 ---------- 25
⑤逗 子 市　延命寺遺跡 ---------- 31
⑥茅ヶ崎市　国指定史跡 旧相模川橋脚 ---------- 37
⑦横 浜 市　史跡 称名寺旧境内旧伽藍跡 ---------- 43
⑧津久井町　津久井城跡 ---------- 49
⑨小田原市　小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡 ---------- 55
⑩小田原市　小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点 ---------- 61

〔誌上発表〕

⑪横須賀市　猿島遺跡 ---------- 67
⑫秦 野 市　稲荷木遺跡 ---------- 73



遺跡のNoは地図の番号と対応

記念講演　赤 星 直 忠　－偲ばれる研究者の姿正－

横須賀考古学会 会長　川上久夫 先生

赤星直忠（あかぼし　なおただ）

1902（明治35）年神奈川県生まれ、1991（平成３）年没。

戦前はいくつかの小学校教員・鉄道車両興業組合などに職をもち、戦後は横須賀市立工高講師・横浜国大講師・神奈川県立博物館嘱託などを勤める。旧制中学在学中から活発な研究活動を行い、大正から昭和10年代の「考古学雑誌」には常連執筆者といって良いほど多くの報告・論文を発表した。

三浦半島の横穴研究で第一人者としての業績を残したが、縄文時代についても、三戸・田戸・茅山・吉井・平根山遺跡など、特に関東地方の標識遺跡を多く世に出し、研究の進展に貢献した。

（縄文時代研究辞典より）

赤星直忠発表文献一覧

赤星先生の三浦半島内における考古学関係文献を可能な限り記載した。

番号	発行年月	著　者	論文名．　所収書名，　巻（号）：頁-頁．　発行者
001	1922. 3.	赤星直忠	相模大浜の横穴．民族と歴史，7(3)：63-67．日本学術普及会．
002	1923. 8.	赤星直忠	貝塚より古銭を発掘す．考古学雑誌，14(1)：61-62．考古学会．
003	1924. 8.	赤星直忠	馬らしき陰刻ある横穴．考古学雑誌，14(11)：59-60．考古学会．
004	1924. 9.	赤星直忠	鴨居洞穴の発掘．考古学雑誌，14(12)：37-41．考古学会．
005	1924. 10.	赤星直忠	其後の鴨居洞穴の発見遺物．考古学雑誌，14(13)：49-50．考古学会．
006	1924. 10.	赤星直忠	相州浦賀町鴨居の洞穴．考古学雑誌，14(13)：50-52．考古学会．
007	1925. 1.	赤星直忠	神奈川縣の遺蹟一、二．考古学雑誌，15(1)：60-61．考古学会．　坂本秋谷
008	1925. 2.	赤星直忠	在銘の石塔．考古学雑誌，15(2)：42-45．考古学会．
009	1925. 4.	赤星直忠	考古三事．考古学雑誌，15(4)：38-39．考古学会．
010	1925. 8.	赤星直忠	相州鴨居の横穴（１）．考古学雑誌，15(8)：26-33．考古学会．
011	1925. 9.	赤星直忠	相州鴨居の横穴（２）．考古学雑誌，15(9)：59-67．考古学会．
012	1925. 11.	赤星直忠	相州鴨居の横穴（３）．考古学雑誌，15(11)：67-76．考古学会．
013	1926. 2.	赤星直忠	相模国新遺跡三箇処．考古学雑誌．16(3)：63-64．考古学会．
014	1926. 4.	赤星直忠	逗子町の横穴．考古学雑誌．16(4)：32-38．考古学会．
015	1927. 1.	赤星直忠	骨製品を発見す．考古学雑誌，17(1)：57-60．考古学会．
016	1927. 4.	赤星直忠	三浦記(一)．考古学雑誌，17(4)：49-51．考古学会．
017	1927. 5.	赤星直忠	宗元寺の古瓦．考古学雑誌，17(5)：55-58．考古学会．
018	1927. 8.	赤星直忠	三浦記(二)．考古学雑誌，17(8)：71-72．考古学会．
019	1927. 10.	赤星直忠	三浦記(三)．考古学雑誌，17(10)：54-56．考古学会．
020	1928. 4.	赤星直忠	三浦記(四)．考古学雑誌，18(4)：47-49．考古学会．
021	1928. 9.	赤星直忠	相模馬堀横穴．考古学雑誌，18(9)：56-62．考古学会．
022	1928. 10.	赤星直忠	最近発見相模の遺跡．考古学雑誌，18(10)：59-60．考古学会．
023	1929. 2.	赤星直忠	相模佐島横穴．考古学雑誌，19(2)：54-59．考古学会．
024	1929. 9.	赤星直忠	神奈川県田浦町榎台遺跡．考古学雑誌，19(9)：31-34．考古学会．
025	1929. 11.	赤星直忠	相模三戸遺跡．考古学雑誌，19(11)：37-41．考古学会．
026	1930. 3	赤星直忠	三浦半島の横穴．考古學，1(2)：39-45．東京考古學會．
027	1930. 11.	赤星直忠	相模白須遺跡．考古学雑誌，20(11)：63-69．考古学会．
028	1930. 11.	赤星直忠	茅山貝塚と其の土器．史前学雑誌，2(6)：22-32．史前学会．
029	1930. 11.	赤星直忠	三浦半島に於ける彌生式遺蹟の分布．考古學，1(5,6合併)：75-79．東京考古學會．
030	1931. 2.	赤星直忠	考古二件．考古学雑誌，21(2)：77-80．考古学会．
031	1933. 5.	赤星直忠	相模地方の遺蹟と遺物．史前学雑誌，5(2)：38-43．史前学会．
032	1933. 5.	赤星直忠	三浦郡浦賀町鴨居鳥ヶ崎横穴群．神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査報告書，(1)：15-24．神奈川県．
033	1933. 5.	赤星直忠	相模江戸坂貝塚出土の土器資料．史前学雑誌，5(3)：51-52．史前学会．
034	1934. 3.	赤星直忠	矢倉内壁の彫刻について．考古学雑誌，24(3)：1-10．考古学会．　岩浦　菊名
035	1934. 5.	赤星直忠	浦賀町吉井横穴．考古学雑誌，24(5)：43-48．考古学会．
036	1934. 6.	赤星直忠	縄紋式土器の一形式，東京人類学会創立五十年記念講演会記事．人類学雑誌，49(6)：224-225．東京人 類学会．
037	1934	赤星直忠	名越谷戸から長勝寺へ．鎌倉，(1)．鎌倉文化研究会．
038	1934	赤星直忠	坂本横穴、柏木田・高山横穴、佐野横穴、石渡氏邸内横穴(鎌倉史跡めぐり会記録21回)，鎌倉．鎌倉文化研究会．(再掲：1972. 8.20　赤星直忠　第二十一回（横須賀市史跡見学）．鎌倉－史蹟めぐり会記録－：54-5 7．鎌倉文化研究会．)
039	1934	赤星直忠	縄紋式土器の一形式（田戸式土器）．歴史と郷土，3(2)．神奈川県中等学校歴史研究会．
040	1935. 3.	赤星直忠	相模宗元寺址．神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査報告，(3)：104-128．神奈川県．
041	1935. 12.	赤星直忠	横須賀市田戸先史時代遺蹟調査．史前学雑誌，7(6)：1-30．史前学会．
042	1936. 11.	赤星直忠	古式土器の一形式としての三戸式土器に就いて．考古學，7(9)：385-397．東京考古學會．
043	1937. 3.	赤星直忠	茅山貝塚及吉井貝塚．史跡名勝天然紀念物調査報告書，(5)：1-22．神奈川県．
044	1937. 5.	赤星直忠	再び茅山貝塚について．史前学雑誌，9(2)：40-44．史前学会．
045	1937. 11.	赤星直忠	神奈川県三浦郡吉井貝塚調査．史前学雑誌，9(6)：1-39．史前学会．

046 1937.11. 赤星直忠・小笠原義隆・角井長一　横須賀市榎戸貝塚について．考古學，8(11)：489-505．東京考古學會．
047 1938. 1. 赤星直忠　第五十八回．鎌倉史蹟めぐり會記録（十三）．鎌倉，13 4(1)：13-16．鎌倉文化研究会．（再掲：1972.8.20赤星直忠　第五十七回（飯島のやぐら・正覚寺・小笠原系図）．鎌倉－史蹟めぐり会記録－：344-348．鎌倉文化研究会．）
048 1938. 1. 赤星直忠　第六十一回．鎌倉史蹟めぐり會記録（十三）．鎌倉，13 4(1)：30-32．鎌倉文化研究会．（再掲：1972.8.20赤星直忠　第六十回（千葉ヶ谷本田邸横穴）．鎌倉－史蹟めぐり会記録－．：367-370．鎌倉文化研究会．）
049 1938. 3. 赤星直忠　飯島の出土品について，鎌倉の考古学的研究（十三）．鎌倉，14 4(2)：7-13．鎌倉文化研究会．（再掲：1980「中世考古学の研究」）
050 1938. 3. 赤星直忠　諸磯先史時代住居阯の調査．神奈川県史跡名勝天然紀念物調査報告書，(6)：77-89．神奈川県．
051 1938. 5. 赤星直忠　三浦半島出土の朱塗土器の再検討．考古學，9(5)：238-247．東京考古學會．
052 1938. 6. 赤星直忠　横須賀市における形象埴輪の出土に就いて．考古学雑誌，28(6)：38-54．考古学会．
053 1938. 8. 赤星直忠・酒詰仲男　神奈川県三浦郡三崎町諸磯貝塚に於ける竪穴住居址発掘について．史前学雑誌，10(3)：25-38．史前学会．
054 1938.10. 赤星直忠　三浦半島出土須恵器並土師器集成．考古學，9(10)：491-494．東京考古學會．
055 1940. 2. 赤星直忠　三浦党墳墓改葬に立会って（一）．神奈川文化，1(2)：18-32．神奈川県文化研究会．
056 1940. 4. 赤星直忠　三浦党墳墓改葬に立会って（二）．神奈川文化，1(3)：11-18．神奈川県文化研究会．
057 1940. 9. 赤星直忠　貝塚出土の「ツメタガイ」の一種について．考古学，11(9)：503-505．東京考古学会．
058 1942. 2. 赤星直忠　先史時代の神奈川県．郷土神奈川，1(2)：20-26．神奈川県郷土研究会．
059 1942. 3. 赤星直忠　衣笠城に就いて．神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査報告，(10)：82-110．神奈川県．
060 1942. 4. 赤星直忠　神奈川県浦賀町沼田城山横穴に就て．考古学雑誌，32(4)：1-28．日本考古学会．
061 1942.10. 赤星直忠　内川新田の話．郷土神奈川，1(10)：64-67．神奈川県郷土研究会．
062 1943. 2. 赤星直忠　相模，全国梵鐘調査録（第１回）．古代文化，14(2)：94-95．日本古代文化学会．
063 1943. 3. 赤星直忠　本縣所在元和以降梵鐘の記録．神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査報告，(11)：85-125．神奈川県．
064 1943.10. 赤星直忠　海中出現鐘について．考古学雑誌，33(10)：24-33．日本考古学会．
065 1944. 1. 赤星直忠　出土品探訪．郷土神奈川，3(1)：27-30．神奈川県郷土研究会．
066 1944. 8. 赤星直忠　やぐらにおける埋葬法について．考古学雑誌，34(8)：10-35．日本考古学会．
067 1948. 2. 赤星直忠　神奈川県の梵鐘鋳工とその作品の分布．神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査報告，(13)：1-19．神奈川県．
068 1948. 9. 赤星直忠　神奈川県野島貝塚．考古学集刊，1(1)：8-21，図版1．東京考古学会．
069 1948 赤星直忠　横須賀市域内新田開発史．横須賀市史，(2,土木史)：1-30．横須賀郷土文化研究室．
070 1948 赤星直忠　箱崎堀割．横須賀市史，(2,土木史)：31-32．横須賀郷土文化研究室．
071 1948 赤星直忠　三浦半島灯台史．横須賀市史，(3)：1-37．横須賀郷土文化研究室．
072 1949. 7. 赤星直忠　中根東里墓．神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査報告，(15)：5-12．神奈川県．
073 1950. 3. 赤星直忠　海中出現の古鐘．神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査報告，(16)：53-62．神奈川県．
074 1950. 7. 赤星直忠　三浦郡切妻造妻入家形横穴．史跡名勝天然紀念物調査報告書，(17)：9-15．神奈川県教育委員会．
075 1950.11. 赤星直忠　先史時代の三浦半島．三浦半島研究叢書，(1)．三浦半島研究会．
076 1950 赤星直忠　先史時代の三浦半島．三浦研究．（謄写刷）
077 1951 赤星直忠　三浦半島の海蝕洞窟．日本考古学協会総会発表要旨，(8)：11-12．日本考古学協会．
078 1951.10. 赤星直忠　横須賀市猿島洞窟遺跡．日本考古学年報，(1，昭和23年度)：75．日本考古学協会．
079 1951.10. 赤星直忠　神奈川県横須賀市なたぎり遺跡．日本考古学年報，(1，昭和23年度)：100-101．日本考古学協会．
080 1952. 9. 赤星直忠　大塚古墳の発掘．かながわ社会教育，(9)：19-20．神奈川県教育庁社会教育課．
081 1952 .10 赤星直忠　金石併用時代の漁民．漁民と対馬，九学会年報，(4)：60-82，關書院．
082 1952 赤星直忠　三浦半島に於ける弥生式遺跡．かながわ社会教育，(10,11)：11-32．神奈川県教育庁社会教育課．
083 1952 赤星直忠　猿島出土の縄文土器，猿島．横須賀市史，(7)：85-88．横須賀市郷土文化研究室．
084 1952 赤星直忠　猿島洞窟，猿島．横須賀市史，(7)：89-101．横須賀市郷土文化研究室．
085 1953. 3. 赤星直忠　横須賀大塚古墳．神奈川県文化財調査報告，(19)：1-64．神奈川県教育委員会．
086 1953. 6. 赤星直忠　上古の三浦．学習シリーズ，(9)．横須賀市教育研究所．（謄写刷）
087 1953. 9. 赤星直忠　海蝕洞窟－三浦半島に於ける弥生式遺跡－．神奈川県文化財調査報告，(20)：53-143．神奈川県教育委員会．
088 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県横須賀市上ノ山遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：59．日本考古学協会．
089 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県横須賀市深田遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：59．日本考古学協会．
090 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県横須賀市花立遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：59．日本考古学協会．
091 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県三浦郡大浦山遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：59-60．日本考古学協会
092 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県三浦郡剣崎遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：60．日本考古学協会．
093 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県横須賀市猿島遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：72．日本考古学協会．
094 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県三浦郡間口遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：72．日本考古学協会．
095 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県三浦郡松輪洞窟の墳墓．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：99．日本考古学協会
096 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県横須賀市鴨居横穴．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：100．日本考古学協会．
097 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県三浦郡菊名白山社境内横穴．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：100．日本考古学協会．
098 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県三浦郡三戸横穴群．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：100．日本考古学協会．
099 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県横須賀市平作窯址．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：111-112．日本考古学協会．
100 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県三浦郡剣崎洞窟遺跡．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：112．日本考古学協会．
101 1954. 4. 赤星直忠　神奈川県観音崎洞窟発見．日本考古学年報，(2，昭和24年度)：113．日本考古学協会．
102 1954. 4. 赤星直忠　横穴壁刻顔面画の解釈．日本考古学協会第13回総会発表要旨：10-11．日本考古学協会．
103 1954.12. 赤星直忠　逗子山野根横穴群．神奈川県文化財調査報告，(21)：73-120．神奈川県教育委員会．
104 1954. 赤星直忠　横須賀市なたぎり遺跡．横須賀市史，(別冊)：1-6,図版6．横須賀市博物館．
105 1955. 1. 赤星直忠　三浦半島城郭史（上）．横須賀市史，(8)．横須賀市教育委員会．

106 1955. 4. 赤星直忠 横須賀市小原台遺跡．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：51．日本考古学協会．
107 1955. 4. 赤星直忠 横須賀市平坂貝塚．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：51．日本考古学協会．
108 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県横須賀市清水遺跡．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：68．日本考古学協会．
109 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県横須賀市長井遺跡．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：68．日本考古学協会．
110 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県三浦郡向ヶ崎遺跡(1)．日本考古学年報，(3,昭和25年度)：69．日本考古学協会．
111 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県三浦郡向ヶ崎遺跡(2)．日本考古学年報，(3,昭和25年度)：69．日本考古学協会．
112 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県三浦郡毘沙門遺跡．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：69．日本考古学協会．
113 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県鴨居の八幡社貝塚．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：92．日本考古学協会．
114 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県三浦郡宮川洞窟墳墓．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：92．日本考古学協会．
115 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県三浦郡剣崎洞窟住居址．日本考古学年報，(3,昭和25年度)：92．日本考古学協会．
116 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県三浦郡松輪洞窟住居址．日本考古学年報，(3,昭和25年度)：92．日本考古学協会．
117 1955. 4. 赤星直忠 神奈川県横須賀市宗元寺址．日本考古学年報，(3，昭和25年度)：106-107．日本考古学協会．
118 1955. 4. 赤星直忠 南関東，各地域の弥生式土器．日本考古学講座，(4)：101-106．河出書房．
119 1955. 7. 赤星直忠 三浦半島城郭史（下）．横須賀市史，(9)：1-74．横須賀市教育委員会．
120 1955. 12. 赤星直忠 神奈川県横須賀市かもめ島洞窟．日本考古学年報，(4，昭和26年度)：127．日本考古学協会．
121 1955. 12. 赤星直忠 神奈川県三浦市窪がり横穴群．日本考古学年報，(4，昭和26年度)：127．日本考古学協会．
122 1955. 12. 赤星直忠 神奈川県横須賀市子安寺址．日本考古学年報，(4，昭和26年度)：151．日本考古学協会．
123 1956. 2. 赤星直忠 考古資料１．横須賀考古学会年報，(1)．横須賀考古学会．
124 1956. 3. 赤星直忠 茅山貝塚．かながわ社会教育，30(6)：15．神奈川県教育庁社会教育課．
125 1957. 3. 赤星直忠 たこつぼ形土器．横須賀市博物館雑報，(3)：5．横須賀市博物館．
126 1957. 3. 赤星直忠・岡本　勇 茅山貝塚．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(1)：1-30，図版2．横須賀市博物館．
127 1957. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市西来寺裏山遺跡．日本考古学年報，(5，昭和27年度)：48．日本考古学協会．
128 1957. 3. 赤星直忠 神奈川県三浦郡上宮田砂丘遺跡．日本考古学年報，(5，昭和27年度)：49．日本考古学協会．
129 1957. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市かろうと山古墳．日本考古学年報，(5，昭和27年度)：80．日本考古学協会．
130 1957. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市大塚古墳．日本考古学年報，(5，昭和27年度)：80．日本考古学協会．
131 1957. 3. 赤星直忠 横須賀の発展．横須賀市史(横須賀市史編纂委員会編)：101-171．横須賀市．
132 1957. 3. 赤星直忠 古代人の生活．神奈川県の歴史，(民衆と生活篇)：1-30．神奈川県立図書館．
133 1957. 12. 赤星直忠 三浦郡馬の背山遺跡調査概報．横須賀考古学会年報，(2)．横須賀考古学会．
134 1957. 12. 赤星直忠 横須賀市平根山遺跡調査概報．横須賀考古学会年報，(2)．横須賀考古学会．
135 1957. 12. 赤星直忠 縄文早期遺跡出土の磨石器打石器図．横須賀考古学会年報，(2)．横須賀考古学会．
136 1957 赤星直忠 観音崎における会津藩士の墓．観音崎自然博物館．(謄写版刷)
137 1958. 3. 赤星直忠・岡本　勇・村越　潔 横須賀市平根山遺跡．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(2)：1-21，図版4．横須賀市博物館．
138 1958. 3. 赤星直忠 横須賀市かろうと山古墳．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(2)：27-36．横須賀市博物館．
139 1958. 3. 赤星直忠 こんぴら山．横須賀文化協会会報，(3)：1,4．横須賀文化協会．
140 1958. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市茅山貝塚．日本考古学年報，(7，昭和29年度)：64．日本考古学協会．
141 1958. 3. 赤星直忠 逗子市山野根横穴群．日本考古学年報，(7，昭和29年度)：176-177．日本考古学協会．
142 1958. 3. 赤星直忠 横須賀市久里浜こんぴら山古墳並横穴群調査概報．かながわ文化財，(12)：14-18．神奈川県文化財協会．
143 1958. 3. 赤星直忠 葉山町木古場通称馬背山発掘概報．かながわ文化財，(12)：19-21．神奈川県文化財協会．
144 1958. 3. 赤星直忠 横須賀市大矢部町の摩崖仏．かながわ文化財，(12)：22-23．神奈川県文化財協会．
145 1958. 3. 赤星直忠 中原光氏の墓窟．神奈川県文化財調査報告，(24)：247-256．神奈川県教育委員会．(1980「中世考古学の研究」有隣堂に所収)
146 1958. 5. 赤星直忠 三浦半島（神奈川県），海蝕洞窟との比較．館山鉈切洞窟：160-164．千葉県教育委員会．
147 1958. 11. 赤星直忠 大矢部の摩崖仏．横須賀市博物館雑報，(5)：9．横須賀市博物館．
148 1958. 12. 赤星直忠 三浦半島の文化財概観．かながわ文化財，(14)：1-7．神奈川県文化財協会．
149 1958. 12. 赤星直忠 三浦の城あと案内．かながわ文化財，(14)：29-35．神奈川県文化財協会．
150 1958. 12. 赤星直忠 横須賀市久里浜こんぴら山古墳並横穴群調査概報．横須賀考古学会年報，(3)．横須賀考古学会．
151 1958. 12. 赤星直忠 横須賀市なはま横穴群調査概報．横須賀考古学会年報，(3)．横須賀考古学会．
152 1958. 12. 赤星直忠 三浦市鵜ヶ島台遺跡調査概報．横須賀考古学会年報，(3)．横須賀考古学会．
153 1958. 12. 赤星直忠 三浦市大浦山遺跡調査概報．横須賀考古学会年報，(3)．横須賀考古学会．
154 1958 赤星直忠 貝包丁について．古代文化，(2?or7)．
155 1959. 3. 赤星直忠 こんぴら山古墳とふくざく谷横穴群．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(3)：14-31．横須賀市博物館．
156 1959. 3. 赤星直忠 墳丘出土の石鏃．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(3)：19．横須賀市博物館．
157 1959. 3. 赤星直忠・井上裕之 横須賀市船越遺跡．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(3)：37-43．横須賀市博物館．
158 1959. 3. 赤星直忠 横須賀市なはま横穴群第２次調査概報．横須賀考古学会年報，(4)．横須賀考古学会．
159 1959. 3. 赤星直忠 上宮田砂丘遺跡．横須賀考古学会年報，(4)．横須賀考古学会．
160 1959. 3. 赤星直忠 神奈川県の古鰐口(一)．神奈川県文化財調査報告，(25)：63-66．神奈川県教育委員会．
161 1959. 3. 赤星直忠 神奈川県の梵鐘．神奈川県文化財調査報告，(25)：67-76．神奈川県教育委員会．
162 1959 赤星直忠 三浦半島に於ける海蝕洞窟内古代遺跡調査．文部省昭和24年度人文科学研究費補助金成果報告書．
163 1960. 2. 赤星直忠 三浦半島の出土品．かながわ文化財，(19)：7-10．神奈川県文化財協会．
164 1960. 3. 赤星直忠 横須賀市なはま横穴群．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(4)：21-39．横須賀市博物館．
165 1960. 3. 赤星直忠 横須賀市久里浜住吉神社裏洞穴遺跡．横須賀市博物館研究報告書(人文科学)，(4)：40-42．横須賀市博物館．
166 1960. 3. 赤星直忠 やぐらの話．鎌倉市教育委員会．

167 1961. 3. 赤星直忠 横須賀市なはま横穴群（第二次調査）．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(5)：22-33. 横須賀市博物館.
168 1961. 3. 赤星直忠 「永蛭郷」についての考え．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(5)：34-36. 横須賀市博物館.
169 1962. 3. 赤星直忠 横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(一).横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(6)：1-22, 図版2. 横須賀市博物館.
170 1962. 3. 赤星直忠 横須賀市吉井城山第一貝塚の石器(一).横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(6)：45-56. 横須賀市博物館.
171 1962. 3. 赤星直忠 横須賀市吉井城山第一貝塚の丹について．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(6)：69-75. 横須賀市博物館.
172 1962. 3. 赤星直忠 神奈川県の梵鐘(二)．神奈川県文化財調査報告，(27)：20-24. 神奈川県教育委員会.
173 1962. 3. 赤星直忠 神奈川県の古鰐口(二)．神奈川県文化財調査報告，(27)：25-29. 神奈川県教育委員会.
174 1962. 3. 赤星直忠 神奈川県の石灯籠．神奈川県文化財調査報告，(27)：42-52. 神奈川県教育委員会.
175 1962. 3. 赤星直忠 考古調査略報．神奈川県文化財調査報告，(27)：101-112. 神奈川県教育委員会.
176 1962. 3. 赤星直忠 神奈川県三浦市向ヶ崎古墳．日本考古学年報，(11，昭和33年度)：115. 日本考古学協会.
177 1962. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市長浜横穴群.日本考古学年報，(11，昭和33年度)：117. 日本考古学協会.
178 1962. 4. 赤星直忠・岡本　勇・神沢勇一　横須賀市吉井貝塚.日本考古学協会第28回総会研究発表要旨：12-13. 日本考古学協会.
179 1962. 8. 赤星直忠・岡本　勇　神奈川県三浦市大浦山洞穴の調査．洞穴遺跡調査会会報，(2)：67. 日本洞穴遺跡調査会.
180 1962. 9. 赤星直忠 延命寺の伏鉦．鎌倉，(7)：16-18. 鎌倉文化研究会.
181 1962. 11. 赤星直忠 横穴の伝播．新国学，(1)：3-12. 國學院大學院友振興学術会.
182 1962. 12. 赤星直忠 浦賀東福寺の奉納額．かながわ文化財，(30)：1-5. 神奈川県文化財協会.
183 1963. 3. 赤星直忠 横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(二).横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(7)：1-15, 図版1. 横須賀市博物館.
184 1963. 3. 赤星直忠 横須賀市吉井城山第一貝塚の石器(二).横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(7)：35-41. 横須賀市博物館.
185 1963. 3. 赤星直忠 横須賀市吉井城山第一貝塚の丹塗土器について．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(7)：54-59. 横須賀市博物館.
186 1963. 3. 赤星直忠 横須賀市吉井城山貝塚人の持っていた顔料．横須賀市博物館研究報告(人文科学)，(7)：59-60, 図版1. 横須賀市博物館.
187 1963. 3. 赤星直忠・岡本　勇　茅山貝塚（「横須賀市博物館研究報告」第１号)，研究論文抄録 日本考古学年報，(10，昭和32年度)：34-36. 日本考古学協会.
188 1963. 3. 赤星直忠 神奈川県三浦郡馬の背山遺跡．日本考古学年報，(10，昭和32年度)：88. 日本考古学協会.
189 1963. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市こんぴら山古墳並横穴群．日本考古学年報，(10，昭和32年度)：125. 日本考古学協会.
190 1963. 5. 赤星直忠 横穴式古墳と横穴．日本歴史，(180)：73-74. 吉川弘文館.
191 1963. 6. 赤星直忠 神奈川県大浦山洞穴第三次調査概報．洞穴遺跡調査会会報．(13)：3-7. 日本洞穴遺跡調査会.
192 1963. 9. 赤星直忠 大浦山洞穴調査概報．洞穴遺跡調査会会報，(8)．日本洞穴遺跡調査会.
193 1963. 10. 赤星直忠 神奈川県三浦郡蛭田古墳．日本考古学年報，(6，昭和28年度)：87-88. 日本考古学協会.
194 1963. 10. 赤星直忠 神奈川県逗子市山野根横穴群．日本考古学年報，(6，昭和28年度)：89-90. 日本考古学協会.
195 1963. 12. 赤星直忠 三浦市大浦山洞窟第３次調査概報．横須賀考古学会年報，(8)．横須賀考古学会.
196 1963. 12. 赤星直忠 神奈川県三浦市南下浦町大浦山洞窟調査概報.横須賀考古学会年報，(8)．横須賀考古学会.
197 1964. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市長浜遺跡．日本考古学年報，(12，昭和34年度)：111-112. 日本考古学協会.
198 1964. 3. 赤星直忠 神奈川県の古鰐口(三)．神奈川県文化財調査報告，(28)：19-24. 神奈川県教育委員会.
199 1964. 3. 赤星直忠 神奈川県の梵鐘(三)．神奈川県文化財調査報告，(28)：25-30. 神奈川県教育委員会.
200 1964. 3. 赤星直忠 神奈川県の石灯籠(追加)．神奈川県文化財調査報告，(28)：35-36. 神奈川県教育委員会.
210 1964. 12. 赤星直忠 横須賀市平作町無名塚調査概報．横須賀考古学会年報，(9)．横須賀考古学会.
201 1965. 3. 赤星直忠 茅山貝塚．神奈川県の文化財，(5)：33. 神奈川県教育庁社会教育課.
202 1965. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市吉井貝塚．日本考古学年報，(13，昭和35年度)：111-112. 日本考古学協会.
203 1965. 12. 赤星直忠 浦賀城跡の概要．横須賀考古学会年報，(10)．横須賀考古学会.
204 1965. 12. 赤星直忠 横須賀市池上町堂山の尖頭器様資料．横須賀考古学会年報，(10)．横須賀考古学会.
205 1965. 12. 赤星直忠 横須賀市池上町堂山のブレイド資料．横須賀考古学会年報，(10)．横須賀考古学会.
206 1966. 9. 赤星直忠 たたら浜横穴群概要．三浦古文化，(1)：18-21. 三浦古文化研究会.
207 1966 赤星直忠 横須賀市堂山遺跡．横須賀考古学会年報，(11)．横須賀考古学会.
208 1966 赤星直忠 横須賀市武小字大作出土品．横須賀考古学会年報，(11)．横須賀考古学会.
209 1967. 1. 赤星直忠 横須賀市鳥ヶ崎横穴群．横須賀考古学会年報，(12)：1-4. 横須賀考古学会.
210 1967. 1. 赤星直忠 葉山町出土の丸木舟．横須賀考古学会年報，(12)：5-6. 横須賀考古学会.
211 1967. 3. 赤星直忠 三浦半島の洞穴遺跡．日本の洞穴遺跡．平凡社.
212 1967. 3. 赤星直忠 神奈川県三浦市大浦山洞穴．日本考古学年報，(15，昭和37年度)：129-130. 日本考古学協会.
213 1967. 4. 赤星直忠 大浦山洞穴の概要．三浦古文化，(2)：72-76. 三浦古文化研究会.
214 1967. 4. 赤星直忠 三浦海岸駅の周辺．三浦古文化，(2)：77-80. 三浦古文化研究会.
215 1968. 3. 赤星直忠 神奈川県三浦市大浦山洞窟．日本考古学年報，(16，昭和38年度)：112. 日本考古学協会.
216 1969. 3. 赤星直忠 神奈川県横須賀市無名塚.日本考古学年報，(17，昭和39年度)：189-190. 日本考古学協会.
217 1969. 5. 赤星直忠 旧要塞地帯内での遺跡調査．神奈川県立博物館だより，2(1)：6. 神奈川県立博物館.
218 1969 赤星直忠 小矢部城跡，鳥羽正雄博士古稀記念論文集．日本城郭論叢.
219 1970. 1. 赤星直忠 穴の考古学：1-228. 学生社.
220 1970. 3. 赤星直忠 横須賀市浦賀城跡報告（１）．神奈川県文化財調査報告，(32)：1-11. 神奈川県教育委会.
221 1970. 3. 赤星直忠 神武寺親王やぐら，考古．逗子市文化財調査報告書，(1，神武寺)：59-60. 逗子市教育委員会.
222 1970. 3. 赤星直忠 神武寺庫裡後方の宝篋印塔，考古．逗子市文化財調査報告書，(1，神武寺)：60. 逗子市教

育委員会.

223 1970. 3. 赤星直忠 神武寺みろく窟，考古．逗子市文化財調査報告書，(1，神武寺)：60-68．逗子市教育委員会.

224 1970. 3. 赤星直忠 神武寺こんぴら山やぐら群，考古．逗子市文化財調査報告書，(1，神武寺)：68-76．逗子市教育委員会.

225 1970. 3. 赤星直忠 神武寺の古位牌，考古．逗子市文化財調査報告書，(1，神武寺)：76-77．逗子市教育委員会.

226 1970. 3. 赤星直忠 雲形位牌の編年試案，考古．逗子市文化財調査報告書，(1，神武寺)：77-85．逗子市教育委員会.

227 1970. 4. 赤星直忠 神奈川県横須賀市堂山遺跡．日本考古学年報，(18，昭和40年度)：105．日本考古学協会.

228 1970. 8. 赤星直忠 神奈川県における横穴古墳の線刻壁画．考古学ジャーナル，(48)：2-5．ニューサイエンス社.

229 1970.10. 赤星直忠 向ヶ崎古墳埴輪馬．かながわ文化財，(59・60合併)：37．神奈川県文化財協会.

230 1970 赤星直忠 雨崎洞穴調査概報．横須賀考古学会年報．(13・14合併)．横須賀考古学会.

231 1970 赤星直忠 浦賀城跡．横須賀考古学会年報．(13・14合併)．横須賀考古学会.

232 1971. 3. 赤星直忠 三浦半島の古代人と伊豆．三浦古文化，(9)：1-7．三浦古文化研究会.

233 1971. 3. 赤星直忠 逗子の古代遺跡（一），考古．逗子市文化財調査報告書，(2，沼間・池子)：60-61．逗子市教育委員会.

234 1971. 3. 赤星直忠 沼間桐ヶ谷氏先祖やぐら横穴調査概報，考古．逗子市文化財調査報告書，(2，沼間・池子)：62-69．逗子市教育委員会.

235 1971. 3. 赤星直忠 沼間堀の内横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(2，沼間・池子)：70-71．逗子市教育委員会.

236 1971. 3. 赤星直忠 沼間「堀の内」について，考古．逗子市文化財調査報告書，(2，沼間・池子)：72-75．逗子市教育委員会.

237 1971. 3. 赤星直忠 石渡庸夫方の古位牌，考古．逗子市文化財調査報告書，(2，沼間・池子)：76-77．逗子市教育委員会.

238 1971. 3. 赤星直忠 東昌寺石像塔婆，建築物．逗子市文化財調査報告書，(2，沼間・池子)：79-80．逗子市教育委員会.

239 1971. 3. 赤星直忠 海宝院応永十年銅鐘，工芸品．逗子市文化財調査報告書，(2，沼間・池子)82-84．逗子市教育委員会.

240 1972. 3. 赤星直忠 名越切通，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：61-68．逗子市教育委員会.

241 1972. 3. 赤星直忠 岩殿山裏山の遺構，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：69．逗子市教育委員会.

242 1972. 3. 赤星直忠 逗子駅裏山横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：70-71．逗子市教育委員会.

243 1972. 3. 赤星直忠 山野根切崩山腹発見横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：72-74．逗子市教育委員会.

244 1972. 3. 赤星直忠 山野根本田光氏裏山横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：75-77．逗子市教育委員会.

245 1972. 3. 赤星直忠 山野根本田庄作氏裏山横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：78-82．逗子市教育委員会.

246 1972. 3. 赤星直忠 山野根谷奥横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：83-85．逗子市教育委員会.

247 1972. 3. 赤星直忠 山野根熊野神社境内横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：86-88．逗子市教育委員会.

248 1972. 3. 赤星直忠 山野根居合口横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：89-90．逗子市教育委員会.

249 1972. 3. 赤星直忠 山野根仲の谷横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：91．逗子市教育委員会.

250 1972. 3. 赤星直忠 山野根土師遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：92．逗子市教育委員会.

251 1972. 3. 赤星直忠 久木小山氏裏山横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：93．逗子市教育委員会.

252 1972. 3. 赤星直忠 久木岩殿寺横穴，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：94-95．逗子市教育委員会.

253 1972. 3. 赤星直忠 久木岩殿寺蛇やぐら横穴．考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：96．逗子市教育委員会.

254 1972. 3. 赤星直忠 久木お猿畠やぐら群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：97-98．逗子市教育委員会.

255 1972. 3. 赤星直忠 久木松岡氏裏やぐら群，考古．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：99．逗子市教育委員会.

256 1972. 3. 赤星直忠 久木岩殿寺の石造塔婆，建造物．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：101-102．逗子市教育委員会.

257 1972. 3. 赤星直忠 久木妙光寺の石造塔婆，建造物．逗子市文化財調査報告書，(3，山の根・久木)：103-104．逗子市教育委員会.

258 1972. 4. 赤星直忠 逗子市お猿畠大切岸について．神奈川県文化財調査報告，(34)：8-16．神奈川県教育委員会.

259 1972. 5. 赤星直忠 神奈川県三浦市雨崎洞穴調査概報．日本考古学年報，(20，昭和42年度)：129-130．日本考古学協会.

260 1972.10. 赤星直忠 逗子市沼間横穴調査概報．横須賀考古学会年報，(15)：17-18．横須賀考古学会.

261 1973. 3. 赤星直忠 披露山遺跡概観，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：74-75．逗子市教育委員会.

262 1973. 3. 赤星直忠 披露山公園内遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：76．逗子市教育委員会.

263 1973. 3. 赤星直忠 披露台遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：77-79．逗子市教育委員

会.

264 1973. 3. 赤星直忠 披露山Ａ地点遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：80-82．逗子市教育委員会.

265 1973. 3. 赤星直忠 小坪小学校裏山遺跡(披露山Ｃ・Ｅ地点)，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：83-89.逗子市教育委員会.

266 1973. 3. 赤星直忠 伊勢山遺跡(披露山Ｄ地点)，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：90-91．逗子市教育委員会.

267 1973. 3. 赤星直忠 大崎の土師遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：91．逗子市教育委員会.

268 1973. 3. 赤星直忠 諏訪神社西遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：91．逗子市教育委員会.

269 1973. 3. 赤星直忠 新宿横穴群，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：92-95．逗子市教育委員会.

270 1973. 3. 赤星直忠 小坪うちで横穴群，考古　．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：96-97．逗子市教育委員会.

271 1973. 3. 赤星直忠 新宿海岸横穴，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：98．逗子市教育委員会.

272 1973. 3. 赤星直忠 小坪の大塚，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：99-101．逗子市教育委員会.

273 1973. 3. 赤星直忠 森の上出土和鏡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：101．逗子市教育委員会.

274 1973. 3. 赤星直忠 まんだらどうやぐら群，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：102-113．逗子市教育委員会.

275 1973. 3. 赤星直忠 小坪高崎邸内やぐら，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：114．逗子市教育委員会.

276 1973. 3. 赤星直忠 正覚寺裏やぐら，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：114．逗子市教育委員会.

277 1973. 3. 赤星直忠 住吉やぐら群，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：114-115．逗子市教育委員会.

278 1973. 3. 赤星直忠 新宿の富士塚，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：116-119．逗子市教育委員会.

279 1973. 3. 赤星直忠 住吉城跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：120-125．逗子市教育委員会.

280 1973. 3. 赤星直忠 小坪臨時台場，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：126-127．逗子市教育委員会.

281 1973. 3. 赤星直忠 小坪洞窟砲台，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：129-131．逗子市教育委員会.

282 1973. 3. 赤星直忠 小坪高角砲台跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：132．逗子市教育委員会.

283 1973. 3. 赤星直忠 狙撃陣地，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：132．逗子市教育委員会.

284 1973. 3. 赤星直忠 高養寺五輪塔，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：133-134．逗子市教育委員会.

285 1973. 3. 赤星直忠 正覚寺境内の塔，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：134．逗子市教育委員会.

286 1973. 3. 赤星直忠 仏乗院境内の塔，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：134．逗子市教育委員会.

287 1973. 3. 赤星直忠 小坪小学校前バス道の塔，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：134．逗子市教育委員会.

288 1973. 3. 赤星直忠 東谷戸、うちでの塔，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：135．逗子市教育委員会.

289 1973. 3. 赤星直忠 新宿２丁目の塔，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：135．逗子市教育委員会.

290 1973. 3. 赤星直忠 小坪出土板碑，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：136-137．逗子市教育委員会.

291 1973. 3. 赤星直忠 仏乗院の石灯籠，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：137．逗子市教育委員会.

292 1973. 3. 赤星直忠 小坪寺半鐘，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：138．逗子市教育委員会.

293 1973. 3. 赤星直忠 小坪地蔵堂の石像，考古．逗子市文化財調査報告書，(4，小坪・新宿)：139．逗子市教育委員会.

294 1973. 3. 赤星直忠 神奈川県史資料所在目録．考古，(7)．神奈川県企画調査部県史編集室.

295 1973. 3. 赤星直忠 神奈川県史資料所在目録．考古，(8)．神奈川県企画調査部県史編集室.

296 1973. 6. 赤星直忠 葉山町上山口の石造五輪塔について．神奈川県史研究，(20)：41-45．神奈川県企画調査部県史編集室.

297 1973. 9 赤星直忠・塚田明治 横浜市室ノ木遺跡．横須賀考古学会研究調査報告，(2)．横須賀考古学会.

298 1974. 2 赤星直忠 神奈川県史資料所在目録．考古，(9)．神奈川県企画調査部県史編集室.

299 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡　１岩が谷縄文遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：78-81．逗子市教育委員会.

300 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡　２鳴鶴崎土師遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：81-83．逗子市教育委員会.

301 1974. 3. 赤星直忠・塚田明治 桜山・逗子の遺跡　３持田弥生・土師遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：83-98．逗子市教育委員会.

302 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡　４内藤屋敷弥生遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：99．逗子市教育委員会.

303 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡　５才戸谷弥生・土師遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：99-100.逗子市教育委員会.

304 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡　６番合谷土師遺跡，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：100．逗子市教育委員会.

305 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡 7柳作山畑の土師器散在地，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：100.逗子市教育委員会.
306 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡 8（付）沼間台遺跡調査概報，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：101-105．逗子市教育委員会.
307 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の遺跡 逗子入江周辺，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：107-110．逗子市教育委員会.
308 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の中世資料 1 延命寺の中世資料，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：112-114．逗子市教育委員会.
309 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の中世資料 2田越川畔の中世供養塔と経塚，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：116-119．逗子市教育委員会.
310 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の中世資料 4田越川畔，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：120-123．逗子市教育委員会.
311 1974. 3. 赤星直忠 桜山・逗子の近世資料，考古．逗子市文化財調査報告書，(5，桜山・逗子)：124-130．逗子市教育委員会.
312 1974. 3. 赤星直忠 神奈川県史資料所在目録．考古，(10)．神奈川県企画調査部県史編集室.
313 1975. 3. 赤星直忠・内田武雄・岡本 勇・小川裕久・軽部一一・川上久夫・篠田健三・塚田明治・角井 勉 持田遺跡発掘調査報告(本文篇)．逗子市文化財調査報告書．(6)：1-110．逗子市教育委員会.
314 1975. 3. 赤星直忠・岡本 勇・小川裕久 持田遺跡発掘調査報告(図録篇)．逗子市文化財調査報告，(7)：,図66．逗子市教育委員会.
315 1975. 6. 赤星直忠 葉山町玉蔵院の木造小形五輪塔．横須賀考古学会年報，(18)：26-29．横須賀考古学会.
316 1976. 3. 赤星直忠 三浦市江奈横穴群．神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告，(10)：1-42．神奈川県教育委員会.
317 1976. 5. 赤星直忠 三浦市江奈横穴群．日本考古学年報，(27，1974年版)：64．日本考古学協会.
318 1976. 6. 赤星直忠 横須賀市小矢部町土師窯跡．横須賀考古学会年報，(19)：1-8．横須賀考古学会.
319 1977. 4. 赤星直忠 芦名砂丘遺跡．日本考古学年報，(28，1975年版)：138．日本考古学協会.
320 1977. 10. 赤星直忠 ジェラール瓦を使っている横須賀市秋谷の民家．横須賀考古学会年報，(20)：3-6．横須賀考古学会.
321 1977. 11. 赤星直忠・岡本 勇・三浦市赤坂遺跡：1-40，図版43．三浦市教育委員会.
322 1978. 3. 赤星直忠 県史跡 茅山貝塚．神奈川県文化財図鑑，(史跡名勝天然記念物篇)：15-17．神奈川県教育委員会.
323 1978. 3. 赤星直忠 海蝕洞穴内の埋葬について．かながわ文化財，(74)：8-21．神奈川県文化財協会.
324 1978. 11. 赤星直忠 一個の剥片石器．横須賀考古学会年報,(21)：1-3．横須賀考古学会.
325 1978. 11. 赤星直忠 「丹玉」について．横須賀考古学会年報,(21)：27-28．横須賀考古学会.
326 1979. 3. 赤星直忠・内田武雄・海原泰江・軽部一一・塚田明治・山田享史 逗子市名越遺跡－中世の切通・城郭・葬送遺跡－．逗子市教育委員会.
327 1979. 3. 赤星直忠・岡本 勇 考古資料．神奈川県史(資料篇)，(20)：1-297．神奈川県.
328 1980. 2. 赤星直忠 横須賀市大矢部磨崖仏．横須賀考古学会研究調査報告，(4)．横須賀考古学会.
329 1980. 2. 赤星直忠 (附)葉山・一色古墳の遺物．葉山御用邸内遺跡発掘調査報告．宮内庁書陵部紀要，(31)：128-131．宮内庁書陵部.
330 1980. 3. 赤星直忠・内田武雄・海原泰江・山田享史 逗子市住吉城址．逗子市教育委員会.
331 1980. 4. 赤星直忠 諸磯遺跡．日本考古学年報，(31，1978年度版)：238．日本考古学協会.
332 1980. 4. 赤星直忠 神明町遺跡．日本考古学年報，(31，1978年度版)：239．日本考古学協会.
333 1980. 10. 赤星直忠 三浦氏関係の史跡．三浦大介とその一族：219-252．三浦大介義明公八百年祭実行委員会.
334 1980. 10. 赤星直忠 横須賀市衣笠坂の台経塚－60年前発掘経塚の追跡調査－．横須賀考古学会年報，(22・23合併)：10-27．横須賀考古学会.
335 1980. 10. 赤星直忠 妙蔵寺裏山の石造層断碑出土について．横須賀考古学会年報．(22・23合併)：46-53．横須賀考古学会.
336 1980. 10. 赤星直忠 衣笠駅前方の中世埋葬地．横須賀考古学会年報，(22・23合併)：64．横須賀考古学会.
337 1980. 12. 赤星直忠 中世考古学の研究．有隣堂.
338 1981. 3. 赤星直忠・川上久夫・岡本 勇・塚田順正・米山邦男・中村 勉・山田昌久・塚田明治・小暮慶明・釼持輝久・大塚眞弘 鴨居上の台遺跡(鴨居上の台遺跡調査団編)．横須賀市文化財調査報告書，(8)．横須賀市教育委員会.
339 1981. 3. 赤星直忠 金工・陶磁器・その他の工芸品．横須賀市文化財総合調査報告書，(1，浦賀地区)：314-335．横須賀市教育委員会.
340 1981. 3. 赤星直忠 考古資料．横須賀市文化財総合調査報告書，(1，浦賀地区)：382－349？．横須賀市教育委員会.
341 1981. 8. 赤星直忠・小川裕久・小暮慶明 横須賀市坂本横穴の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．坂本横穴調査団.
342 1982. 2. 赤星直忠・亀井宏明・塚田明治・野内秀明 衣笠城跡・後山遺跡．横浜横須賀道路埋蔵文化財調査団.
343 1982. 3. 赤星直忠 金工・陶磁器・その他の工芸品．横須賀市文化財総合調査報告書，(2，久里浜地区)：221-242．横須賀市教育委員会.
344 1982. 3. 赤星直忠 考古資料．横須賀市文化財総合調査報告書，(2，久里浜地区)：263-268．横須賀市教育委員会.
345 1982. 7. 赤星直忠・大塚眞弘 横須賀市久里浜伝福寺裏遺跡の調査．第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨：22-23．第6回神奈川県遺跡調査研究発表会準備委員会.
346 1982. 8. 赤星直忠・飯島重一・大塚真弘 最近三浦半島で発見された古代の卜占骨．横須賀考古学会年報，(24・25合併)：52-55．横須賀考古学会.
347 1982. 8. 赤星直忠 「やぐら」の発生について．横須賀考古学会年報，(24・25合併)：60-66．横須賀考古学会.
348 1982. 8. 赤星直忠 寺地内散在の中世石造塔とその意義．横須賀考古学会年報，(24・25合併)：76-84．横須賀考古学会.
349 1982. 12. 赤星直忠・他 横須賀市長坂やぐら群の調査．長坂やぐら群発掘調査団.
350 1983. 1. 赤星直忠・岡本 勇・小暮慶明・塚田明治・宇内正城・中村 勉・釼持輝久 三浦市西ノ浜洞穴：1-31．神奈川県土木部・西ノ浜海蝕洞穴発掘調査団.
351 1983. 3. 赤星直忠 金工・陶磁器・その他の工芸品．横須賀市文化財総合調査報告書，(3 北下浦地区)：185-203．横須賀市教育委員会.
352 1983. 3. 赤星直忠 考古資料．横須賀市文化財総合調査報告書，(3 北下浦地区)：225-227．横須賀市教育委員

会.
353 1983.11. 赤星直忠・飯島重一・中村　勉・塚田明治・宇内正城・海原泰江・釼持輝久・臼井　敦　三浦市海外洞穴遺跡調査の概要．横須賀考古学会年報，(26)：1-17．横須賀考古学会.
354 1983.11. 赤星直忠　横須賀市長坂妙印寺の一石五輪塔．横須賀考古学会年報，(26)：52-55．横須賀考古学会.
355 1984. 3. 赤星直忠・内田武雄・軽部一一・塚田明治・山田享史　神武寺の城郭遺構．逗子市文化財調査報告書．(12)．逗子市教育委員会.
356 1984. 3. 赤星直忠　金工・陶磁器・その他の工芸品．横須賀市文化財総合調査報告書，(4，衣笠地区)：253-274．横須賀市教育委員会.
357 1984. 3. 赤星直忠　考古資料．横須賀市文化財総合調査報告書，(4，衣笠地区)：283-289．横須賀市教育委員会.
358 1984. 5. 赤星直忠・岡本　勇　海蝕洞穴遺跡にみる先祖の生活：1-13．三浦市教育委員会.
359 1984.10. 赤星直忠・飯島重一・小暮慶明　三浦市松輪大畑やぐらの調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
360 1984.10. 赤星直忠・飯島重一・小暮慶明　三浦市矢作やぐらの調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
361 1985. 1. 赤星直忠・飯島重一・臼井　敦　三浦市晴海町横穴群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
362 1985. 3. 赤星直忠　金工・陶磁器・その他の工芸品．横須賀市文化財総合調査報告書，(5 北部地区)：245-272．横須賀市教育委員会.
363 1985. 3. 赤星直忠　考古資料．横須賀市文化財総合調査報告書，(5 北部地区)：283-286．横須賀市教育委員会.
364 1985.10. 赤星直忠・他　横須賀市佐島やぐらの調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
365 1985.10. 赤星直忠・他　三浦市奉行所跡やぐら群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
366 1986. 3. 赤星直忠・他　横須賀市天神やぐら群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
367 1986.12. 赤星直忠・他　横須賀市天神やぐら群・佐島やぐら群の２次調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
368 1986.12. 赤星直忠・塚田明治・他　逗子市沼間やぐら群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
369 1986.12. 赤星直忠・塚田明治・宇内正城・臼井　敦・釼持輝久・飯島重一　三浦市海外３号洞穴遺跡の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
370 1986.12. 赤星直忠・他　三浦市小網代やぐらの調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
371 1986 斎藤彦司　かながわの平安仏．神奈川の古代瓦．かもめ文庫.
372 1987. 3. 赤星直忠　衣笠城跡．横須賀市文化財調査報告書，(15)．横須賀市教育委員会.
373 1987. 3. 赤星直忠　三浦市赤坂遺跡の調査－Ａトレンチ地点調査の概要－．三浦市教育委員会.
374 1987. 3. 赤星直忠・他　三浦市松輪大畑やぐら群の２次調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
375 1987. 5. 赤星直忠　わたしと考古学の思いで．横須賀考古学会年報，(27)：1-13．横須賀考古学会.
376 1987.12. 赤星直忠・塚田明治・他　逗子市沼間地下式壙の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
377 1987.12. 赤星直忠・他　三浦市三崎宮城やぐら群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
378 1987.12. 赤星直忠・他　三浦市小網代やぐら群の２次調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
379 1987.12. 赤星直忠・他　三浦市松輪大畑やぐら群の３次調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
380 1987.12. 赤星直忠・他　三浦市海外町やぐら群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
381 1988. 1. 赤星直忠・飯島重一・宇内正城　三浦市和田やぐら群の第２次調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
382 1988. 3. 赤星直忠　金工・陶磁器・その他の工芸品．横須賀市文化財総合調査報告書，(6 大津・武山地区)：267-295．横須賀市教育委員会.
383 1989. 3. 赤星直忠　金工・陶磁器・その他の工芸品・考古資料．横須賀市文化財総合調査報告書，(7 逸見・中央地区)：261-288．横須賀市教育委員会.
384 1989. 3. 赤星直忠・他　三浦市三崎宮城やぐら群の第２次調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
385 1989. 3. 赤星直忠・他　三浦市和田やぐら群の第３次調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
386 1990. 3. 赤星直忠　金工・陶磁器・その他の工芸品・考古資料．横須賀市文化財総合調査報告書，(8，西部地区)：235-274．横須賀市教育委員会.
387 1990. 3. 赤星直忠・他　三浦市二町谷横穴群・西野やぐら群・松輪坪井横穴群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
388 1990. 3. 赤星直忠・他　三浦市矢作第２やぐら群の調査－急傾斜地防災工事にともなう緊急調査の概要－．急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
389 1990.12. 赤星直忠　故浜田先生を悼んで．横須賀考古学会年報，(28)：1-6．横須賀考古学会.
390 1991. 3. 赤星直忠・佐藤明生・釼持輝久　神奈川県指定史跡「茅山貝塚」隣接地の埋蔵文化財調査報告．横須賀市文化財調査報告書，(23)．横須賀市教育委員会.
391 1991. 3. 赤星直忠・他　三浦市矢作第３やぐら群の調査・西野やぐら群の第２次調査．急傾斜地区埋蔵文化財調査団.
392 1992. 3. 赤星直忠　衣笠城址，埋蔵文化財発掘調査概報集Ｉ．横須賀市文化財調査報告書，(26)：37-46．横須賀市教育委員会.
393 1992. 8. 赤星直忠・稲村　繁　大木根東遺跡．大木根東遺跡調査団.
394 2002. 5. 赤星直忠　三浦半島の砂丘遺跡．赤星直忠博士文化財資料館だより，(11)：1-16．赤星直忠博士文化財資料館.

綾瀬市　上土棚南遺跡（かみつちだなみなみ）

－遺物廃棄帯を伴う縄文時代後期集落址－

矢島國雄・小滝　勉

所 在 地　綾瀬市上土棚南一丁目４－17

調査機関　上土棚南遺跡第５・６次発掘調査団

調査担当　矢島國雄・小滝　勉

調査目的　保育園改築工事（第５次）及び道路整備工事（第６次）に伴う事前調査

調査期間　2000年12月12日～2001年８月17日
2001年８月21日～2002年１月18日

調査面積　５次：1,190㎡　６次：323㎡

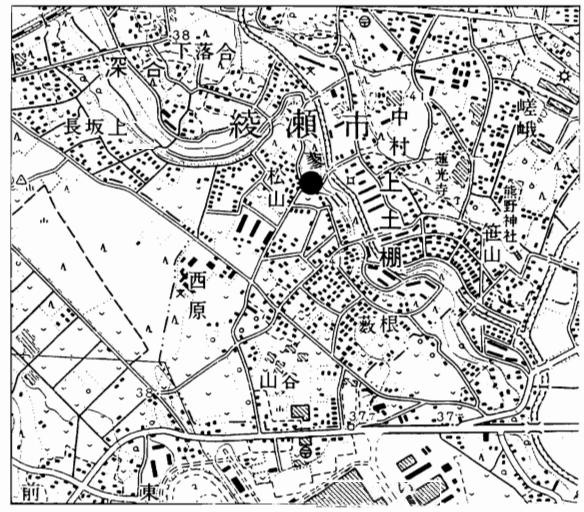
１．遺跡の立地

上土棚南遺跡は、藤沢市との市境に程近い綾瀬市の南東部に位置する。遺跡の北側は、市中央部を南流する比留川と市東部をやはり南流する蓼川との合流点にあたり、遺跡はこの合流点南側に形成された舌状台地基部に立地する。遺跡北側には地蔵坂遺跡、東側には上土棚遺跡といずれも相模野台地を代表する旧石器時代遺跡が隣接して位置している。

２．調査経緯

上土棚南遺跡周辺は、市内でも宅地化の進行が著しい地域であり、隣接遺跡も含め、高い頻度で発掘調査が実施されている地域である。地蔵坂遺跡では５次、上土棚遺跡では３次、本遺跡でも過去４次に渡る発掘調査が実施され、また、立会調査時に縄文時代後期の掘立柱建物址２棟が検出された地点もある。

こうした過去の調査成果から、旧石器時代に関しては、蓼川に面した台地縁辺部にL1H層～Ｂ３層に渡る相模野台地でも最大級の遺跡の存在が、また、縄文時代後期に関しては、やはり蓼川に面した台地縁辺部を中心に大規模な集落址の存在がそれぞれ明らかになりつつある。



第１図　遺跡位置図

今回の調査は、遺跡のほぼ中心部に位置する市立綾南保育園改築工事（第５次調査）及び市道整備工事（第６次調査）に伴う事前調査として、上土棚南遺跡第５・６次発掘調査団（団長　矢島國雄）により実施された。

３．調査概要

旧石器時代

旧石器時代の調査は、工事による掘削がローム層中まで達する第６次調査地点で実施し、Ｌ２層下部からＢ２Ｌ間層にかけて計５枚の文化層が確認された。

第Ⅰ文化層

Ｌ２層下部に分布する文化層で、調査区の西側及び南東側の２ヶ所で確認された。

西側のブロックはチャート製剥片を主体とする礫を含め20点ほどの小規模なブロックで、彫器１・残核２を伴う。

南東のブロックは、黒曜石製剥片を中心とした171点程のやや規模の大きいもので、礫群を１基伴う。石器はナイフ形石器・掻器・楔形石器・彫器等を中心に11点が出土した。

第Ⅱ文化層

Ｂ２Ｕ層上面に分布する文化層である。第Ⅰ文化層南東ブロック下から二周りほど範囲を広げて512点が検出された。黒曜石製剥片が129点と主体を占め、次いでチャート・凝灰岩の順となる。石器はナイフ形石器・掻器・削器・残核を中心に50点が出土した。

礫は262点と半数以上を占めるが、散発的な出土状態で、明確に礫群を構成するものは認められなかった。

第Ⅲ文化層

Ｂ２Ｌ層上面に分布の中心を持つ文化層で、調査区東半部のほぼ全面から849点が検出された。第Ⅱ文化層同様黒曜石製剥片が99点と主体的であり、次いで凝灰岩・チャート製剥片の順となる。石器構成は第Ⅱ文化層とほぼ同様で、ナイフ形石器・掻器・削器・残核を中心に57点が出土した。

礫は、595点と全体の70％を占めるが、第Ⅱ文化層同様散発的な出土状態で、明確な礫群は認められなかった。

第Ⅳ文化層

第Ⅲ文化層との間に若干の間層を挟み、Ｂ２Ｌ上部に分布の中心を持つ文化層で、分布範囲は第Ⅲ文化層とほぼ同一である。出土点数は1032点ともっとも多いが、90％近くの934点は礫であり、礫を主体とした文化層と言える。これほどの礫が出土したにもかかわらず、礫の出土状況は第Ⅱ・Ⅲ文化層同様散在した状態で、礫群としての構成を持つものは認められなかった。

石器構成は第Ⅱ・Ⅲ文化層とほぼ同一であるが、出土量は半減し23点に止まる。また、剥片も減少し、もっとも多い黒曜石で25点、以下凝灰岩、チャートの順となる。

第Ⅴ文化層

Ｂ２Ｌ間層中に分布の中心を持つ文化層で、調査区中央南端から10点の礫が、中央北端から１点のナイフ形石器が出土したのみである。

旧石器時代の調査は、最終的に第６次調査区東側約30％をＢ３層まで掘削し、さらに２ｍ×２ｍのテストピットを設定し、Ｌ５層まで掘削したが、新たな遺構・遺物は検出されなかった。

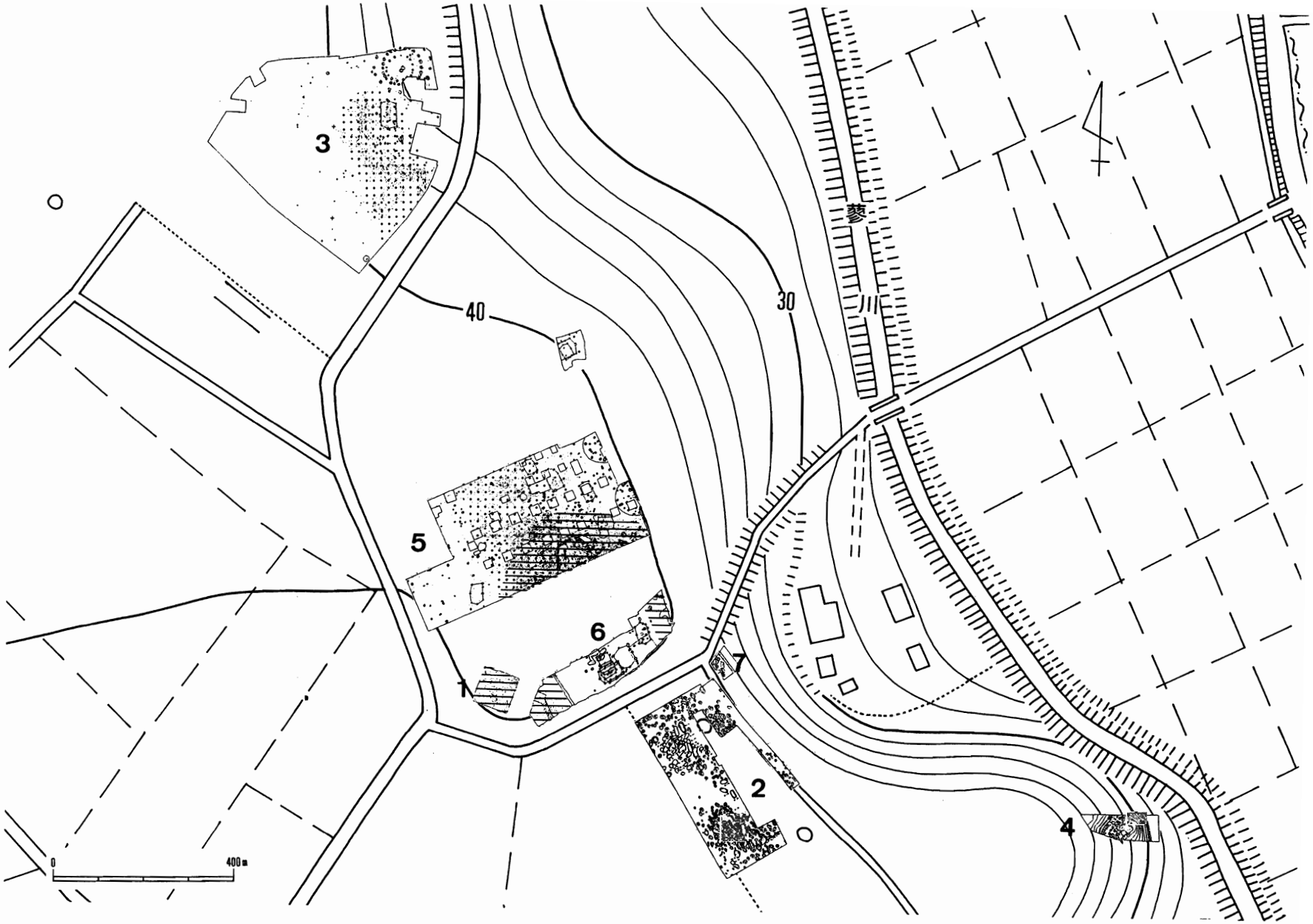
縄文時代

上土棚南遺跡の主体をなすのは縄文時代後期の集落址である。過去の調査では、第５次調査区を挟んで北側の第３次調査では堀ノ内１式後半から堀ノ内２式を主体とする遺構・遺物が、また、南側の第１・２・４次調査では、堀ノ内２式から加曾利Ｂ１式を主体とする遺構・遺物が検出されており、第５次調査付近を境に土器様相が異なることが明らかになっている。

今回実施した第５・６次調査によって、時期別の集落変遷をより明確に捉えることができ、また、遺物廃棄帯という、極めて特徴的な遺物廃棄形態を明らかにすることができた。

遺物廃棄帯

遺物廃棄帯とは、調査区内において集中して遺物の出土した地点のことである。縄文集落の場合、台地斜面部を遺物の廃棄場所として利用している事例は多数存在する。しかしながら、本遺跡では、台地平坦部から遺物の一括集中地点が検出された。同様の遺物集中は、第３次調査でも検出されており、遺物廃棄ブロックとして報告しているが、



第２図　第１次～第７次調査地点

今回この遺物集中が、集落内を帯状に展開していることが明らかとなったため、遺物廃棄帯と呼称することとした。

第２図は、過去の調査を含め、遺物廃棄帯の位置を示したものである。スクリーントーンの違いは、主体として出土する土器の時期差を示すもので、第３次調査区から第５次区にかけて南北に延びる遺物廃棄帯(以下廃棄帯１)は堀ノ内１式後半から堀ノ内２式中段階を主体とし、第５次調査区南側から第１次調査区及び第６次調査区東西両端から検出された遺物廃棄帯(以下廃棄帯２)は堀ノ内２式後半から加曾利Ｂ１式を主体的に出土する。第５・６次調査区とも出土遺物の約85%が廃棄帯１・２からの出土であり、第５次調査区内の廃棄帯２部分を除き、廃棄帯内側の集落内での遺物分布は希薄であった。また、第５次調査区の廃棄帯１西側でも遺物分布は極端に減少し、遺構も１棟の掘立柱建物址が検出されたに止まっている。

こうした検出状況から、廃棄帯１は、堀ノ内１式後半期～堀ノ内２式中段階期集落の西縁を示すものと理解でき、崖線と廃棄帯１に挟まれた第３次調査区～第５次調査区までの台地縁辺部がこの時期の集落範囲として想定しうる。

廃棄帯２は、堀ノ内２式後半～加曾利Ｂ１式期集落の周囲を取り囲むように形成され、集落範囲は、第５次調査区南端～第４次調査区にかけての台地縁辺部に展開すると想定される。

このように、上土棚南遺跡の縄文時代集落は、２つの遺物廃棄帯の存在によって、時期を異にする集落が隣接して存在することが明らかになった。以下第５・６次調査成果をもとにそれぞれの集落内容について見ていきたい。

廃棄帯１に伴う集落

廃棄帯１に伴う遺構は、第５次調査で検出された住居址２軒、掘立柱建物址６棟、貯蔵穴１、焼土址２基、ピット群である。廃棄帯２下から検出された遺構については、どちらに伴うものか判断に迷うが、検出された位置や形態・出土遺物等から住居址については廃棄帯２に、掘立柱建物址については廃棄帯１に伴うものと思われる。また、廃棄帯西側に位置する５号掘立柱建物址については、廃棄帯１・２どちらに伴うか不明である。

遺構配置は、崖線に近い調査区東端部に住居址が位置し、この住居址と廃棄帯１とに挟まれた空間に掘立柱建物址が位置する。掘立柱建物址周辺には抽出できたもの以外にも良好なピットが多数存在することから、さらに多くの掘立柱建物址が存在する可能性もある。数的には住居址よりも掘立柱建物址に優位性が認められる。

住居址はいずれも調査区外に広がっているため全容は不明であるが、平面形は円形を基調とするものと推定される。

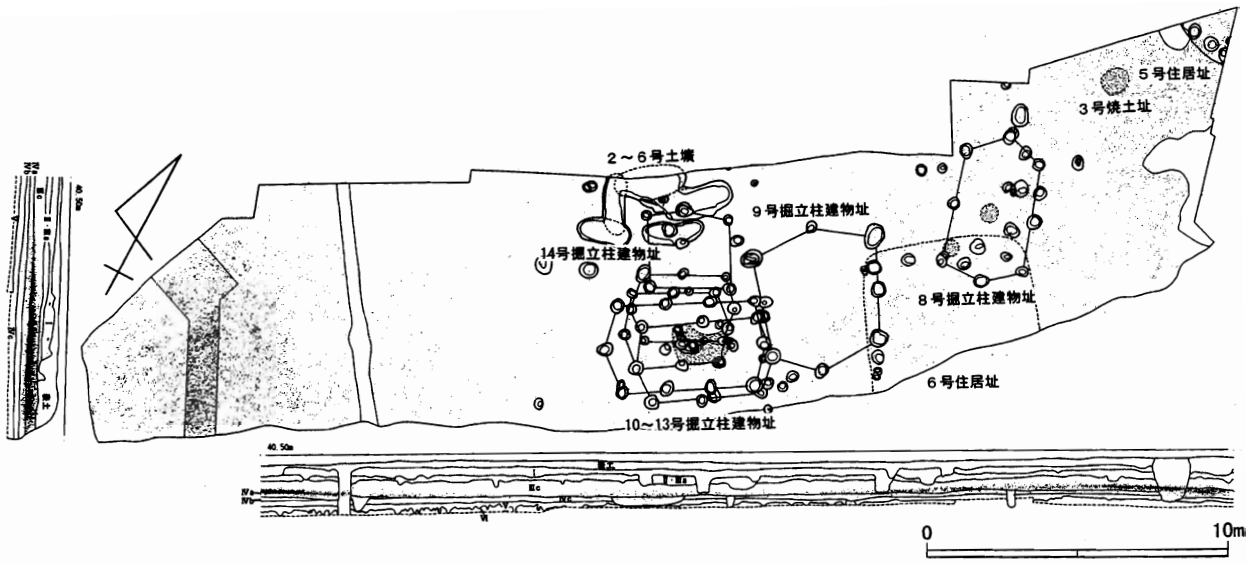
掘立柱建物址はいずれも亀甲形を呈し、炉址を伴うものが３棟確認されたが、住居址の炉址と比べ、焼土の形成は弱いものであった。

焼土址は、いずれも廃棄帯１中に位置しており、或いは投げ込みの焼土である可能性もある。

廃棄帯１は、第５次調査区中央を幅約16mにわたって南北に延びる形で検出された。南側は廃棄帯２と重複し、第６次調査区内からはこの時期の廃棄帯は検出されていないことから、この部分で廃棄帯２へと吸収されるものと判断される。また、北側は前述したように第３次調査区で検出された廃棄ブロックへとつながっていくものと推定される。

廃棄帯１で特筆すべき点として、集落内外に比べて、遺物を包含する土層と伴に20～40cm程度の高まりを持って検出されたことが上げられる。こうした状況は、貝塚等と同様に、食料残滓等も含めて、繰り返しの廃棄行為が行われた結果、高まりが形成されたものと解釈されよう。

第３図　第５次調査遺構配置図



第４図　第６次調査遺構配置図

遺物の出土状態は、廃棄帯内から均質に出土するわけではなく、粗密が認められた。土器は、ほとんどが破片状態の出土で、一括遺物でもあたかも投げ捨てたかのように破砕した状態で出土している。また、廃棄帯内からは４基の埋設土器が検出され、このうちの１基は倒置状態で検出された。この他、ほぼ完形の注口土器が正位及び倒置状態で各１点出土しており、これらも埋設されていた可能性も考えられる。

石器は、この時期に特徴的な器種のほとんどが出土しており、打製石斧がもっとも多く出土している。磨製石斧は10点が出土しているが、このうち７点は口縁部を欠損した土器内からまとまって出土した。また、未製品を含む打製石斧十数点がまとまって出土した場所もあった。

土偶や石棒など祭祀関連遺物の出土も廃棄帯の特徴であり、それぞれ小片を含め10点程度出土している。

廃棄帯２に伴う集落

廃棄帯２に伴う遺構は、第５・６次調査区で検出された住居址４軒、掘立柱建物址７棟、墓壙５基、焼土址１基である。

住居址４軒のうち、２軒は住居址の縁に小礫を配したいわゆる環礫方形配石遺構であり、小礫と重なるように焼土が検出されている。廃棄帯１に伴う住居址に比べ、全体的に平面形が方形化する傾向が窺える。

掘立柱建物址７棟のうち６棟は重複した状態で検出され、このうち10～13号掘立柱建物址は主軸方向を同じくして執拗に同じ場所に繰り返し構築されている。

墓壙と判断される土壙は５基が重複して検出された。いずれもが長径約２m、短径１m程の楕円形を呈するもので、このうち２基には小形土器が副葬されていた。

焼土址は５号住居址と８号掘立柱建物址との間から検出され、対応するピットが検出されなかったことから単独の焼土址と判断した。

廃棄帯２は、第５次調査区南端及び第６次調査区東西両端から検出された。第６次調査区東端は、西端に比べ遺物出土量はそれほど多いものではないが、これは廃棄帯の主体がより崖線よりにあるためと判断される。

廃棄帯１のような周囲とのレベル差を見られ

ず、また、埋設土器等も未検出である。それ以外の遺物の出土状態は廃棄帯１と同様であるが、３号住居址と重なる部分からは、黒曜石の剥片192点がまとまって出土している。また、第６次調査区西端の廃棄帯からは、土偶が20点近くと比較的多く出土している。このうちの１点は顔部を欠損するもののほぼ復元が可能となった。高さ22cm程の手足を持つ非常に精緻に作られた中空土偶で、県内では類例は見出せず、山梨・長野県方面に類似した土偶が見られる。この土偶の胴部と足部は５ｍほど離れた地点から出土しており、この足部が出土した地点は別個体の土偶下半部が集中して出土している。

４．まとめ

旧石器時代

第６次調査区から５枚の文化層が確認された。いずれも相模野旧石器時代編年の相模野第Ⅲ期に位置付けられるもので、概期の石器組成・石器製作技術の特徴を良好に示した資料である。今回の調査で特徴的であったのは、第Ⅰ文化層を除き多量の礫が出土するものの、散漫な出土状態で、礫群が抽出できなかったことが上げられよう。隣接する上土棚遺跡では、良好な礫群が多数検出されており、こうした礫の検出状況の違いは、遺跡の性格の違いに起因するものであるのか、検討する課題は多いといえる。

縄文時代

今回の調査によって、上土棚南遺跡における時期別の集落変遷を解明する上で極めて重要な所見を得ることができた。また、遺物廃棄帯という縄文時代後期における新たな遺物廃棄形態を確認することができた。

調査概要では、本遺跡では時期を異にする２つの集落が隣接すると述べたが、実際は、時期により集落内の占地場所を移動しているとしたほうがより適切かもしれない。

廃棄帯１の中でも出土遺物を比較すると、第３次調査区では堀ノ内１式後半が主体的であり、第５次調査区では堀ノ内２式中段階が主体的であった。これに廃棄帯２の出土状況を加味すると、堀ノ内１式後半では遺跡内の北側に集落を形成し、堀ノ内２式中段階では遺跡中央部に、堀ノ内２式後半から加曾利Ｂ１式にかけては遺跡の南側にそれぞれ集落を形成し、時期が下るにつれて北側から南側へと集落内を移動していた状況を見て取ることができよう。

また、本遺跡の集落形態は、いわゆる環状集落ではなく台地縁辺部に帯状に形成されたいわば帯状集落という形態を示すものと思われる。

遺物廃棄行為については、廃棄帯１のように、台地平坦部にも遺物廃棄が行われていたことが明らかとなった。この廃棄帯１の東側崖線部はすでに削平されているため、崖線側に廃棄行為が行われていたかは明らかではないが、上土棚遺跡第２次調査時に、わずかに残された崖線部から堀ノ内２式土器が多量に出土しており、位置から見て、廃棄帯１に対応するものと見て間違いないものと思われる。これからすれば、廃棄帯１も廃棄帯２同様集落を取り囲むように遺物廃棄が行われていたと判断できる。本遺跡のように台地全面に広がる集落とは異なり、台地縁辺部のみに形成される集落では、台地平端部側の遺物出土状態にも注視する必要があろう。

また、この廃棄帯の性格については、祭祀関連の遺物の出土や、石器未製品・薄片集中、石器埋納さらには埋設土器の検出等を考え合わせると、単なる廃棄場所と片付けられるものではなく、そこでは祭祀や石器製作などさまざまな利用がなされていたものと推察される。

横須賀市　佐島の丘遺跡群 高原・高原北遺跡

－弥生時代後期から古墳時代初頭の大規模集落－

横山太郎

所 在 地　横須賀市佐島２丁目245-1・他
調査期間　佐島の丘埋蔵文化財発掘調査団
調査担当　横山太郎・北爪一行
調査目的　宅地造成に伴う事前調査
調査期間　2000年12月１日～2001年12月28日
調査面積　高原遺跡　23,384㎡
　　高原北遺跡　6,748㎡

第１図　遺跡位置図（1/20000）

１．遺跡の立地

佐島地区は、三浦半島中部の西側に位置する。遺跡群周辺の地形は相模湾に張り出した低い丘陵地で、標高約70ｍを測る北寄りの平坦部を頂部とする。丘陵の北西側は比較的なだらかな地形が広がり、現況では畑として利用されている。一方、東側の一帯は起伏が多く、南に向かって樹枝状に開析された大小の尾根がのびる。この付近は、大半が山林となっている。

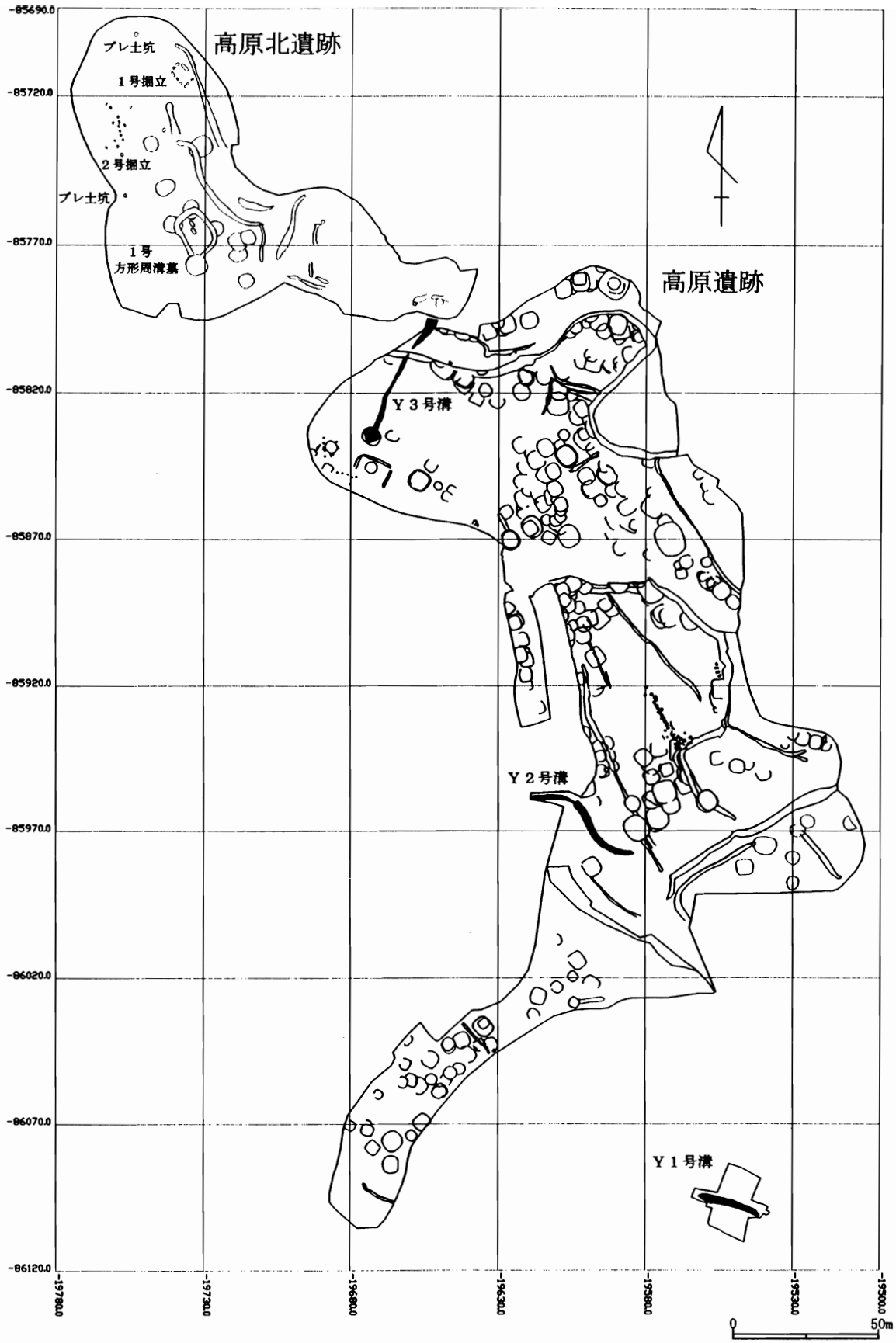
２．調査経緯

今回の調査は、宅地開発事業に伴い実施された。本調査に先立ち横須賀市教育委員会によって、平成８年度に現地踏査が、平成11年度に遺跡範囲確認調査が行われている。その結果、周知の遺跡である高原遺跡・唐池遺跡・一本松遺跡・上ノ山Ａ遺跡・深田遺跡の存在が確認されると共に、高原遺跡に隣接する高原北遺跡が新たな埋蔵文化財包蔵地として発見された。以上の調査結果に基づき、確認された上記の６遺跡について本調査を実施することとなった。高原遺跡・高原北遺跡は、平成12年12月１日から並行して調査を進め、高原北遺跡は平成13年7月30日に、高原遺跡は同年12月28日に終了している。

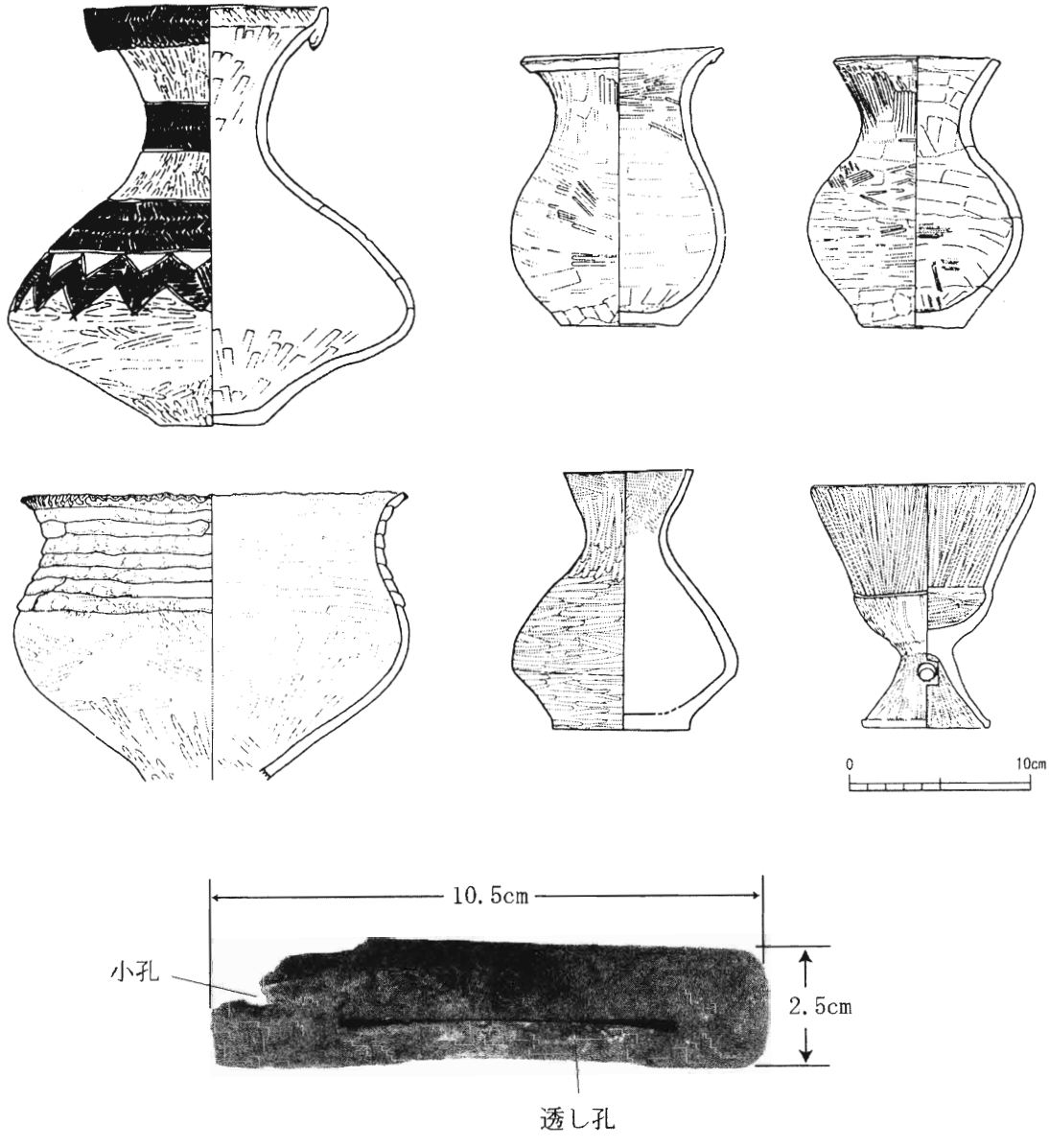
３．調査概要

高原遺跡

標高50～60ｍの南北に長い台地上に立地。西側と東側は急峻な谷となり、南西側と南側に２つの尾根が派生してのびている。調査範囲の現況は、畑地・山林・荒蕪地であるが、平坦地のほとんどが近年まで畑地として利用されていたため全体に削平を受けており、遺構・遺物の一部はこれにより消失しているものと思われる。検出された遺構の大半は弥生時代後期～古墳時代前期に属するも



第２図　高原遺跡・高原北遺跡　遺構配置図（1:2,000）



第３図　高原遺跡出土土器・銅製品

ので、他に縄文時代早期に属すると思われる住居跡１軒、ピット群１箇所と、数ヶ所の遺物包含層が発見された。弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、竪穴住居跡は総数296軒、竪穴状遺構６基、方形周溝墓１基、Ｖ字溝３条を数え、特に弥生時代後期におさまる遺構の比率は非常に多い。古墳時代前期に属するものは比較的少なく、この時期には集落の規模が縮小したか、または遺跡の継続にある程度の断絶期間があった可能性がうかがわれる。

注目される遺構としては、断面Ｖ字形を呈する溝３条があげられる。これらの溝は、集落の所在する地形を利用して要所を遮断する位置に掘り込まれたものである。出土した土器の様相から、溝の埋没後も集落はある程度の期間継続していたことがうかがわれる。出土土器の傾向は、弥生時代後期に属する在来の東京湾岸系土器を主体とするが、東海系と思われる土器も散見される。土器以

外の遺物で特筆すべきものとしては、青銅製品があげられる。なかでも集落の西側の谷際に位置する住居跡（弥生後期後半から古墳時代初頭）から発見された筒状銅製品は、この時期のものとしては全国的にみても類例が少ない貴重な資料である。長さ10.5cm、径2.5cmを測る筒状を呈し、形状は片側が開口し、もう一方の側が閉塞している。細い透し孔が側面に３箇所、小孔が開口部に２対４箇所、閉塞部に１箇所、見られる。類似の遺物として、前期古墳の副葬品として出土例の多い「筒形銅器」があるが、本遺跡出土のものは形状がより素朴であり、広い意味での祖形である可能性が考えられる。また、その他の住居跡から、銅環、銅釧、銅鏃などが出土している。

高原北遺跡

高原遺跡の北に隣接する谷部に立地し、北から南に下る比較的平坦な２段の畑地が、遺跡の主要な部分となっている。標高は現況で67～47ｍを測る。調査の結果、旧石器時代、縄文時代早期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期～古代、中・近世の遺構・遺物が発見された。このうち弥生時代後期～古墳時代前期のものは、隣接する高原遺跡と同一の集落と、その墓域の一部を形成するものと見られる。

旧石器時代の遺構としては土坑２基が検出された。これらは、相模野台地における立川ロームＢ４層以下から掘り込まれていると考えられるが、上部を大きく削平されている。縄文時代の遺構・遺物としては、土坑群と少量の土器片が発見されている。縄文時代の土器片は早期に属するものが多く、本遺跡の西側の丘陵上に所在する一本松遺跡からの流れ込みとも考えられる。弥生時代後期の遺構としては、竪穴住居址11軒、方形周溝墓１基、溝が調査されている。方形周溝墓は谷状地形の底に位置し４軒の竪穴住居跡と重複しており、周溝の南東側コーナーが、そのうちの１軒に切られている。埋葬主体部２カ所が検出され、第１主体部からはガラス製勾玉、ガラス小玉、鉄製品（短剣）が、第２主体部からはガラス小玉が出土している。古墳時代後期～古代の遺構としては、掘立柱建物跡２棟と竪穴住居跡１軒が検出された。時期は、出土遺物などから７世紀末～８世紀前葉の所産と考えられる。中・近世の遺構としては、道路状遺構、溝、近世における水場と思われる敷石状遺構が発見されている。

４．まとめ

今回の調査では、当地域における弥生時代後期～古墳時代初頭の集落の様相を知るための貴重な成果を得ることができた。高原遺跡と高原北遺跡は、便宜上２遺跡として調査を行っているが、本来、一体をなす遺跡と考えられ、さらに未調査の台地北西側にも集落の範囲は広がる可能性がある。両遺跡をあわせた遺構数は竪穴住居跡307軒、方形周溝墓２基、断面Ｖ字状の溝３条である。

Ｖ字溝は遺跡南側に派生する尾根を分断するもの（Y1号溝）と、集落の最も密集する部分の北と南で検出されたもの（Y2・3号溝）がある。Y1号溝が掘り込まれた尾根は南側の海岸部に向かって徐々に標高を減じており、小田和湾に面する低地から遺跡のある台地にのぼる道筋として使われていたのではないだろうか。また、Y2・3号溝は南北に長い台地をおおむね横断する方向に走り、Y2号溝は西側が、Y3号溝は東側が谷に面して掘りきりになっている。後世の削平をかなり受けているため、これらの溝の本来の深さは不明であるが、残存する最深部で2.8ｍを測る大がかりなもので、東西の谷との組み合わせによって住居群を囲繞する意図はみとめてよいように思う。ただ、削平による消失を考慮しても、集落を完全には区画せず欠落する部分を残していた可能性があり、防御性

などの機能については疑問も残るところである。

竪穴住居群は重複が顕著で、同時存在が不可能と思われる隣接も含めると、10軒近い密集地点が数ヶ所ある。これは、住居の建て替えのサイクルで少なくとも10回以上の時間の経過があったことを意味する。300軒をこえる住居数の多さは、集落の規模よりも、むしろこの集中的な継続性に起因するものである。比較として市域東部における同時期の遺跡のあり方を概観すると、どちらかというと小規模な集落が分散する傾向が見られる。本遺跡周辺においても数ヶ所の該期遺跡の存在が知られるが、それらの内容は今のところ必ずしも明確ではなく、本遺跡との関連に興味がもたれる。

今回の調査では、これまで不明であった横須賀市域西部における該期集落の様相の一端が初めて明らかとなった。東部の代表的な弥生集落の一つである鴨居上ノ台遺跡の出土土器には、東京湾を挟んだ房総半島の土器との類似が顕著に見られるが、本遺跡の土器にはその傾向は希薄である。さらに、両遺跡ともに東海系と思われる土器が出土しているが、本遺跡で得られた東海地方に出自の求められる土器のうちには、上ノ台遺跡では見られない要素も散見される。また青銅製品の出土も、現在の知見としては市域東部の弥生集落では住吉遺跡で出土した銅鏃１点の他には例を見ない。これらの様相は、東部の弥生集落の調査においてこれまで知られてきたあり方とは異なる特徴として、評価してよいと思う。相模湾に面した低丘陵上という地形的特質とあわせ、他地域との交流関係は本遺跡について考えていく上で重要なポイントになるものと思われる。

文献

中三川昇　2002「佐島の丘遺跡群試掘・確認調査報告」『横須賀市文化財調査報告書』第37集　横須賀市教育委員会

宇内正城　1974「横須賀市西部における弥生期遺跡とその遺物」『横須賀考古学会年報』No.17　横須賀考古学会

比奈窪中屋敷横穴墓群

－急傾斜地崩壊対策工事に伴う調査－

三瓶裕司

所 在 地　足柄上郡中井町比奈窪260－１

調査機関　財団法人　かながわ考古学財団

調査担当　中田　英・上田　薫・三瓶裕司

調査目的　急傾斜地崩壊対策工事に伴う調査

調査期間　第一次調査
2001年１月７日～１月31日
第二次調査
10月18日～12月14日

調査面積　第一次調査　50.5㎡
第二次調査　93.1㎡　　計143.6㎡

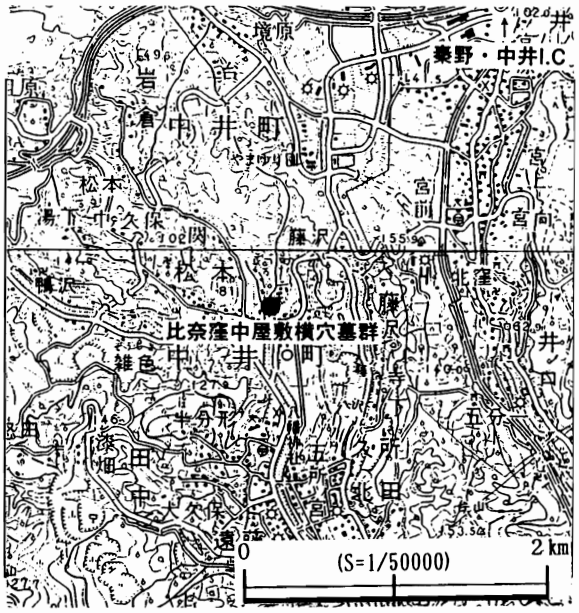
１．遺跡の立地

本遺跡は神奈川県足柄上郡中井町比奈窪260－１、ほぼ町の中央に所在する（第１図）。

中井町は、神奈川県の南西部に広がる大磯丘陵のほぼ中央に位置する。町域は東西6.8km・南北5.3kmで周囲は、北に秦野市、東に平塚市、南に二宮町、南西に小田原市、北西に大井町と３市２町と接している。

中井町には相模湾に注ぐ中村川と葛川の２河川が貫流しており、それらの河川とそれぞれの支流によって丘陵が削り出された複雑な開析地形が形成されている。本遺跡は、中村川とその支流である岩倉川によって西側を、同じく支流の藤沢川によって東側を開析された丘陵の西向き崖面に立地している。

本遺跡の西方約600ｍには、1900年に神奈川県下で初めて横穴墓の調査を行ない、本県における横穴墓研究の始まりとなった雑色横穴墓群が所在する。



第１図　遺跡位置図

２．調査経緯

本遺跡は平成12年（2000年）12月初旬、松田土木事務所が行った急傾斜崩壊対策工事中に発見された。

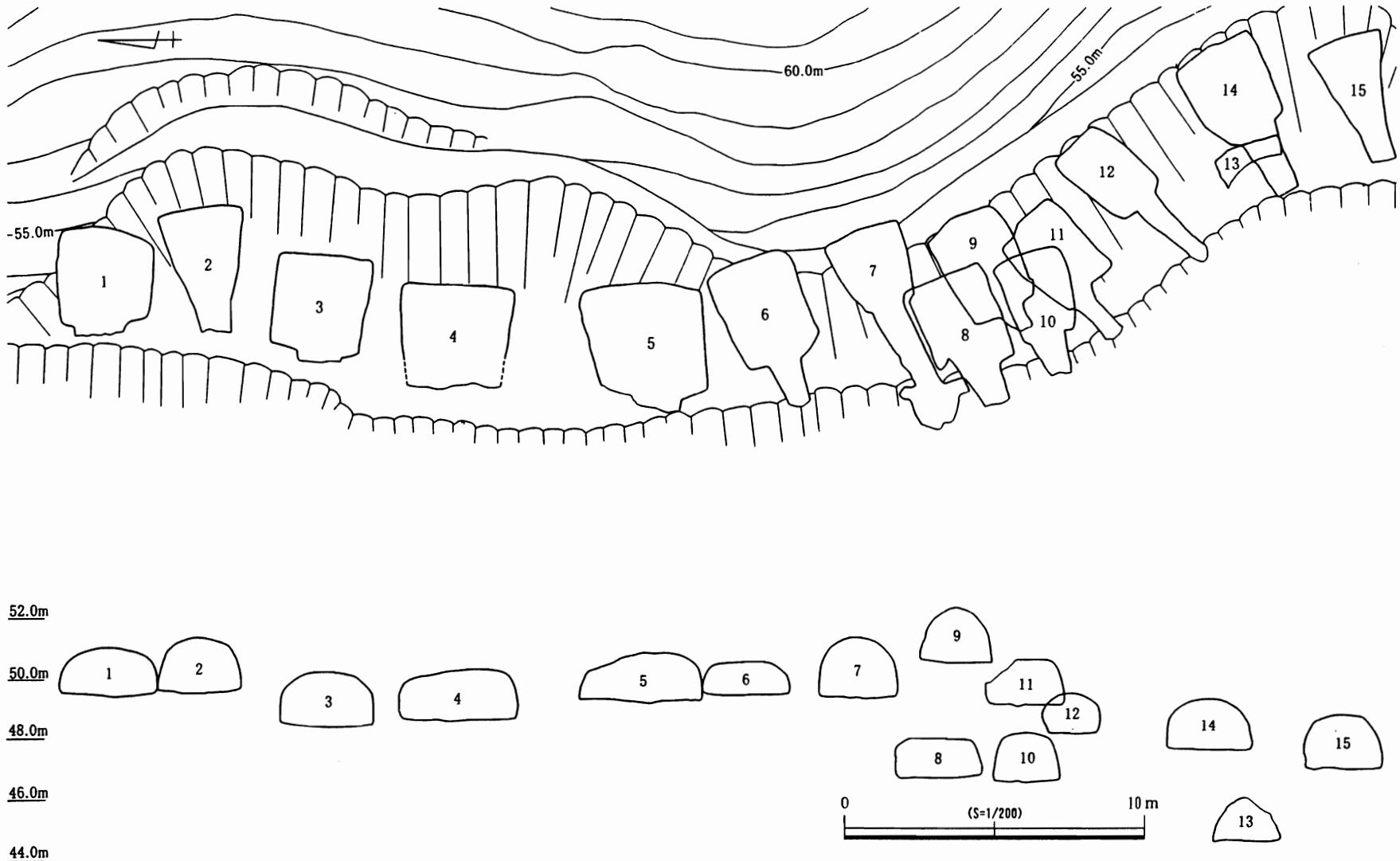
そこで年が明けた１月初めより発見された６基の横穴墓を対象に第一次調査を行った。

次年度には、事前に行われた分布調査によって９基の横穴墓が発見され、10月半ばより、これらを対象とした第二次調査を行った。

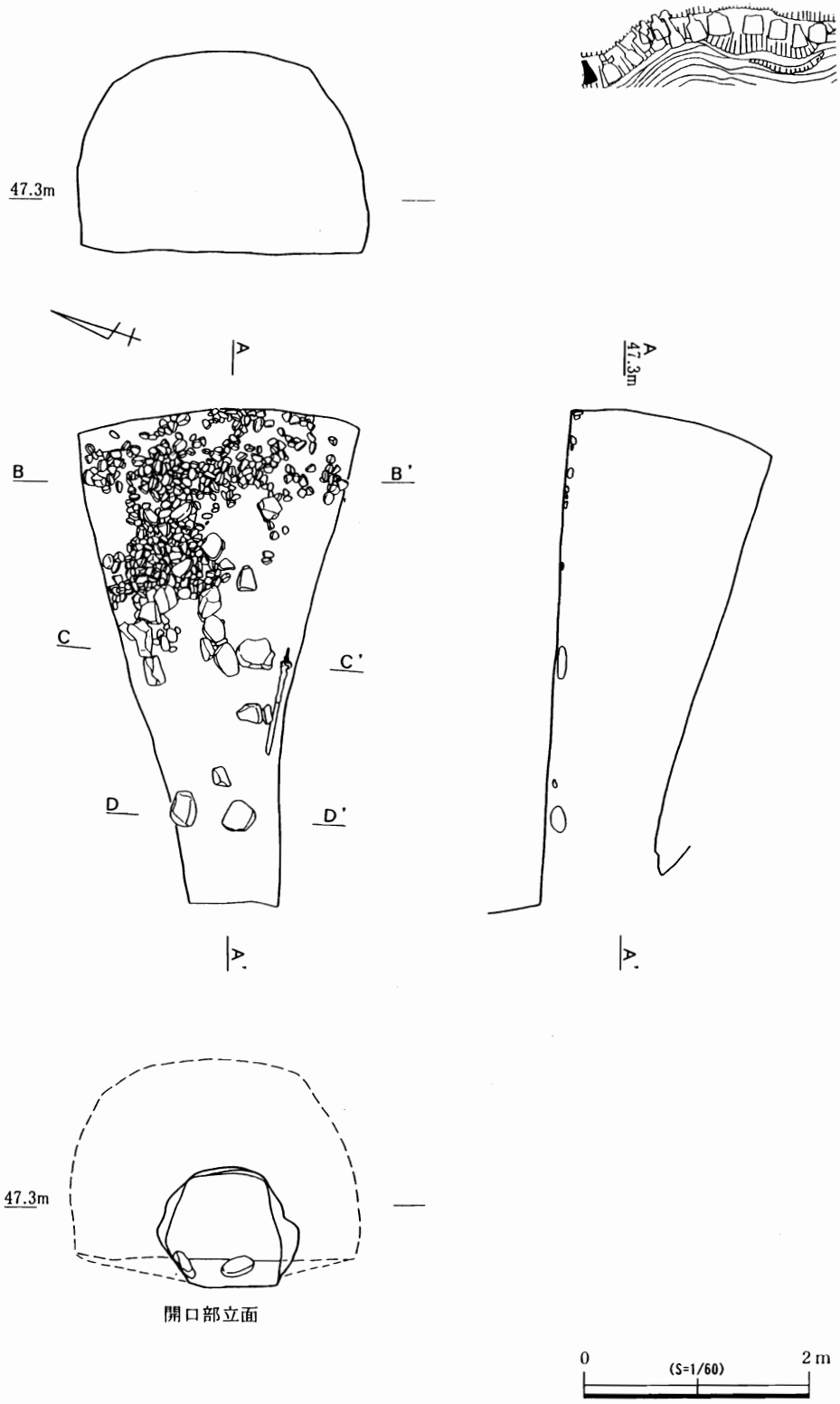
調査を行った横穴墓はあわせて15基である。

３．調査概要

本横穴墓群は、第一次調査分の第１～６号横穴墓については工事途中での発見ということで、遺構・遺物ともに遺存状態はあまり良くはなかった。しかし第二次調査分の第７～15号横穴墓については、風化によって崩落した横穴墓が数基認められたものの、大多数の横穴墓は遺構・遺物とも



第２図　比奈窪中屋敷横穴墓群　遺構配置図



第３図　第15号横穴墓

に遺存状態は良好であった。

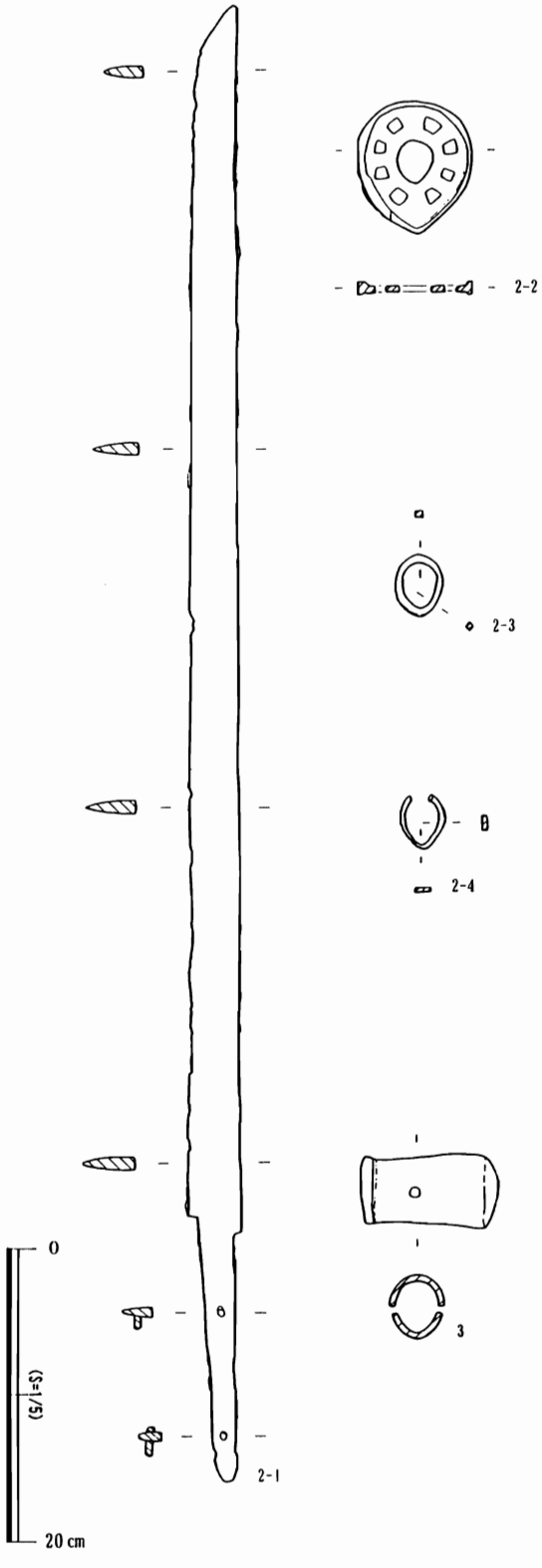
中でも第２・４・７・14号横穴墓では玄室の床面をびっしりと礫で覆う礫床が遺存しており、第14号横穴墓では礫の間から勾玉・切子玉・ガラス小玉をはじめとする玉類や耳環などの銅製品、鉄鏃や刀子などの鉄製品、人骨などの遺物が大量に出土した。

また、第１号横穴墓は湖西窯産の須恵器（蓋・提瓶）や鉄鏃を中心とした鉄製品が多く出土しており、さらに第８・15号横穴墓では直刀がそれぞれ一振ずつ、第11・12号横穴墓では小刀が出土している。

４．まとめ

本横穴墓群は、横穴墓の形態や出土遺物から、遅くとも６世紀終末より構築が開始され、少なくとも７世紀中頃までは構築が継続していたと推定される。

今回の調査で出土した遺物は土器（土師器・須恵器）、鉄製品（刀類・鉄鏃等）、銅製品（耳環等）、石製品（砥石・玉類）、ガラス製品（玉類）、人骨（歯牙を含む）などで整理箱で15箱分を数える。これらのうち、特筆すべきものでは先にも紹介した第15号横穴墓より出土した直刀（第４図）で、遺存状態は極めて良好なものである。



第４図　第15号横穴墓　出土直刀

引用・参考文献

上田　薫・三瓶裕司　2002「比奈窪中屋敷横穴墓群」『かながわ考古学財団調査報告』136　財団法人かながわ考古学財団

古墳時代研究プロジェクトチーム　1995～2001「横穴墓の研究（１）～（７）」『かながわの考古学　第５集』・『研究紀要１～６』　神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人　かながわ考古学財団

大野延太郎　1900「相模国足柄上郡中村字雑色横穴調査」『人類学雑誌』15-172

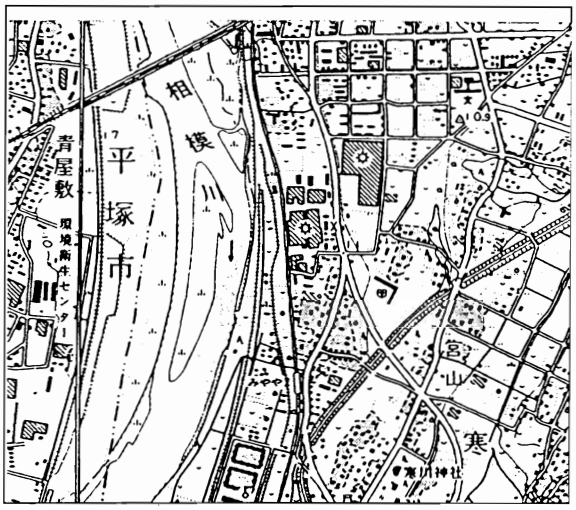
中井村誌研究調査委員会　1958　『中井村誌』

寒川町　宮山中里遺跡

－自然堤防上で確認された後期古墳群－

市川正史・井澤　純・吉田政行・渡辺　外

所 在 地　高座郡寒川町宮山3447-1他
調査機関　財団法人かながわ考古学財団
調査担当　市川正史・渡辺　外
調査目的　道路建設に伴う事前調査
調査期間　平成12年10月16日～14年３月31日
調査面積　9,537㎡



第１図　遺跡位置図（1/25000）

１．遺跡の立地

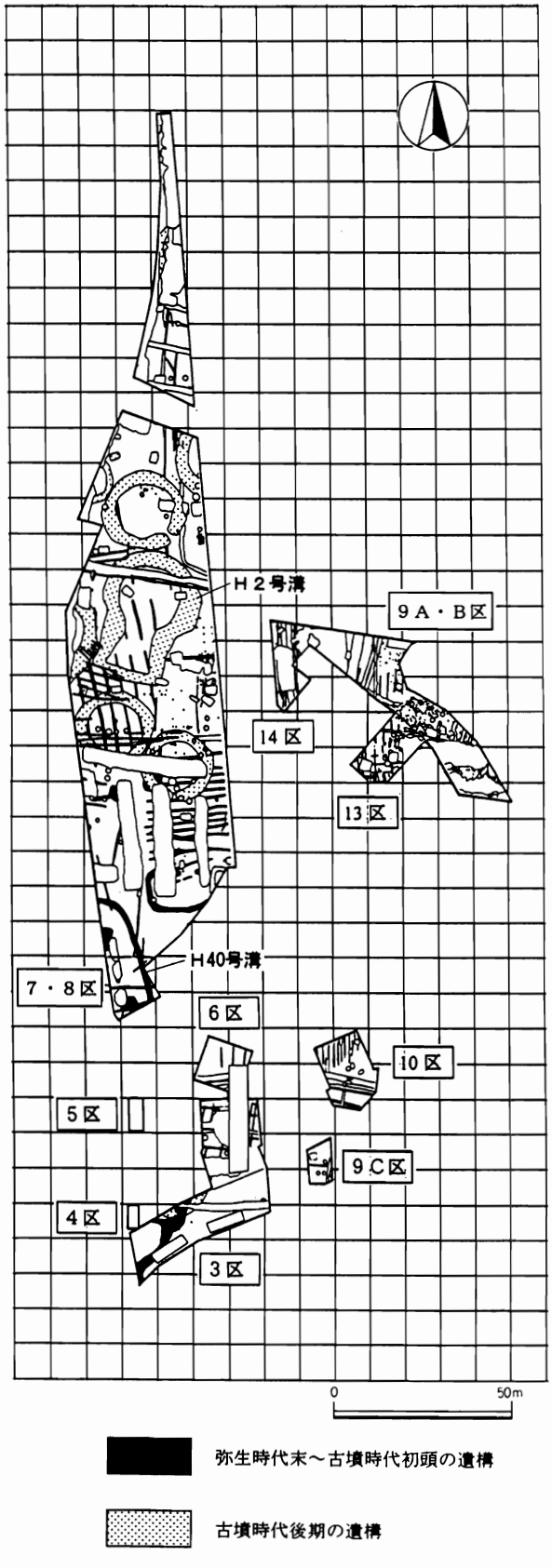
遺跡は相模川の下流、河口から北に約６～７km地点の東岸にあり、ＪＲ相模線宮山駅の北西200mに位置する。相模川左岸に形成された標高10～11mの自然堤防上に立地し、地形区分上は沖積微高地に属する。今回の調査地点は相模川の現河岸から50m程度の距離に位置し、現況水面高との比高差は約４～５m程度である。

寒川町域では同じ自然堤防上や低地での調査事例が無く、近隣で確認されている遺跡としては、北東約1.5kmの目久尻川西岸の台地上に倉見才戸（くらみさいと）遺跡が、南東1.5～２kmの小出川西岸の同一台地上に大蔵東原（おおぞうひがしはら）遺跡、岡田遺跡、高田遺跡、宮山遺跡が所在する。これらの遺跡では弥生時代後期の環濠集落や、方形周溝墓による墓域が検出されている。また南東約1.5kmの地点には、現存長約43mの前方後円墳である「大（おう）（応）神塚（じんづか）」が所在している。

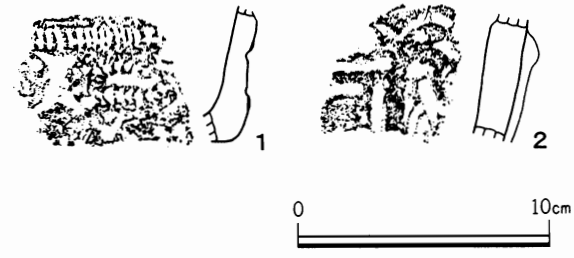
２．調査経緯

本調査は一般国道468号（さがみ縦貫道）の寒川北インターチェンジ建設事業に先立つもので、調査対象は進入出路に伴う盛土部分と橋脚、及びインターチェンジに隣接する側道部分と環境施設帯の範囲である。試掘調査は建設省（現在の国土交通省）からの依頼により、神奈川県教育委員会が平成10年９月と同11年２月の二回に分けて行った。

その結果、宮山中里（寒川町No.27）遺跡には弥生時代～中近世の遺構と遺物が包含されていることが明らかとなり、かながわ考古学財団が調査を実施することとなった。調査対象範囲には本遺跡に隣接する宮山台畑（みややまだいばたけ）（寒川町No.43）遺跡も含まれており、同じ期間内に併行して調査を行っている。両遺跡の発掘調査は延べ17.5ヶ月かけて行われ、平成14年３月末に終了した。



第２図　宮山中里遺跡全体図〔1/2,000〕



第３図　遺構外出土の縄文土器〔1/3〕

３．調査概要

縄文時代

中近世面の遺構外より中期の土器片が２点出土した(第３図)。該期の遺構は検出されていない。第３図１は中期中葉勝坂式土器の深鉢底部破片である。同図２も深鉢胴部片で、中期中葉～後葉の時期のものと推定される。

弥生時代末～古墳時代初頭

竪穴住居址４軒、溝状遺構32条、土坑２基を検出した。

住居址はいずれも断片的に検出したもので、全体の規模は不明である。残存部分から推定する限りでは、平面形は一辺が約４～５ｍ程度の隅丸方形又は長方形を呈するものと思われ、一部では地床炉や柱穴を確認している。住居址には重複は認められず、それぞれ５～30ｍ程度の距離をあけて不規則に散在している。

溝状遺構は長さ25～30ｍ・幅50～70cm程度の断面逆台形を呈するものが多く、７～10条の溝が主軸を揃えて等間隔に並んで検出されている。覆土中からは該期の土器片が若干出土する程度で、機能・用途は不明である。

また、７・８区南西隅では該期の集落に伴う環濠の可能性がある溝が検出された。H40号溝は上端の幅1.3ｍで断面Ｖ字状を呈し、調査区の西側から南側壁へ向かって弧形を描いて延びており、確認した範囲での長さは約31ｍである。

このH40号溝の覆土中位～上層で遺物が集中して出土した。第４図はH40号溝から出土した土器の一部である。器種は壺(第４図１～３)、台付甕(同図４・５)、高坏(同図７)、小型壺(同図８～10)がみられる。その他に小型の坩形の土器に脚部の付いたもの(同図６)や、椀形(同図11・12)が僅かに認められる。

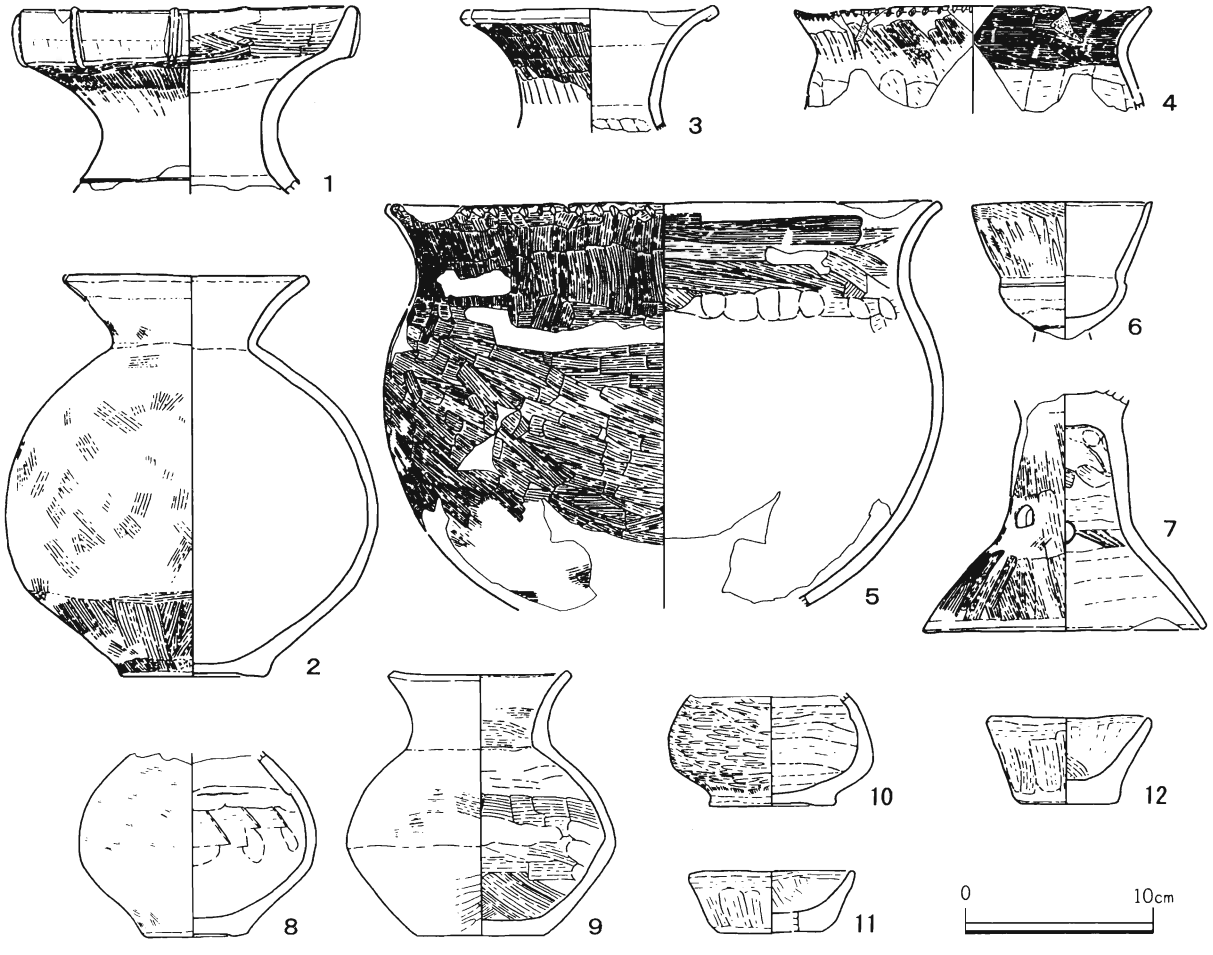
壺は口縁部が受口状を呈し、外面に棒状浮文を付すもの(１)、強く外反し断面角状の折返し口縁をもつもの(３)、直線的に立ち上がる単口縁のもの(２)がある。

台付甕は口縁部が短く外反し、口唇端に工具によるキザミを加える。器面調整はハケによるものがほとんどで、口縁下に縦位・胴部以下は横斜方向に施される(５)。稀に頸部以下に篦状工具による緻密なナデを加え、刷毛目を磨消しているものも認められる(４)。

高坏は脚部だけか、坏部の破片だけで出土しているものが多く、全体の器形をうかがえる例は認められない。脚部の形状は、太めで中位でくびれるもの(７)と、比較的細めで低い部位でくびれるものの両方が見られる。

小型の壺は個体によって器形がまちまちで、成形・整形技法も一定しない。８～10では個体毎に胎土も異なり、様々な系統のものを寄せ集めにしたかのような感がある。

小型の椀は個体毎に器形の細部に違いがみられるが、整形技法や胎土は共通している。外面は縦方向のヘラケズリに、口唇部のみ横方向のヘラナデで整形している。



第４図　８区H40号溝出土弥生土器〔1/4〕

古墳時代後期

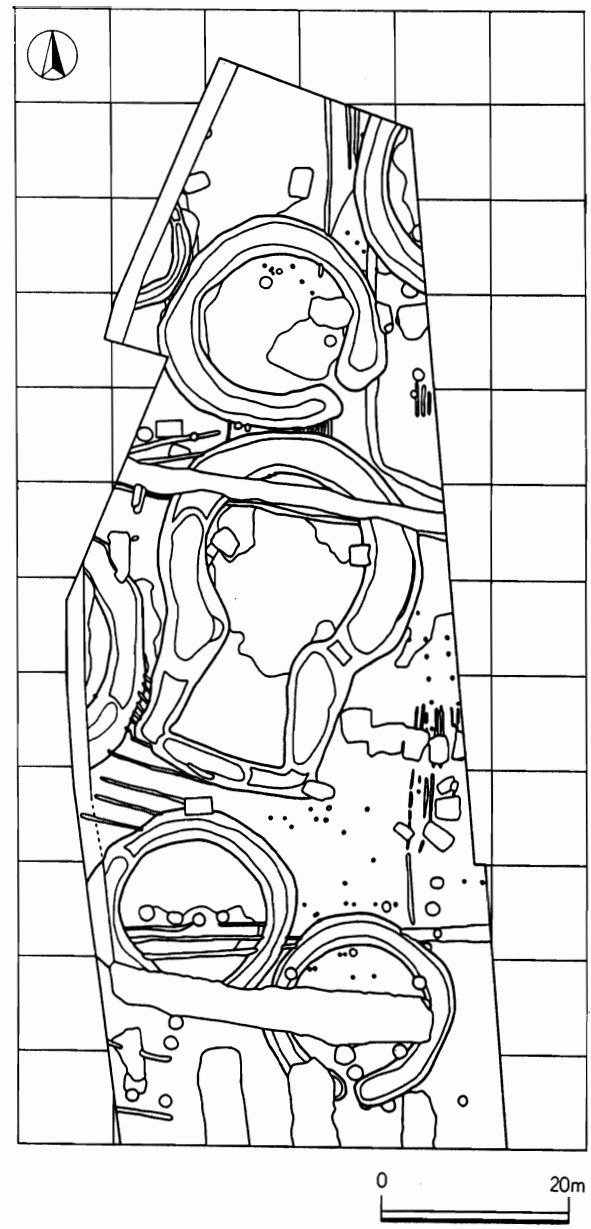
古墳９基と土坑２基が検出された。古墳はいずれも墳丘部分が消滅しており、周溝しか残存していなかった。周溝の平面形状から８基は円墳で、１基は前方後円墳であったことが推定される。その内７基は８区中央に集中しており、前方後円墳を中心に円墳が取り囲む様に隣接している（第５図）。円墳の周溝はどれも幅約３～４ｍほどで、内径12～15ｍ程度の規模である。

前方後円墳は、周溝の内側を墳丘そのものの規模と仮定して、全長約30ｍを測る。前方部は南端の幅が約13ｍ、前方部と後円部の境のくびれ部の幅は約８ｍである。周溝の上端幅は部位により違い、約３～７ｍの幅で変化する。最も幅が狭いのは前方部南側の溝で、逆に後円部両側では最も幅が広く、深くなっている。周溝の底面は船底状を呈し、後円部南東側と前方部の南西側を若干高く掘り残している。左右両側のくびれ部分や前方部南側の周溝内から、僅かにまとまって遺物が出土した。

第６図は前方後円墳周溝から出土した遺物である。１は須恵器短頸壺で、器高約10㎝程度の平たく潰れたような器形を呈する。西側くびれ部付近から破片の状態で出土した。

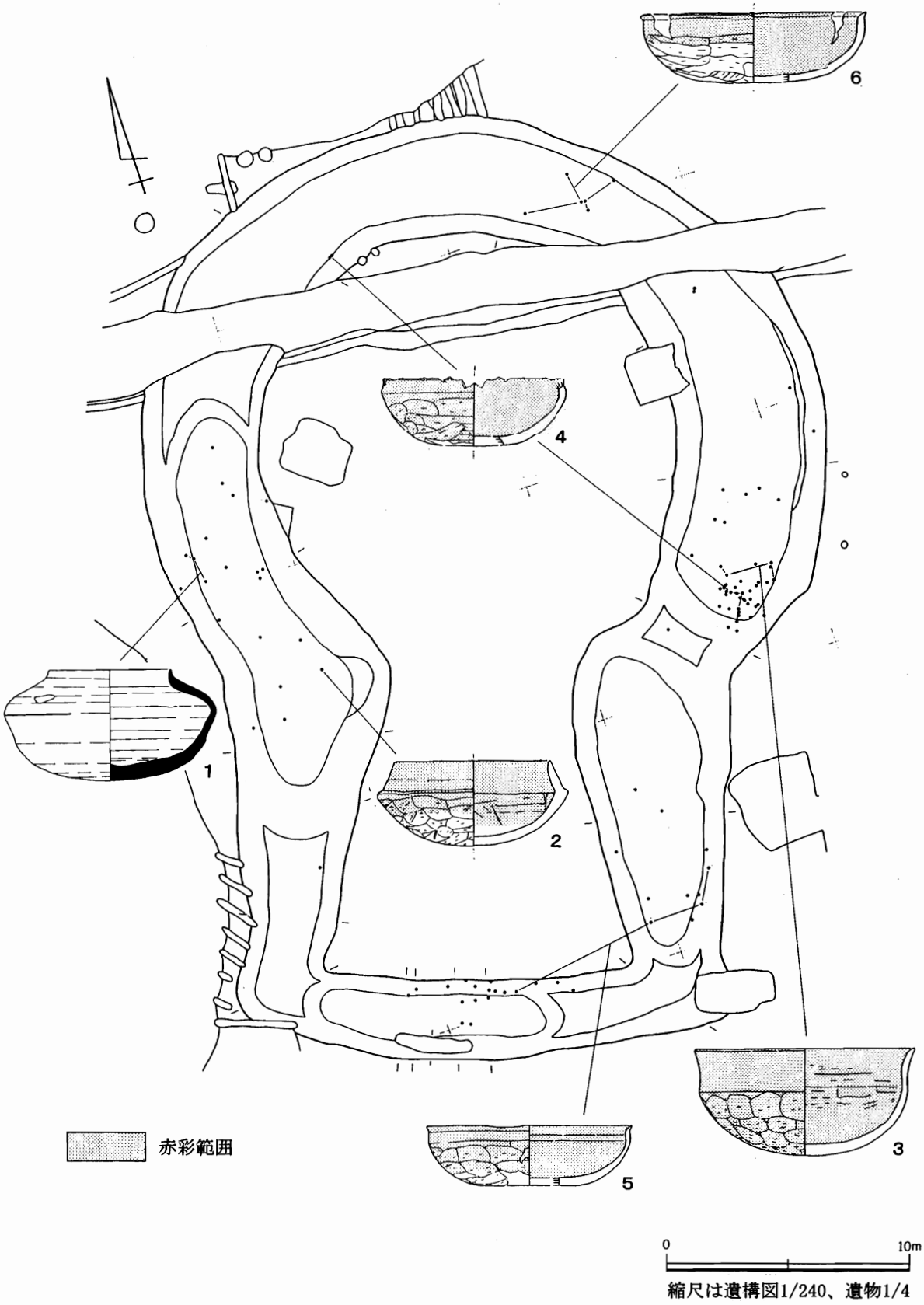
２・３は土師器坏で、２は西側くびれ部の底面付近から完形で出土した。口縁～稜部が肉厚で、反り返りながら内傾している。底部は丸底で、内外面に赤彩の痕跡が認められる。３は身深で稜が顕著でない、丸底の坏。内外面全体を赤彩される。東側くびれ部の底面から出土。

４～６も土師器の坏であるが、いわゆる「比企型坏」と呼ばれるもので、北武蔵を中心に利根川以南の関東地方に分布が認められる。いずれも口唇部が断面Ｓ字状に屈曲し、外面下半はヘラケズリで整形し、内面は緻密なナデを施している。外面は胴下半まで、内面は全面が赤彩される。破片の状態で、それぞれ周溝各所に散らばって出土した。



第５図　８区古墳群〔1/800〕

前方後円墳の周溝から出土した遺物の時期は６世紀後半～７世紀初頭に比定される。またその他の古墳の周溝からも土師器坏・甕や須恵器坏などが出土しており、これらの遺物の時期も同じ時間幅に限られる。



第６図　８区Ｈ２号溝（前方後円墳の周溝）と遺物出土状況

古代～中世

溝状遺構40条・土坑56基、畝状遺構12ヶ所、井戸址12基、竪穴状遺構19基、焼土址３基の他、ピット460基以上が検出された。

ピットは一辺30cm大の四角いもので、掘立柱建物址の柱穴と考えられる。このピットの分布が濃密な地点には井戸址、竪穴状遺構、畝状遺構も集中しており、これらの遺構群からは13世紀後半～14世紀代の遺物が出土している。中世前半期には、その集中範囲一帯が居住域として利用されていた可能性が考えられる。

近　世

溝状遺構15条、土坑11基、畝状遺構７ヶ所が検出された。富士宝永火山灰(1707年降灰)の確認面直下では、本調査の対象範囲全域にわたって耕作の痕跡が認められた。

調査区によっては溝状遺構や畝状遺構の主軸方位と遺構同士の間隔に規則性がみられることから、中世期の状況から一変して、該期にはこの自然堤防上一帯が耕地として利用されていたことがうかがわれる。

また本遺跡の立地する自然堤防の西端には、近世前半に築造された堤防が残っている。この堤防そのものは本調査の対象範囲外であったが、堤防側に隣接する地点では、堤防と一定の間隔をもって不整方形・長方形の掘り込みが検出されている。これらの掘り込みは長軸５～７ｍ、短軸３～５ｍ程度の規模を持ち、地点によっては何度も掘り直されて複雑に切り合っている。覆土は堤防から川寄りの低地にしか存在しない、砂と粘質土が混在する土で埋め戻されており、何の機能を持っていたかは不明である。こうした堤防関連遺構については年代・機能共に今後の検討課題である。

４．まとめ

本調査では弥生時代後期末の環濠集落と考えられる遺構群と、後期古墳群の周溝を検出した。

また古墳群の東側に13～14世紀代の中世期の居住域が確認され、18世紀以降の近世期には全体が耕地化したことも判明した。

特に古墳時代については、相模川流域では台地、丘陵上に前・中期古墳が分布することが従前から認識されていたが、後期古墳については資料的な制約からその分布傾向が明瞭ではなかった。そうした状況の中で、本調査では低地に古墳群が存在する事例を検出したという点で、一定の成果をあげることができた。

宮山中里遺跡にかつて存在した後期古墳は、１基の前方後円墳の周囲に複数の円墳が隣接して構築されており、ある程度の古墳群としてのまとまりが看取され、前方後円墳は古墳群の主墳的な役割をもっていたものと考えられる。

古墳は一個の埋葬施設であると同時に政治的な側面を持つものであり、今後、同様の低地における調査例が増加すれば、埋葬施設としての形態や古墳の分布域の問題だけでなく、宮山中里遺跡の古墳群を造営した集団と他の地域の勢力との関係や、該期の相模国内での集団関係を検討する一傍証ともなり得るものであろう。

文献

市川正史・渡辺　外　2001「宮山中里(寒川町№27)遺跡」『町内遺跡発掘調査発表会要旨』寒川町教育委員会

木村　勇・鈴木保彦ほか　1996『寒川町史８　別編考古』寒川町

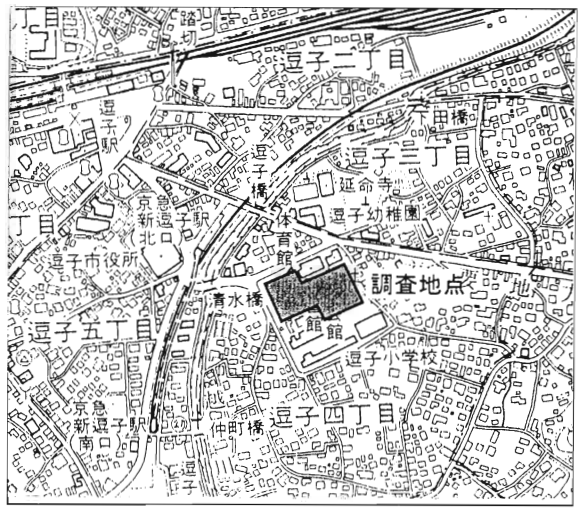
中村喜代重・立花　実　2000「寒川町高田遺跡」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』

逗子市　延命寺（えんめいじ）遺跡

－９世紀代の大型掘立柱建物址－

松山敬一朗

所 在 地　逗子市逗子４丁目1076番地１外
調査機関　延命寺遺跡発掘調査団
調査担当　松山敬一朗
調査目的　文化・教育ゾーン整備事業（ホール・図書館・生涯学習施設・小学校等建設）に伴う事前調査
調査期間　平成13年６月22日～平成14年３月31日
調査面積　約5880㎡



第１図　遺跡位置図

１．遺跡の立地

延命寺遺跡は逗子市４丁目1076番地１外に所在する。ＪＲ逗子駅の南東約400ｍの逗子市中心部に位置し、旧逗子市民体育館と逗子小学校グラウンドの北側約2/3が今回の調査区域となっている。主要地方道路横須賀・逗子線を挟んで北側には真言宗延命寺があり、遺跡名称の由来ともなっている。

遺跡はこの延命寺とＪＲ逗子駅との間を流れる田越川の左岸に位置し、川からは最短で70ｍ程である。現在の田越川河口部からは約１㎞上流にあたる。遺跡の現地標高は約４ｍを測る。

本調査地点における基盤層は黄褐色砂ないし青灰砂で、Ⅰ区側では標高2.5～３ｍ、Ⅱ区側では2.5～1.2ｍの高さで検出される。

遺跡周辺での調査事例は少ないが、平成10年６月に遺跡の南東約150ｍの地点で蟹田遺跡（註１）、平成12年５～７月に「逗子の大墓」（逗子市No.92遺跡）の調査が行われている（註２）。蟹田遺跡の調査では田越川流域の低地部としては初めて竪穴住居址が検出され、竪穴住居址およびその他の遺構から７～10世紀代の遺物が検出されている。「逗子の大墓」は近世の埋葬墓が遺跡の主体であるが、古代の遺構も検出されており、窪地状の遺構から７世紀後葉～８世紀初頭の土師器・須恵器が検出されている。

２．調査経緯

逗子市教育委員会は、文化・教育ゾーン整備事業地における埋蔵文化財の有無を調べるために、平成12年８月16日～９月1日に旧逗子市体育館敷地内、および平成13年１月11日～１月25日に逗子小学校グラウンドにおいて試掘調査を実施したところ、古代～中世後期ないし近世初頭の遺構と遺物が検出された。当開発事業地における埋蔵文化

財本調査の必要性が生じたため、延命寺遺跡発掘調査団が編成され、調査が行われる運びとなった。

平成13年６月22日から資材搬入及び外柵等の環境整備を行い、７月５日から本格的な調査に移行した。調査に伴い発生する残土を場内処理する都合上、一度に全面を発掘することはできず、調査区を４分割して執り行った。

３．調査概要

古代

古代　遺構：掘立柱建物址　10棟以上　土坑　10基以上　井戸　１基　遺物：土器類(灰釉陶器、緑釉陶器、須恵器、土師器)　金属製品（刀子、釘等）　その他（埴輪片、土錘等）

今回の調査では７世紀後半から９世紀後半（古墳時代後期～奈良・平安時代）の遺構と遺物が検出された。特に第ＩA区においては７間×２間の規模をもつ１号建物址をはじめとする多数の古代の掘立柱建物址と柱穴が検出された。現段階で建物の構成が明らかとなっているものは10棟未満であるが、今後の整理作業における検討によりその数は増すものと考えられる。これらの掘立柱建物址の帰属時期についても整理途上のため不明瞭ではあるが、８世紀後葉から９世紀後葉のものが主体をなすと考えている。

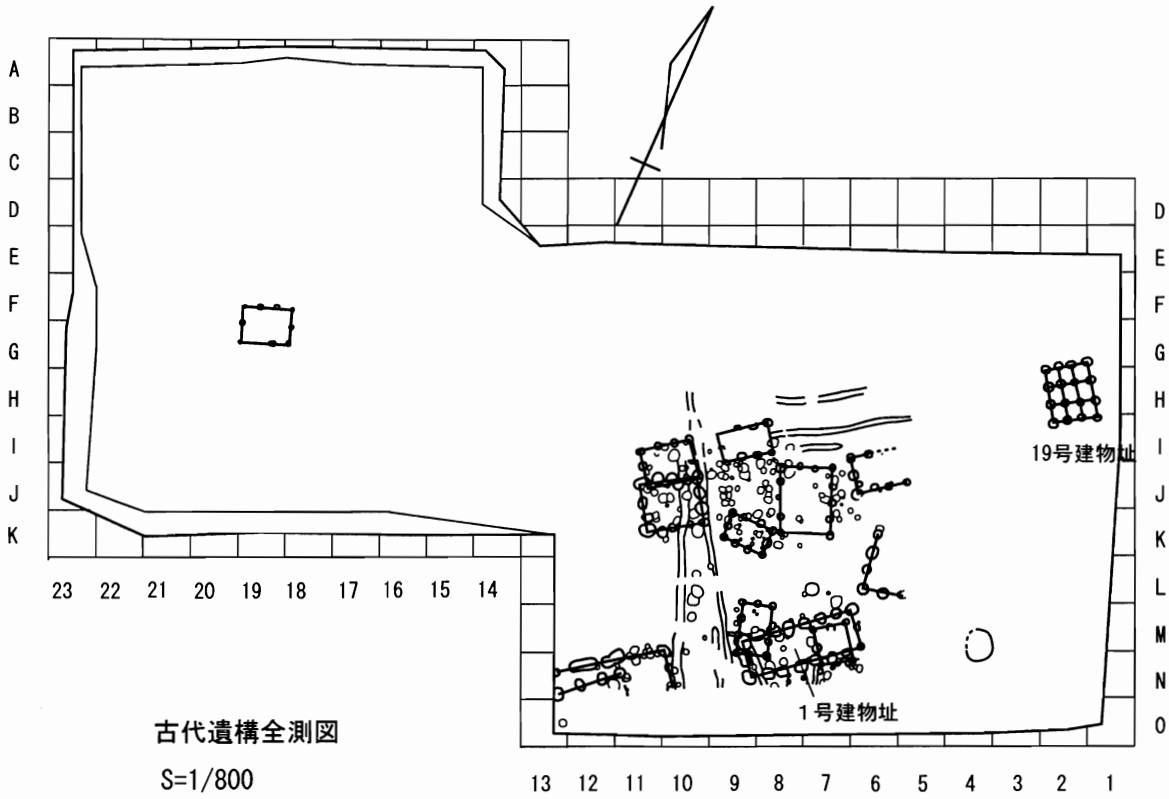
１号建物址はＩA区南部に位置する。桁行７間、梁行２間の長方形の建物で、東側柱列外側には廂が付くと考えられる。規模は桁行がおよそ12m、梁行4.0m～4.2mで、芯々部面積は48㎡となる。また東側廂部を加えた面積では62㎡前後になると推測される。柱間寸法は桁行が1.6～1.8m、梁行が約２mを測る。廂は東側柱列の約1.2m東に設けられている。柱穴掘り方はおおむね平面長方形を呈する。中世の５号溝の削平の影響を受けているP13～P18の検出規模はやや小さくなっているが、長軸が１m前後のものと、これより一回り大きい長軸1.5m前後を測るものがみられる。柱穴からは相模型坏・須恵器坏・灰釉椀等が出土しており、これらの遺物から本址の帰属時期は９世紀後半代と考えている。

19号建物址はＩB区北東部に位置する。桁行、梁行とも３間で、４本の束柱を有する総柱建物である。規模は桁行がおよそ5.9m、梁行約4.6mを測り、芯々部面積は約27㎡である。南側梁行柱列の柱穴のうち、内側の２穴は若干のズレをもっている。柱間寸法は桁行が約1.8m、梁行が1.5～1.7mで、梁行の方が若干短くなっている。柱穴掘り方はおおむね方形ないし長方形を呈するが、P２・P７のように円形に近い形状を呈するものもある。柱穴規模は60～70cmのものが主体であるが、およそ100cmに近いものもみられる。掘り方の深さは検出された範囲ではいずれも浅く、10～20cm前後である。明瞭な柱痕が認められる柱穴は少なく、また版築等を施した形跡は特に認められなかった。本址からの出土遺物は非常に少なく、微小な土師器片が検出されているのみである。そのため帰属時期は不明瞭であるが、９世紀代と考えられる。

これらの他に３間×２間規模の掘立柱建物址が５棟、３間×２ないし３間で柱穴構成が不明瞭なものが２棟、攪乱による破壊のため不明瞭ながら柱穴規模から推測して１号建物址に近い規模を持つ可能性がある建物址が２、３棟存在すると考えられる。

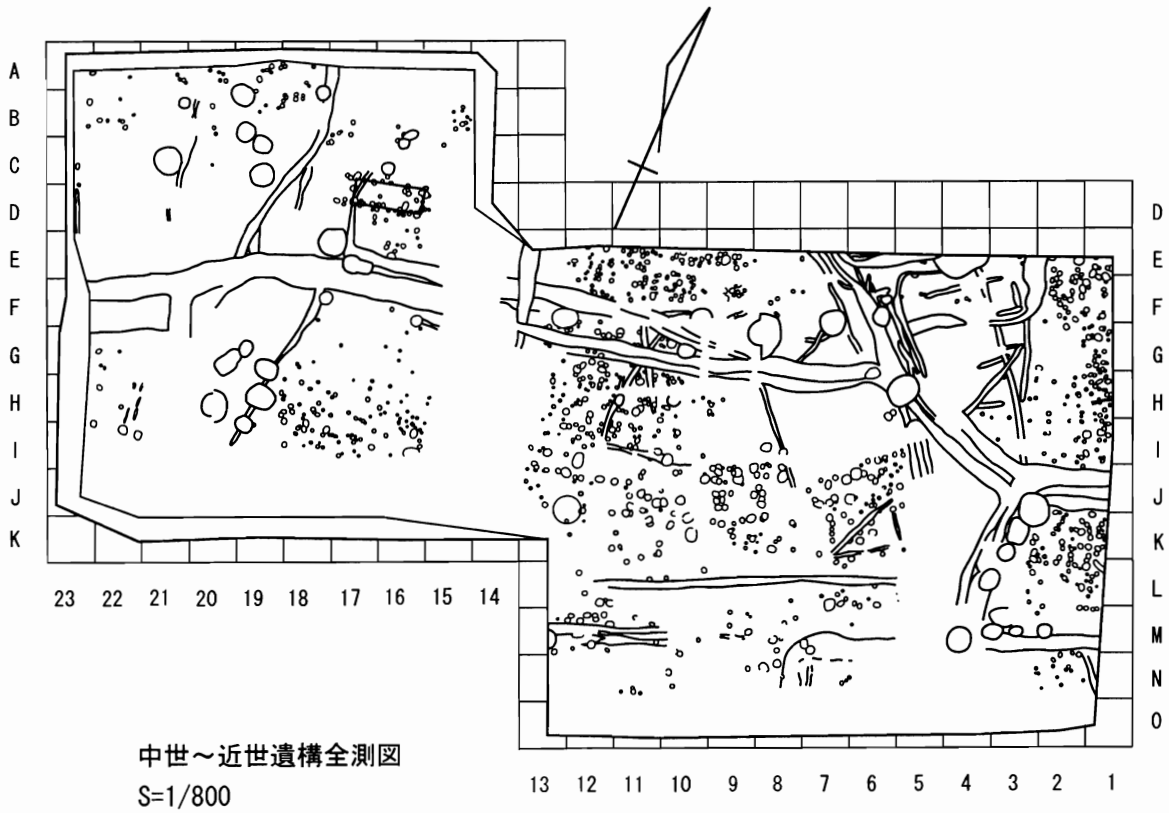
Ｉ区南東部で古代の所産かとみられる横板組みの井戸が１基検出されている。

今回の調査で出土した遺物は土器類では灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器・土師器等がみられる。時期としては古墳時代後期（７世紀後葉）のものが極少量ではあるが認められる。奈良・平安時代(８世紀中葉～９世紀後葉）のものが古代の遺物の多勢を占る。灰釉陶器・緑釉陶器の器種には主に高



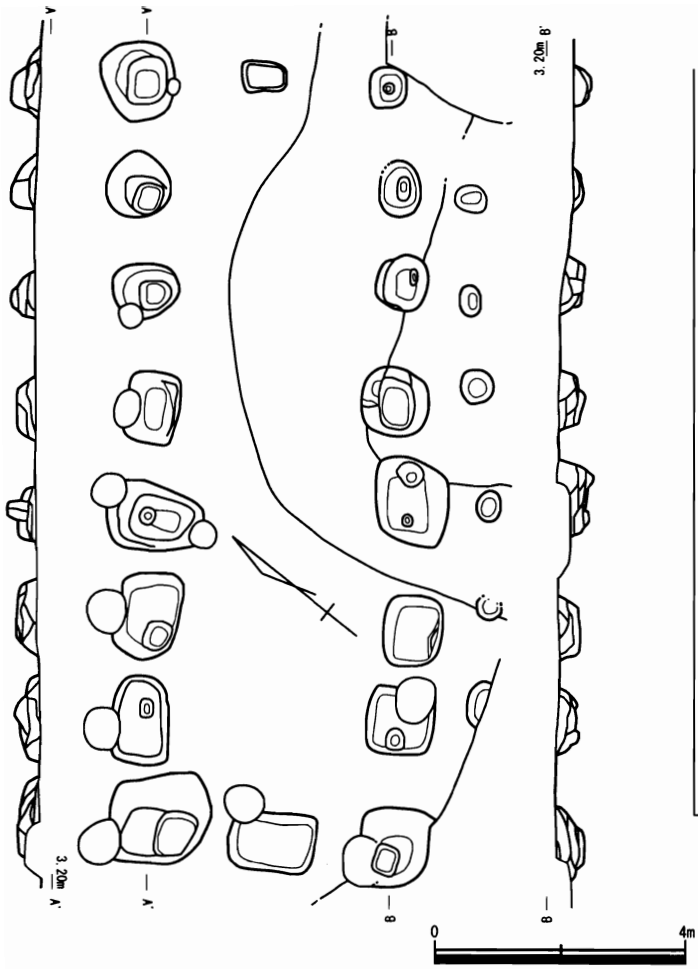
古代遺構全測図
S=1/800

1号石積み

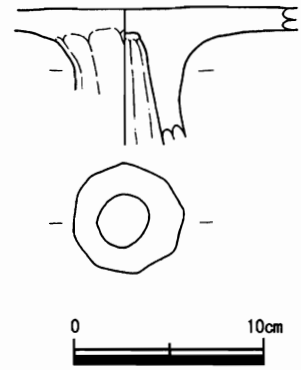


中世～近世遺構全測図
S=1/800

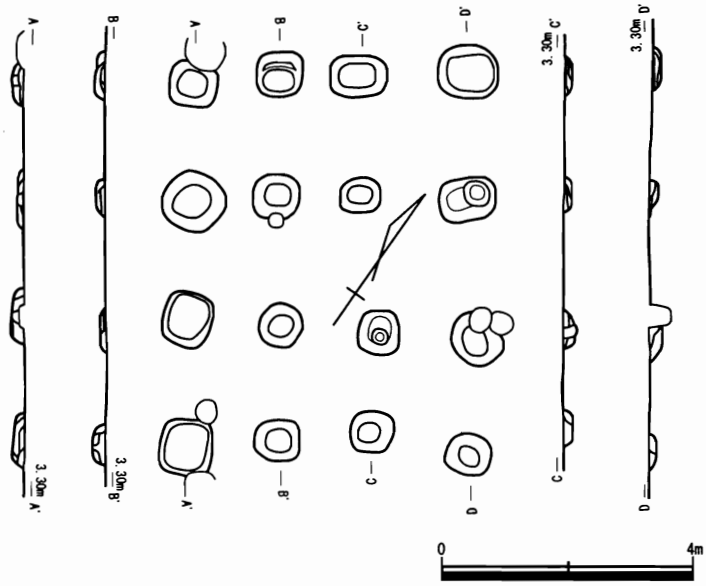
第２図　遺構配置図



第３図　１号建物址



第４図　５号建物址出土遺物



第５図　19号建物址

台付椀がみられる。須恵器は坏・皿・椀類および壷・甕類が検出されている。須恵器には白色針状物質を含むものが目立つ。土師器は坏がもっとも多く出土しており、ついで皿や甕類もみられる。９世紀代の坏は「相模型坏」と称される在地のものと、ロクロ成形による２種類のものが主体である。

これらの他に高坏とみられる土器の破片が２点検出されている。この土器は古墳時代に見受けられる高坏とは明らかに様相を異にするもので、主に８世紀代に平城京などの都城域で出土するタイプの高坏ではないかと考えている。また、時期は上記の遺物より若干古いが、５世紀中頃～６世紀代のものとみられる埴輪の破片が近世の井戸から１点出土している（埴輪片については横須賀市博物館の稲村繁氏にご教示頂いた）。

土器類の他には鉄製の刀子の一部、土錘が出土している。

中世～近世

中世～近世　遺構：建物址　２棟以上

井戸もしくは大型土坑　20基以上

溝　約80条　その他　柱穴　500基以上

遺物：土器類（かわらけ、瀬戸・備前・肥前等陶磁器）　金属製品（銭、刀子等）

木製品（椀等）　石製品（石臼、砥石等）

今回の調査では15世紀～19世紀代の遺構と遺物が検出された。遺構には掘立柱建物址・溝・井戸ないし大型の土坑、ピット、土壙墓等がみられる。遺構は調査区のほぼ全域に展開しており、その中でも井戸ないし大型土坑およびピット群の配置にはある程度の規則性がみられるようである。

この時期の遺構でまず目立つのが調査区を縦横に走る多数の溝の存在である。これらの溝には直線的な形状を呈するものもあるが、蛇行したり、分岐して流れるものが見受けられる。溝からの出土遺物には15世紀代のものから19世紀代に至る幅広い時期の遺物が含まれており、これらの溝が４世紀もの間改修を経ながら使用・利用され続けた状況を示すものといえよう。

井戸・ないし大型土坑は20基以上検出されている。石材ないし木枠により明らかな井戸枠が遺存していたものはその機能に疑いをもつものではないが、同様な規模ながらこれらの構造物を有さないものについては果たして簡易な井戸であるのか或いは水溜等の別な用途であるのかは現在の段階では判然としない。本調査地点ではⅠ区・Ⅱ区のいずれにおいても遺構検出面から50cmほど掘り下げると湧水がみられるので、単なる廃棄坑というよりはやはりこの湧水を利用した施設であることには間違いはないであろう。

中世から近世に属すると考えられるピットは少なく見積もっても500口以上存在する。これらのピットの大半は形状は方形ないし略円形を呈し、径15～40cm、深さ10～40cmの規模である。これらのピットは調査区内に散在しているようにみえるが、特に溝により仕切られている範囲である程度の集中する傾向をもつようである。今後の整理作業の進展によってはこれらのピット群の中で建物址に復元可能なものが数棟は含まれるであろうことが予想される。

近世の土坑墓はⅠB区において１基検出されている。形状はほぼ隅丸長方形を呈し、規模は長軸110cm、短軸89cm、深さ最大38cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。人骨は土坑の西寄りの位置で、屈葬の状態で検出された。副葬品として左肘付近に六道銭が、覆土の上層にあたる箇所からほぼ完形のかわらけが２点検出された。

４．まとめ

以上のように、今回の調査では８～９世紀代を主体とする古代の遺跡と、15～19世紀代の中世後半から近世の遺跡が複合して検出された。

検出された古代の遺跡の中で、１号建物址の存在は際立ったものといえよう。当該時期の一般的な集落遺跡を調査した場合、竪穴住居址とともに３間×２ないし３間規模の側柱式の掘立柱建物址が検出されることは良く知られており、この場合の掘立柱建物は竪穴住居とセット関係にある居住施設であると理解されている。しかし、今回検出された１号建物址の規模はその一般的な掘立柱建物のそれを大きく上回るものである。かといって、例えば鎌倉郡衙に比定されている鎌倉市の御成小学校遺跡のような郡衙施設の遺構と比べると、その規模や、他の遺構の規模・配置・配列等に見劣りする点が多々ある。このような郡衙以下、かつ一般集落の掘立柱建物址以上の遺構は県内でもこれまでに数箇所の遺跡で検出されているが、その意義付けについて確定的なものはなく、可能性として役所（国衙・郡衙等の出先機関に相当するもの)、有力富豪層の邸宅、或いは寺院等の施設が考慮されている。本遺跡の場合、瓦や土器・金属製品等に宗教的要素の強い遺物はこれまでのところ確認されていないので、寺院址の可能性は低いと考えている。また、機能的に倉庫かと考えられる19号建物址の存在、約6000㎡の敷地を調査しながら竪穴住居址がその残存すら検出されなかったこと、また出土土器の中で土師器煮沸形態の出土量が少ないこと等を考え合わせると、富豪層の邸宅とするよりは何らかの公的施設の可能性が高いのではないかと思われる。これらについては整理作業の進展と共に、地理的・文献的要素を加味した上で考察していかねばならない。

中世から近世にかけての時期では地割の溝を伴う井戸・大型土坑と建物に復元可能なピット群が検出された。遺物の内容については現在整理途上なため詳細は明らかにはしえないが、瀬戸美濃の天目茶碗や戦国期のてづくねかわらけなどの一般的な集落からはあまり出土しない遺物が検出されている。これらの遺物から推測して、遺跡周辺には少なくとも15～16世紀には社会的身分の高いものの居住施設があったと考えられる。遺跡名称ともなっている延命寺との関連は不明な点が多いが、これについても、今後の整理作業の進展と共に明らかにしていかねばならないだろう。

註

1）土屋浩美「蟹田遺跡（№114）発掘調査報告」『神奈川県逗子市埋蔵文化財発掘調査報告書』1　逗子市教育委員会

2）若松美智子『逗子の大墓（逗子市№92）発掘調査報告書』逗子の大墓（逗子市№.92遺跡）　発掘調査団

引用・参考文献

財団法人　かながわ考古学財団　1999「古代の大型建物跡　－役所か邸宅か－　記録集」『平成10年度（財）かながわ考古学財団公開セミナー』

国指定史跡旧相模川橋脚の調査

－史跡整備事業に伴う確認調査－

大村浩司

所 在 地　茅ヶ崎市下町屋1－551－2

調査機関　茅ヶ崎市教育委員会

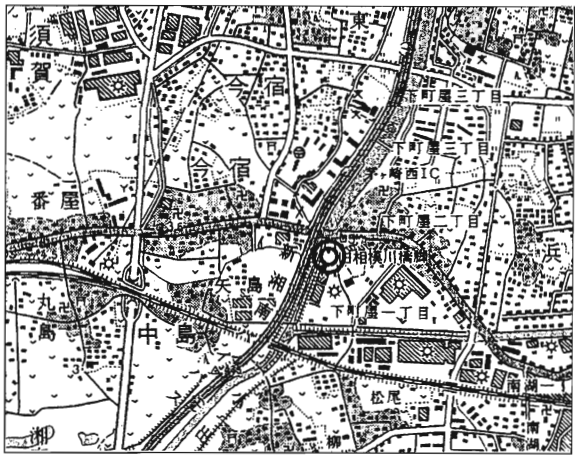
（教育長　渡邉二郎）

調査担当　大村浩司　渡辺清史　新倉　香

調査目的　史跡整備事業に伴う確認調査

調査期間　2001年6月22日～9月15日

調査面積　351.7㎡（発掘調査対象105.5㎡）



第１図　遺跡位置図（1/25000）

１．遺跡の位置と立地

国史跡「旧相模川橋脚」は茅ヶ崎市の南西部にあたり、相模湾の北側1.8km、現在の相模川の東1.5km地点に位置する。すぐ北側には国道1号線が東西に走り、西側には改修後の小出川が南流している（第1図）。

茅ヶ崎市の地形は、市北部を中心とした台地・丘陵地形と南部の低地に大きく分けることができる。このうち南部の低地は、さらに砂州・砂丘地帯と、南西部を中心として形成された自然堤防地形、後背湿地、旧河道などに細分される。「旧相模川橋脚」は、このうち南西部に形成された沖積低地に該当するが、その中でも旧河道にあたる。調査地点にあたる池底の標高は約1mを測り湧水する。

２．調査に至る経緯

国指定史跡「旧相模川橋脚」は、大正12（1923）年9月1日の関東大震災と翌年1月15日の地震によって茅ヶ崎市下町屋1－551－2に位置する水田に出現したもので、知らせを受けて現地の調査を行った歴史学者沼田頼輔博士によって、源頼朝の家臣稲毛重成が建久９年（1198）に架けた橋と推定された。

大正15（1926）年10月20日に国指定された本史跡は、多くの人々の努力によって、溜池、そして現在の護岸を持つ池の状態で保存されてきた。水面からは７本の橋杭が出ており、出現時のままの状態で見ることができる。しかしながら、80有余年が過ぎた現在、橋杭は露出部分を中心に痛みが進んでいる。痛みの主たる原因は腐朽菌と昆虫等による生物風化とみられ、また、空気にさらされていたことも腐朽を助長させている要因と思われることから、早急な対応が求められていた。

こうした状況を受けて、茅ヶ崎市教育委員会では、対応について文化庁ならびに県教育委員会と

協議を続けていたが、本史跡が指定後において正式に調査されたことはないことから、この段階で、指定地内における橋杭の残存状態や下部構造についての状況を把握するための発掘調査を実施し、それらの結果を踏まえ整備計画を策定することとした。調査は、平成13年度から国・県の補助を得ながら、茅ヶ崎市教育委員会が主体となり茅ヶ崎市文化振興財団の協力を得て実施した。

3．調査概要

調査は、史跡保存地の池内を対象として実施することとし、池底より下部の調査は、池全体のおよそ3分の1にあたる105.5㎡を対象として行った(第2図)。そして、①水草除去、②池の水抜き、③生物調査、④魚捕獲と放流、⑤ごみ除去、⑥泥土掘削搬出の順で池底の検出を行った。同時に池底全面の精査を実施し、この段階での橋杭状態を観察した(写真1)。また、橋杭の記録作成と並行して、橋杭№5・6・8部分を中心に調査区(1～4区)を設定して下層の調査を行った。なお、この段階で地下水を下げるためのウェルポイントを設定した。その後、南側部分において、橋杭の有無を確認するための調査区(5区)を設定し行った。記録は、通常の実測・写真撮影のほか、レーザーによる測量も行ないデータ化した。

調査はこの他、科学的分析、地質学的調査を行うとともに、考古学、土木工学、歴史学などの分

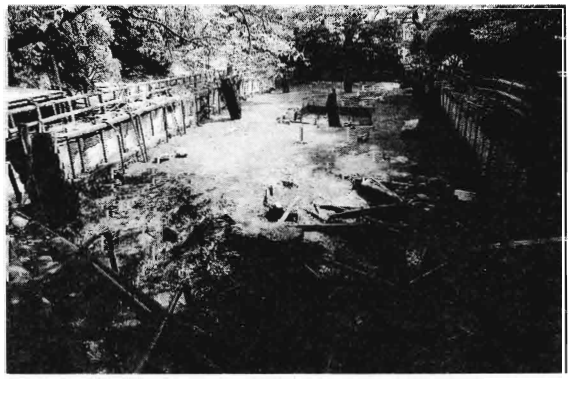
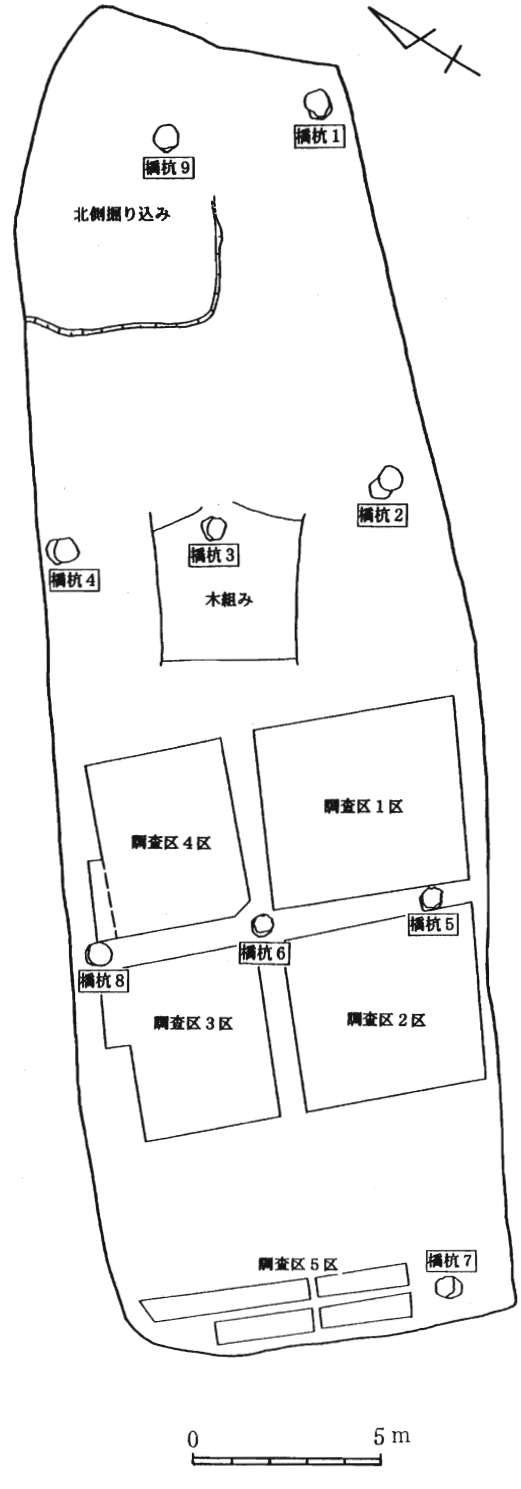


写真1　池底精査状況



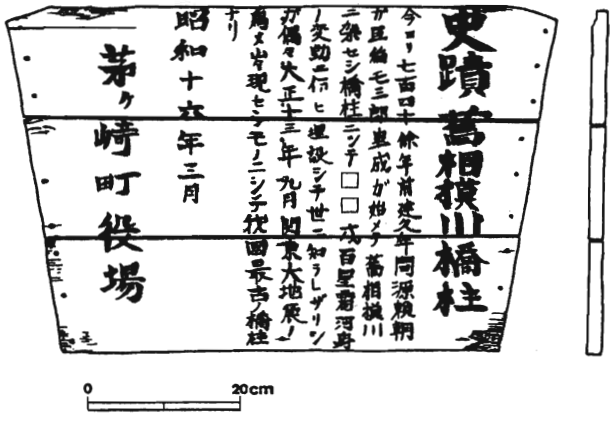
第2図　調査区図（1/200）

野における識者にも実見して頂いた。また、保存整備を進める上で、保存科学分野からの助言を頂いた。さらに、橋杭及び土層堆積部分についての造形保存を実施するとともに、一般公開を目的とした見学会も実施した。

(1)池底精査

泥土が約50～70cm堆積しており、多量の物(ガラス瓶・ゴルフボール・釣竿・空缶など)が投げ込まれていた。精査の結果、保存池北側部分で掘り込みを確認した。全体に北側に緩やかに傾斜しており、橋杭No.9が掘り込み内に位置する。また、この掘り込みは池外にも広がっている。掘り込みは、泥土を中心とした土で埋まっており、中から木製品、加工木、木片、五輪塔、礫、骨などが出土している(写真2)。この内、「昭和16年」の年号が記された茅ヶ崎町役場時代の説明看板が注目される(第3図)。

また、池のほぼ中央で木組みを検出した。橋杭No.3を取り囲むように1辺約3.5mの方形を呈しており、横板を2枚重ね内側に杭を打って支えている構造である(写真3)。中からは、顕著な遺物は出土しなかった。この他、池底の数ヶ所から掘り込みが確認できた。



第３図　説明看板実測図（1/10）

(2)橋杭調査

池底精査により、水面より出ている7本に加え2本の存在が明らかになり、合計9本出現したことが確認された。橋杭の位置は南北方向に4列、東西方向に3列が配置されており南北方向が長い。柱間は南北方向の心々で平均10.45m、東西方向で平均4.34mを測る。また、南北の長軸方向がN－45.5°－Eを測る(第2図)。

橋杭の状況は、池の水面より出ている部分については、全体の腐朽が進んでおり、特にNo.1とNo.5は白蟻の被害が進んでいる。だたNo.2については腐朽は少なく状況はやや良好であった。また、水面下における橋杭状況は、露出部分に比べ全体に良好であるものの、徐々であるが腐朽が進んでいる状況が観察できる。さらに、池底より下層部分についての状況は、No.5を見る限り良好である。なお、橋杭の樹種はヒノキと同定されている。

橋杭9本のうちNo.5については、下部まで調査を実施した(第4図　写真4・5)。その結果、橋杭の規模は、残存長３m70cm、太さ約60～70cmを測る。橋杭は横木などの組み合わせ構造はなく一本で独立したものであった。形状は、下部を段々細くし、

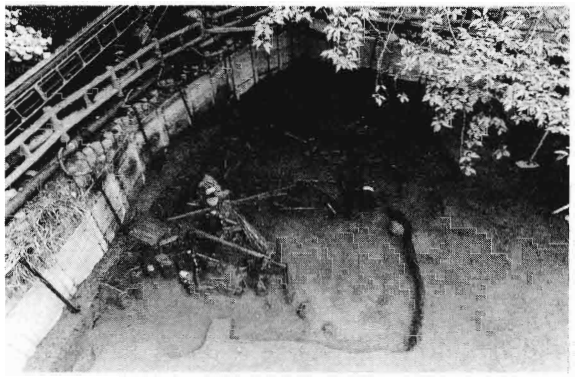


写真２　北側掘り込み

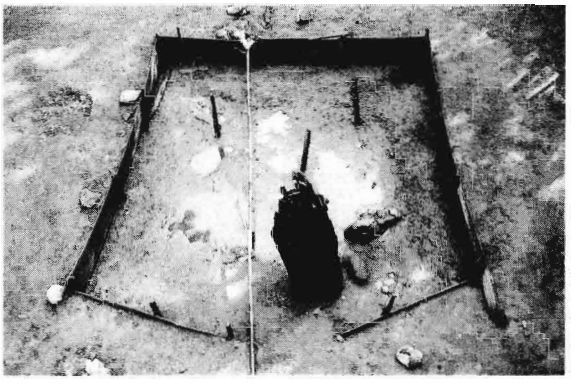


写真３　木組み全景

先端を尖らせたもので、加工の際の手斧目が観察された。なお、木の状況から橋杭として本来の木を天地逆に使用していることが窺えた。

(3)調査区調査

調査区(1～4区)において、水平に堆積する葉理構造のある砂層と砂礫層が互層に堆積していることを確認し、これらが旧河川の堆積を示している可能性があると判断した。また、これらの堆積層

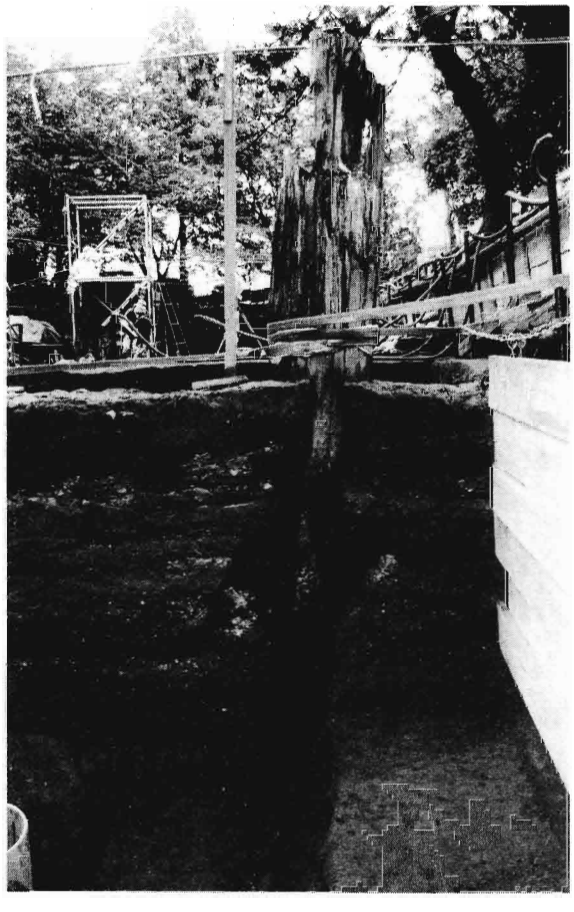


写真４　橋杭NO5検出状況

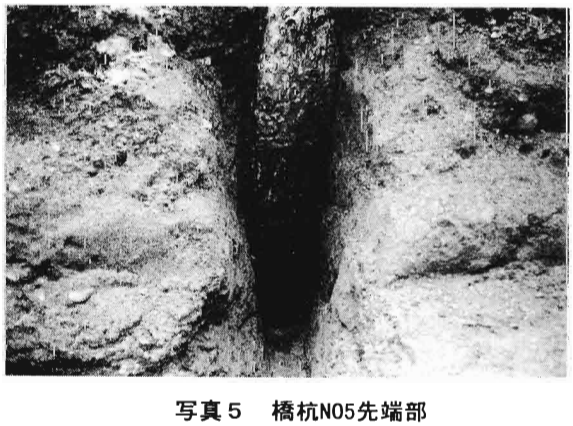
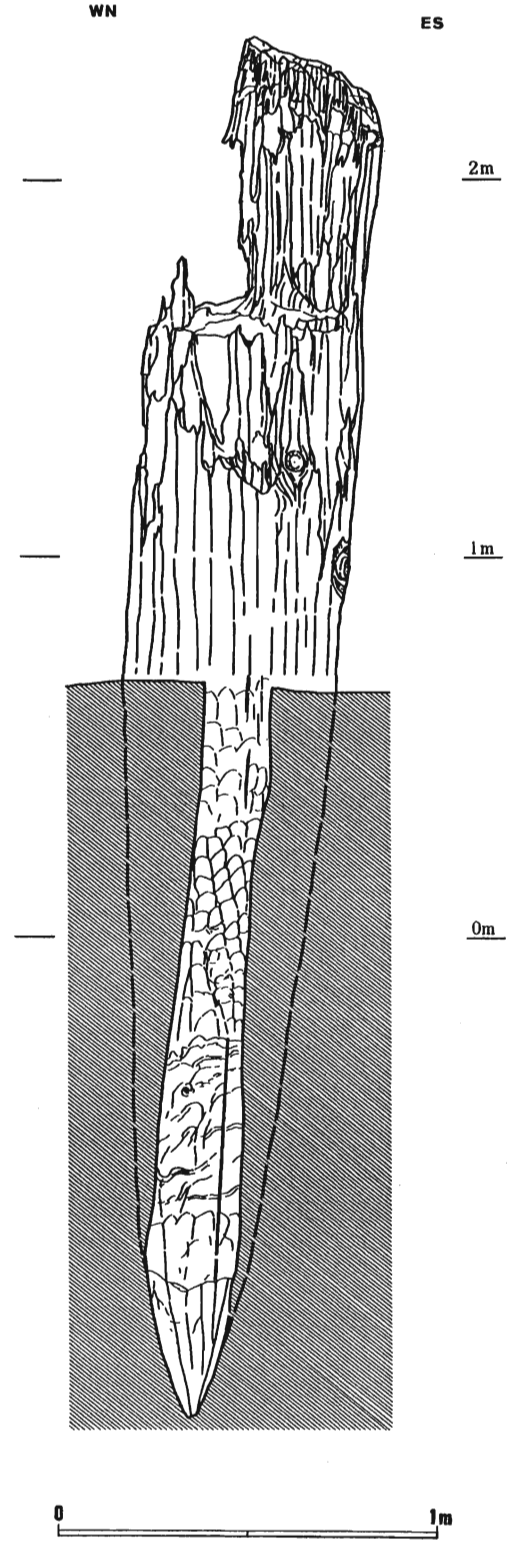


写真５　橋杭NO5先端部



第４図　橋杭NO5立面図（1/20）

中から古代の土器片(土師器・須恵器)が出土している。

調査区の数ヶ所で、地震の影響による痕跡をみることができた。1区南壁面において噴礫(写真6)、4区西壁で噴砂、同じく4区北壁で噴礫を観察した。また、橋杭No.5・6・8周囲で液状化にともない吹き上がる砂を確認した。さらに、No.8については、平面的に橋杭の周囲に吹き上がった状態が発見できた(写真7)。なお、調査区1・2区では、粘土層が南北に割かれた状態が検出されたが、この原因については、地震による地割れ、あるいは氾濫による侵食などの可能性が考えられる(写真8)。

調査区5区において橋杭有無の確認作業を行ったが、調査できた池底面から1m50cmまでには存在しないことが判明した。

発見遺構

橋杭9本、木組み(大正以降)、北側掘り込み(大正以降)、調査区内掘り込み(大正以降)、旧河道

地震に伴う痕跡

出土遺物

五輪塔(風空輪・火輪・水輪・地輪):中世　かわらけ、陶器:中世　ガラス製品:近現代　金属製品(鎌・その他):近現代　獣骨、木製品(看板・杭):近現代　土師器・須恵器:古代

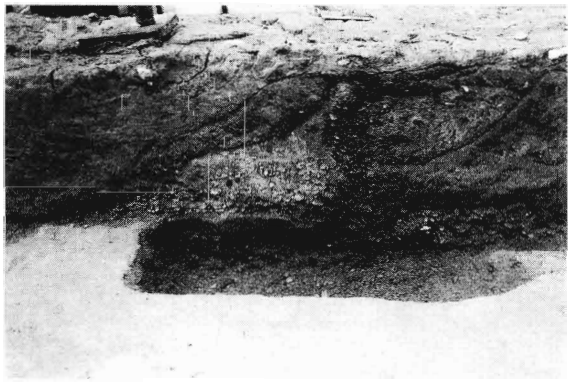


写真6　液状化(1)

写真7　液状化(2)

4. 暫定保存について

調査終了後、調査前と同様に池での保存を行っているが、水面より出ている部分の橋杭状況が悪いことから、橋杭に常時水を供給する方法で応急処置を行っている。

具体的には、橋杭に腐蝕布を巻き土嚢を積み上げ、毛細管現象を利用して水を供給している。また、白蟻の被害がひどい2本については、噴水状に水を全体にあてて保存を行っている。

なお、整備事業のために、従前の状況が変化したことから、説明看板を設置し、市民等への周知を行っている。

5. まとめ

国指定史跡「旧相模川橋脚」は、関東大震災で出現後、沼田博士らの努力で史跡指定され今日まで保存されてきたが、昭和初期の溜池時代、戦後の保存池時代を通して詳細な調査は行われていなかった。

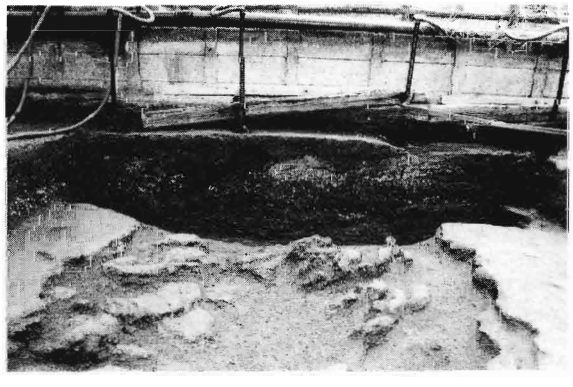


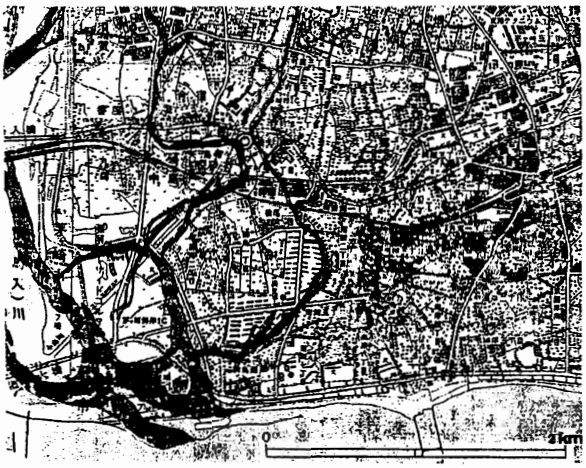
写真8　泥土ブロック

今回の確認調査では、調査結果に述べたようにいくつかの知見が明らかになった。

まず、保存池の底面精査により、水面上では観察できなかった2本の橋杭(No.8、No.9)を確認することができ、合計9本の存在を明らかにした。これは、沼田博士が現地で確認された段階での内容を裏付けたことになる。また、底面において北側掘り込みと木組を検出した。ともに橋杭周辺であり、北側掘り込みからは「昭和16年」の茅ヶ崎町役場作成の説明看板が出土していることなどから、性格については特定できないが、橋杭出現後の大正末から昭和初期の時期に行われた調査や整備の足跡と考えることができる。

発掘調査は、池底の約3分の1を対象に実施し、橋杭下部状況と土層堆積を調査した。この内、橋杭No.5としたものは全体を検出することができ、その規模と形状を明らかにした。その結果、今まで不明であった橋杭の構造が、横木等の組みものを持つものでなく、1本単独で設置されておりその形状も先端を細く尖らせていることが判明した。こうしたことは、比較的資料の少ない橋遺構の内容を知る上で重要であろう。また、今後、橋全体の構造を考えていく際の資料ともなり得ると思われる。

調査区で確認できた土層堆積部分から地震の痕跡(噴砂・噴礫・地割れ?)が観察され、当地が地震による影響を受けていたことが明瞭になった。これらの資料は、橋杭出現のメカニズムを考える上で欠かせないものであり、関東大震災の足跡としても貴重である。また、同じく土層堆積から河川に特徴的にみられる堆積も確認でき、おおよその流向を把握できたことは、本史跡が橋遺構であることを裏付けるものであり、今後、川底などの位置も含め詳細な検討が必要になると思われる。さらに、砂礫層から古代遺物が出土しているが、これらは磨滅していることから、上流から流されてきた可能性が高い。周辺古代遺跡への注意が必要であろう。



第５図　旧河道と現在の地形（1/50000）

以上、簡単に成果を見てきたが、今後、今回の調査成果を踏まえると同時に、他分野の調査・研究も合わせ、橋の構造や河川の様子、さらには橋につながる道など本遺跡を取り巻く景観復原を行なっていく必要がある。

出現後およそ80年を経た橋杭は、残念ながら痛みが進みこのままでは完全に朽ちてしまう恐れがある。本遺跡は、橋遺構として注目される内容のほか、地震による遺構の出現という特殊な内容が加味されたもので、全国的にも貴重な遺跡であることを再認識し、後世に残していくための抜本的な保存方法の作成と周辺整備を行なっていく必要があると思われる。

文献

茅ヶ崎市教育委員会　2002『国指定史跡　旧相模川橋脚』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告16

横浜市　史跡称名寺境内旧伽藍跡

―　平成12・13年度の確認調査成果　―

（財）横浜市ふるさと歴史財団

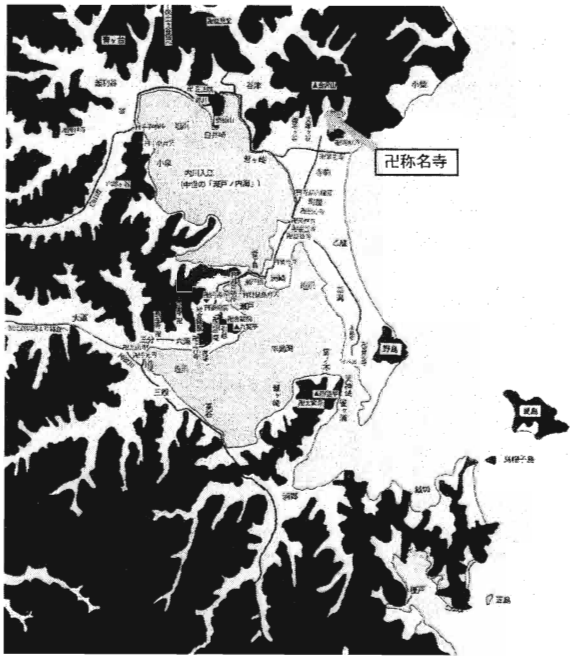
所 在 地　横浜市金沢区金沢町212番地外
調査機関　（財）横浜市ふるさと歴史財団
調査担当　鹿島保宏・鈴木重信・橋本昌幸
調査目的　遺構の遺存状況等の確認調査
調査期間　2000年11月13日～12月27日
　　2001年10月9日～12月27日
調査面積　2000年度：500㎡
　　2001年度：720㎡

1．遺跡の立地

史跡称名寺境内は、京浜急行金沢文庫駅の東方約0.8kmに位置する。背後には、西から東にかけて金沢山・稲荷山・日向山の三山が取り囲み、南側は低地が開けている。かつては惣門から「瀬戸ノ内海」や平潟湾を望むことができたと思われる。

横浜市域南部にあたるこの付近は、地形的には三浦丘陵に区分され、開析の進んだ標高100mほどの丘陵地形が広がり、北方で多摩丘陵と接している。その基盤をなしているのは、新第三紀中新世から第四紀更新世の葉山・三浦・上総の各層群で、称名寺周辺では上総層群に属する野島層の路頭が多く見られる。

六浦湊を有する中世における金沢は、都市「鎌倉」の経済・交通・防衛等の面で東の要衝の地であった。称名寺と鎌倉を結ぶ主な陸上ルートは「瀬戸ノ内海」に沿って迂回する「白山道」と大道―六浦湊―洲崎を通過するふたつがあり、後者のルートは13世紀中頃に整備され、幹線道としての役割を担うこととなった。



第1図　金沢八景と称名寺の位置（註1文献より）

2．調査経緯

史跡称名寺境内の発掘調査は、昭和年代に大別2期に分けて実施されている。第1期は、1971（昭和46）年から1974年度にかけての調査で、講堂および金堂と「阿字ヶ池」東側の施設群の確認が主たる対象とされた。第2期は、庭園苑池整備事業に伴い、1978年から10カ年にわたって実施されたものである。この結果、反橋・平橋の復原をはじめ護岸・景石等の修景が施され、浄土式庭園が甦った。

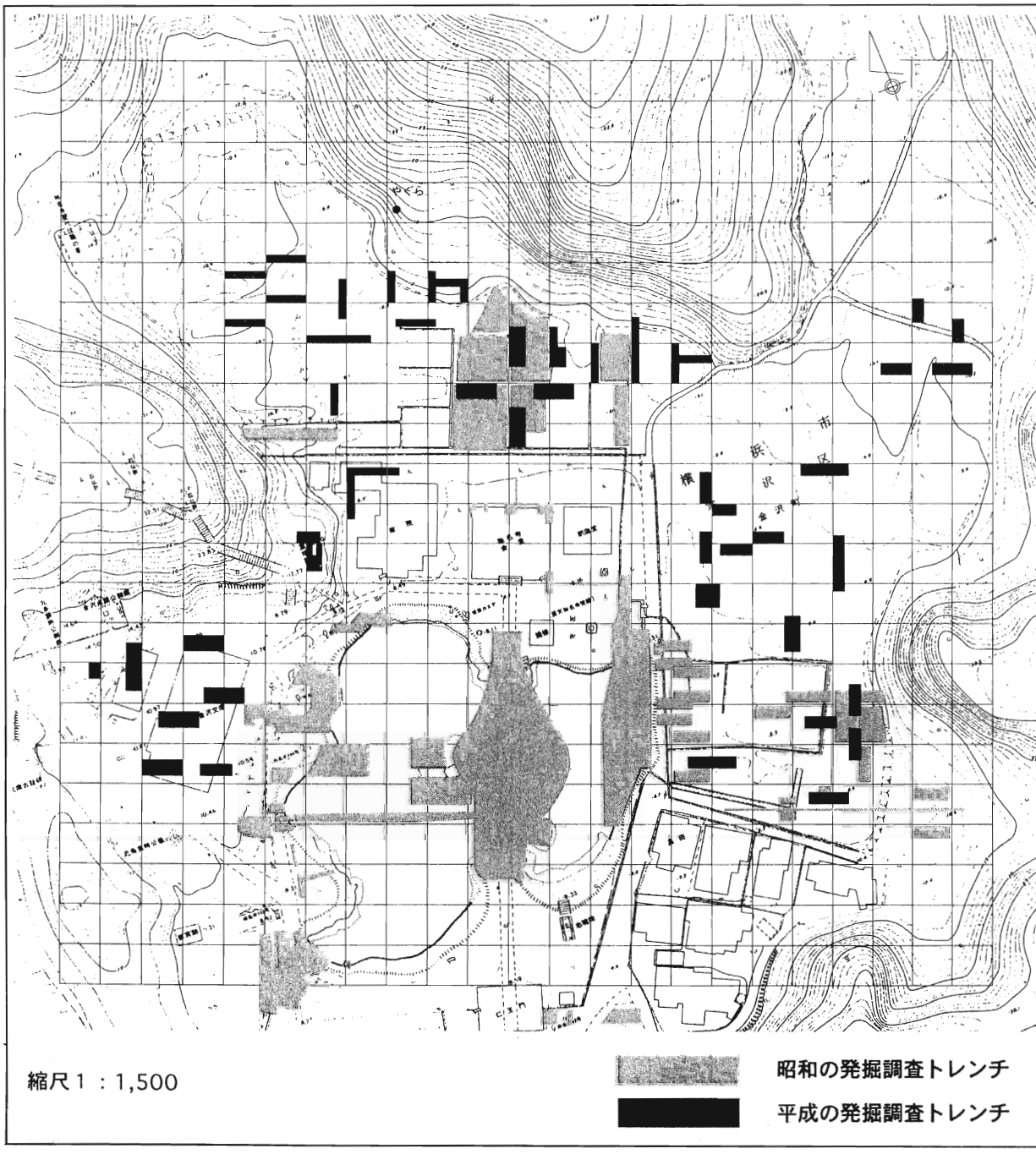
平成年代に至り、庫裡の建替えに伴う小規模調査が横浜市教育委員会により、1999（平成11）年2月に実施された。その後、同教育委員会は、苑池部分を除く旧伽藍跡全体の状況を把握するため、2カ年にわたる確認調査計画を策定し、2000年度および2001年度に当財団が受

託して発掘調査を実施した。ここにその調査結果の概略を発表する。

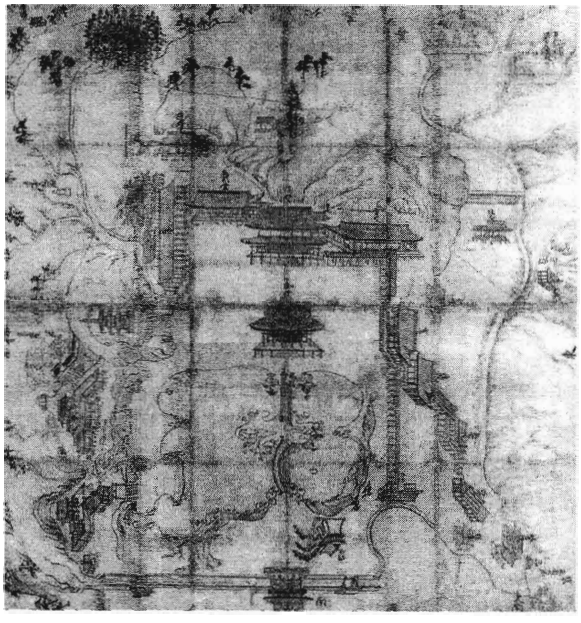
3．調査概要

発掘調査は、国重要文化財「称名寺絵図」（紙背の「結界記」に元亨3年2月24日の日付あり）、および森蘊の称名寺境内旧伽藍復原図（註2）を参考に進めることとした。

調査にあたっては、金堂と仁王門の中軸を結ぶ線を南北方向の基線とし、仁王門北端部を起点とする中軸線に直交する基線を設け、10m四方のグリッドで調査対象地をおおった。各試掘調査区は、このグリッドのラインに合わせ、各施設の想定位置に設定した。



第2図　称名寺境内旧伽藍跡関連調査区位置関係図



第３図　「称名寺絵図」

2000年度の調査は、講堂とその背後に位置する方丈・浄地・両界堂・僧坊等の諸施設、および1999年に確認されたやぐらを対象として実施した。2001年度の調査は、三重塔部分、「阿字ガ池」西側の旧県立金沢文庫跡地部分および東側に位置する雲堂・庫院・行堂・無常院・経蔵等の施設群を対象とした。

2000年度の主な調査成果

【講堂・浄地部分】

この部分は昭和第１期の調査である程度確認されていた部分にあたる。講堂については、十文字に試掘調査区を設定し、まず基壇端部および上面の状況確認を実施した。この結果、東西25m、南北19m、高さ約40cmの規模を有すること、上面は後世の耕作等により削平されており、礎石等が遺存しないこと、基壇周囲に幅0.7～1.9mの浅い溝状の窪みがめぐり、一部に砂質凝灰岩製の礎石が見られることなどが確認された（写真１）。次いで、講堂基壇の築成状況を断面で観察するために、一部を基盤層まで掘削した。この結果、基壇周辺で確認された地業面より70～80cm下に基底面があり、基壇周

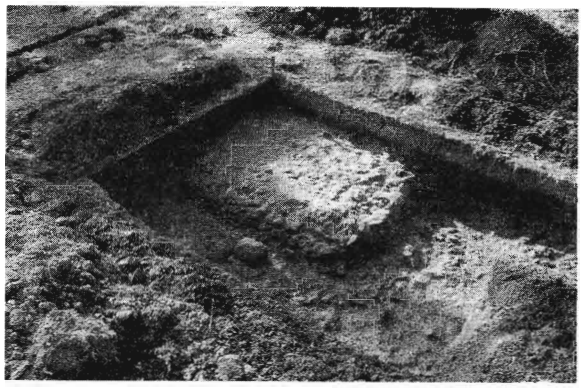


写真１　講堂基壇北東隅部の検出状況（北東より）

写真２　講堂基壇西側の土層堆積状況（南西より）

辺の地業面のレベルで土層の堆積状況が異なることが明らかにされた。地業面より上位が比較的大きなシルト岩ブロックを乱雑に積上げられ、隙間に灰褐色土やシルト岩の小ブロックが充填されているのに対して、下位ではシルト岩ブロックと黒褐色土を互層とする版築が施されている（写真２）。建替えに伴う痕跡であろうか？

講堂の北北東に位置する浄地部分の調査では、明確な建物址を検出できなかったが、講堂から

写真３　講堂北側の溝遺物出土状況断面（南より）

続く地業面の下から平面方形を呈する複数のピット、講堂北端部より６ｍほど北で完形のかわらけ・鉄滓・ふいごの羽口などの遺物、多量の炭を伴う溝状遺構が検出された（写真３）。

【方丈部分】

礎石状の砂質凝灰岩切石やシルト岩切石やピット、片側縁辺にシルト岩ブロックを伴う浅い溝状遺構が検出された。

【両界堂部分】

東西方向に複数の砂質凝灰岩製の礎石とその抜き取り痕が確認された（写真４）。また、これらの北西部に南北約３ｍ、東西1.5mの範囲に玉石敷きが検出されている（写真５）。これらは両界堂に関連するものと推定されるが、礎石については、検出状況から複数時期・複数の組み合せが想定される。この部分では、青磁の香炉片・かわらけ・瓦などが出土している。

写真４　両界堂北側の礎石検出状況（西より）

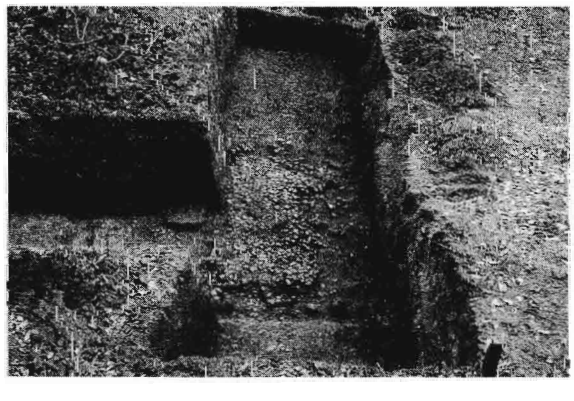


写真５　両界堂北西部の玉石敷き検出状況（北より）

【僧坊および僧坊裏建物群】

試掘調査区７区を設定したが、広範囲に及ぶため検出された遺構相互の関連を把握することが困難であった。検出された遺構としては、礎石状の砂質凝灰岩切石・玉石列、杭留めの縁木を伴う溝などがある。礎石状の切石は、検出レベルが異なるものが多く、その並びも明確ではない。複数の地業面が認められ、玉石列は宝永火山灰層直下の地業層、縁木を伴う溝はそれより下位の地業層で検出されたものであり、この下部にも数層の地業層が認められる。

【その他の遺構】

ここでは「称名寺絵図」に描かれていない主な遺構について簡単にふれる。

・水路状遺構

両界堂推定地の南側に設定した調査区で検出された。幅70cm、深さ20cmをはかる東西方向の溝で、縁石を伴う。縁石は北側に砂質凝灰岩、南側にシルト岩の切石が配されている。東半部は抜き取られており、遺存状態が悪い。底面から「永福寺」銘軒平瓦２点（いずれも「永」の字を欠く）を含む瓦類や多量のこけら状薄板

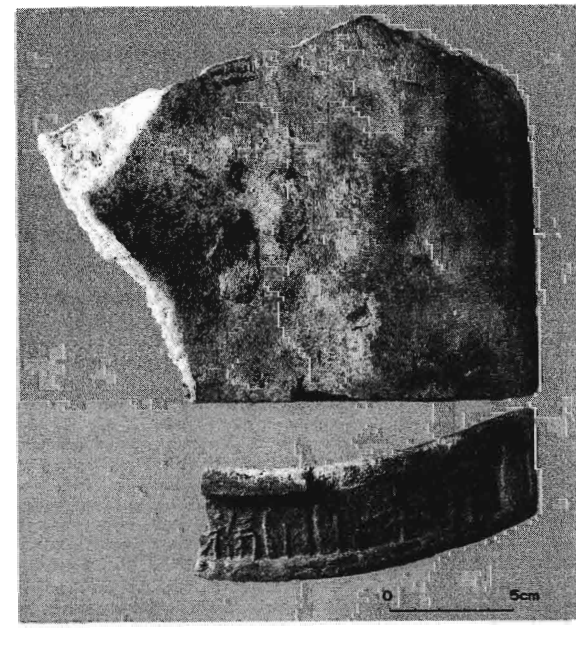


写真６　水路状遺構出土の「永福寺」名字瓦

が出土している（写真６）。

・やぐら

両界堂推定地の北西の崖面に位置する。玄室および羨道部のみ調査した。玄室は４×４ｍの方形をなし、横断面の形状は高さ約２ｍの長方形を呈する。底面は、奥壁部で標高約10mをはかり、羨道部に向って緩やかに傾斜し、羨道側に段がある。壁際には排水溝が巡らされている。西側袖部付近の底面には深さ約60cmの長方形掘り込みが見られる。羨道は、玄室中央より西に寄っており、底面はやや急勾配をなしている（写真７）。主軸方位はN―38°―Eである。出土遺物には、かわらけ・陶器・瓦・伊勢系土鍋などがある。15世紀代に降るものと推定される。なお、「称名寺絵図」に描かれている結界の内側に位置する点は注目される。

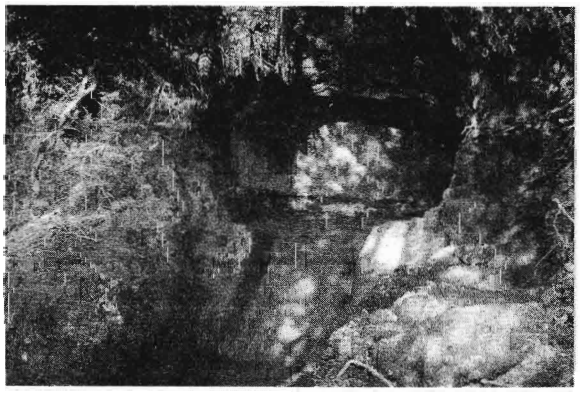


写真７　やぐら近景（南より）

2000年度の主な調査成果

【三重塔部分】

表土層下がシルト岩盤層となっており、方形のピット群が検出された（写真８）。そのうちのひとつには、安山岩製の礎石をとどめるものがあった。東側の調査区では岩盤の直上に層厚８cmほどの地業層が存在し、ピット群の多くはこの地業層を除去した段階で確認された。中央部は周辺部に比べ、レベルが高い傾向にある。出土遺物は少なく、鉄製の釘が目立った。

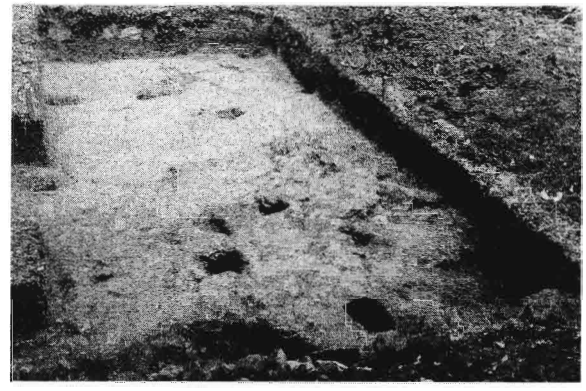


写真８　三重塔北側調査区検出のピット群（東より）

【阿弥陀堂部分】

称名寺絵図に「称名寺」と記されている。旧県立金沢文庫の跡地にあたり、阿字ヶ池畔の参道より約２ｍ高い平場となっている。調査の結果、各所に旧県立金沢文庫建物の基礎が存在し、上面が削平されているなど、全体の遺存状況が良くないことが判明した。深いところで現地表下約３ｍに旧表土層（黒色土）とみられる整地面があり、一部に玉石敷きやシルト岩の石列が検出された。その直上に数枚の地業面が確認され、その上位には２ｍ以上にわたってシルト岩ブロックが積上げられていた。この調査対象地南東部に設定した調査区では、阿字ヶ池側の端部が確認され、約35°の傾斜面が検出された。この下端には珪質砂岩・珪質頁岩を主体とする玉石敷きが認められ、景石とみられる凝灰質砂岩の大ブロックも見られた。底面より若干浮いたレベルで15世紀に降るかわらけが出土しており、当該地が現在の状況に拡張されたのはそれ以降と判断された。また、斜面を覆う状況で、破砕貝を混じえる黒色土の堆積が認められた。この土層堆積状況は北東部に設定した調査区でも確認されており、平地上面に化粧土として用いられていた可能性が考えられる。斜面下端の標高はおよそ7.8mをはかり、阿字ヶ池畔に続くものと推定される。この部分では旧表土整地面まで約40cmをはかる（写真９）。なお、称

写真 9　阿弥陀堂部分南東部の地業層（南より）

名寺絵図には「称名寺」に至る階段と北側の顕時・貞顕墓所に至る階段が描かれており、今回の調査でこのふたつの階段の確認を試みたが、その状況を明確にできなかった。また、墓所については、「称名寺」の敷地同様シルト岩ブロックを積上げて造成されていることが判明した。

【講堂と阿字ヶ池を結ぶ中軸線東側の施設群】

地蔵院・骨堂を除く経蔵・雲堂（うんどう）・庫院（くいん）・行堂（あんどう）などを対象とした。この一帯はやや広い面積がある上、苑池の整備に伴う調査の際に約１ｍに及ぶ残土が置かれており、この除去作業を伴った。そのため、調査地点をある程度限定せざるを得なかった。経蔵推定地の調査では砂岩製の礎石が検出されたが、経蔵との関連は明らかにできなかった。この検出面より下部にも地業面が認められた。雲堂および庫院推定地の調査では、明確な建物の痕跡は認められなかった。かわらけ等の遺物が集中して出土する地点が存在し、少なくとも３面の地業面が存在することが明らかにされた。浴室推定地では、礎石状の切石が単発的に検出されたが、詳細を明らかにすることができなかった。ここでも複数の地業面が確認された。東司（とうす）推定地では、北東―南西方向の樋状の木製品が検出された。長さ３ｍ以上、幅50～60cmをはかり、一木を刳り貫いたものである。一部に裏込めとみられるシルト岩ブロックを伴う。東司との関連については不明である。

【その他の主な遺構】

・石列遺構

東側中央部の無常院推定地に設定した調査区で検出され、北東―南西方向に延びる。幅60～80cm、長さ７ｍ以上をはかる。10～40cm大の凝灰質砂岩を主体とし、火熱を受けたシルト岩切石も認められる（写真10）。上面の標高は7.8～8.0mで、北から南に若干傾斜している。性格等については不明で、称名寺絵図にも描かれていない。

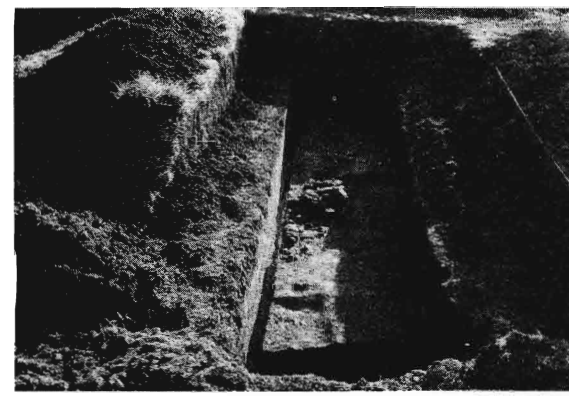


写真 10　無常院推定地検出の石列遺構（北より）

４．まとめ

２カ年にわたる確認調査の結果、断片的であるが各所に何らかの遺構が遺存すること、また、複数の地業面が存在し、称名寺絵図に描かれていない遺構も存在することなどが確認された。特に、複数の地業面の存在は、金沢（かねさわ）北条三代にわたる造営・整備の過程とどのような関係にあるか、今後の大きな課題となるものである。

（文責：鈴木重信）

註

1　神奈川県立金沢文庫編　1993『金沢八景―歴史・景観・美術―』

2　森　蘊　1969「結界図による称名寺の復原的考察」『大和文化研究』第14巻第10号

津久井城跡

－戦国居館と近世屋敷の調査－

野口浩史・近藤英夫

所 在 地　津久井町根小屋字城坂223ほか
調査機関　津久井城遺跡調査団
調査担当　近藤英夫
調査目的　学術調査
調査期間　平成8年～継続中
調査面積　約1370㎡

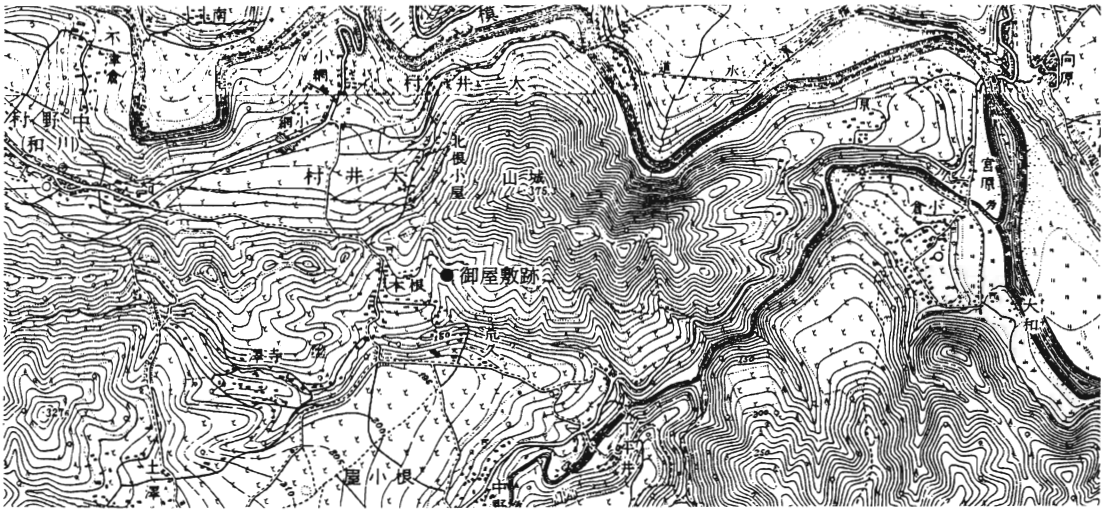
1．遺跡の立地

津久井城は神奈川県北部の津久井町、城山町にまたがり築造された根小屋式城郭である。山間部を抜けて相模原台地に注ぎ込む相模川の谷口部の南岸（右岸）にそびえる独立峰に構築されている（第1図）。この独立峰は「城山」「宝ヶ峰」と呼称されており、現在、「城山」全域は県立公園の建設が計画されており県有地化が進められている。中世においてこの地域は小田原北条氏と甲斐武田氏の境目に位置し、重要な役割を担っていた。

2．調査の経緯

城山の公園整備を契機に本調査団の前身である津久井城址調査団によって、平成6年に同地点の発掘調査と、津久井城全域の地名調査および文献研究が行なわれた。

平成7年に新たに津久井町教育委員会を中心に調査会、調査団が組織された。津久井城について学術的に調査、研究を行ない、これを中心とした地域文化について理解を深めることを目的としている。調査期間は平成8年から5年間であったが、終了後さらに3年間の予定で調査を継続している。発掘調査は、可能な限り遺構の保護に努め、また将来、史跡公園として整備されることを前提とし



第１図　遺跡位置図（1/30000）大正14年の地図を使用

て調査後は埋め戻しを行ない、遺跡の原形を保つようにすることを主旨として進めている。また、発掘調査の他に周辺や頂上部の曲輪の測量調査（第2図）を行なっている。本調査の刊行物としては、年度毎の概報である『津久井城の調査（Ⅰ～Ⅴ）』があり、5冊の総括としての報告書を現在作成中である。

また平成10年から現在にかけて、かながわ考古学財団によって根小屋地区に所在する伝近世代官守屋左太夫の「陣屋跡」、そして「しんでん」の発掘調査が行なわれ、牢屋の沢を挟んで「陣屋跡」との間にかかる橋の存在を明らかにしている。

3．調査の概要

津久井城の歴史について文献史料からは築城時期は明らかでないが、『妙法寺記』(1524) に「(前略) 未津久井ノ城不落」とあるのが文献での津久井城の初出である。そして天正18年（1590）には豊臣秀吉の小田原攻めにともない落城している。落城後は代官として彦坂氏、伊奈氏、守屋氏、野村氏がこの地を治めており、寛文4（1664）年の検地によって「農民持畑」となっている。

発掘調査地点はおもに、城主内藤氏が屋敷を構えたという伝承や絵図面が示す「御屋敷跡」である（第3図)。「御屋敷跡」では発掘調査によって、中世後期から近世にわたる遺構、遺物を発見した。

以下、その概要について述べる。

中世

文献からは築城の時期は明らかでないが、15世紀から16世紀初頭まで遡る可能性があるかわらけおよび陶磁器が出土している。これにより文献上の津久井城の初出以前から曲輪が存在していた可能性が強い。遺構の時期細分は未だ検討中であるが、中世を通して掘立柱建物が営まれ、後半になって堀などの防御施設が造営されたことが分かっている。

掘立柱建物はF－4・5区で主に発見している(第4図)。方形、円形の柱穴群を確認しているが、建物規模の復元には至っていない。掘立柱建物の柱穴の重複によって数度の建て替えが行なわれたことが確認できる。また、これら柱穴群の周辺で焼土の堆積を確認している。そしてかわらけを転用した坩堝（第9図12)、鞴の羽口（同13・14）が出土しており、鍛冶工房址の存在が推測できるが具体的な遺構は未だ明らかではない。

これら掘立柱建物よりも遅れて、曲輪中央部を横断するように長さ37mを超える（一部未調査)、深さ3mの箱堀（1号堀）が作られている。1号堀の山側に沿って土塁が積まれていたことも堆積状況から確認している。西側の土塁は地山のロームを削り残して基部としたうえで版築盛土を行なっていることが確認できた。

曲輪東側のG・H－5・6区では、2号堀が造営されている。長さ8m、深さ1.6mである。2号堀の南には、底部に石敷きが施され、礫石と粘土による壁を持った半地下式の建物址を発見している。類例からみれば「焔硝蔵」の可能性が高い（第5図)。

また曲輪西側B－6区では土塁の切れ目から道状の硬化面を発見している。この面自体は近世にあたると考えられるが、下面で石組みの側溝を発見し、近世以前にも道として使用されていたことが確認された。根小屋から牢屋の沢を回りこんで御屋敷跡に至る虎口がこの付近に存在したと考えられる。

出土遺物は15世紀後半から16世紀前半の陶磁器（第9図1～3)、16世紀中頃の擂鉢（同4）などが出土しており、これらに箱形のかわらけが伴っている。

中世末—落城直後

堀の覆土からは天正期（1572～1590）の陶磁器（第9図6)、かわらけ（同7・8）が出土している。このことから、1号堀の埋め立て時期は天正18年

の落城直後の時期に相当するものと考えている。

近世

近世、すなわち堀が埋め立てられてからは少なくとも3時期の遺構が確認されている。曲輪中央のD・E－4区では堀を埋めた後に石組の水路を設け、それを埋めた後に2回にわたって礎石建物（古：2号建物址、新：1号建物址）が作られている。2号建物址の規模は、10×6mである。その直上には、焼土・灰土が堆積しており・火災が生じたことが確認できる。

また、曲輪西側B－4・5、C－4区ではL字形に配された石積み（1号石積み）が構築されている。これは中世の土塁を切り崩して平坦にした後に土地区画したものと考えられる（第6図）。

今夏の調査で、曲輪東側から入口施設と思われる遺構を発見している。石を2段に積み上げて壁をつくり、脇に側溝を配置している（第7図）。

この時期の出土遺物は、志野（第9図9）・唐津（同10）の皿などが挙げられる。

寛文4（1664）年に検地によってこの一帯が「農民持畑」になったところで御屋敷跡における居住が終わる。畝跡の発見および幕末から明治時代にかけての陶磁器の出土から、それ以後にも土地利用がなされていたことが明らかである。

4．まとめ

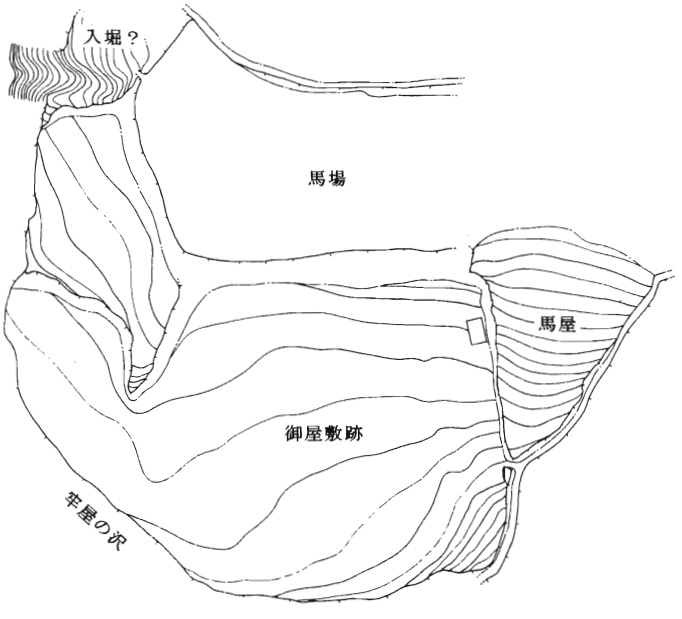
現在までの発掘調査において少なくとも15世紀末から17世紀までの遺構、遺物を発見した。今春からの調査は、今夏発見の入口相当施設を中心にして発掘調査を行なっていく予定である。発見遺構や遺物、特に鍛冶関連施設、焔硝蔵などについては先学諸兄にご指導を賜りたいと願う次第である。

文献

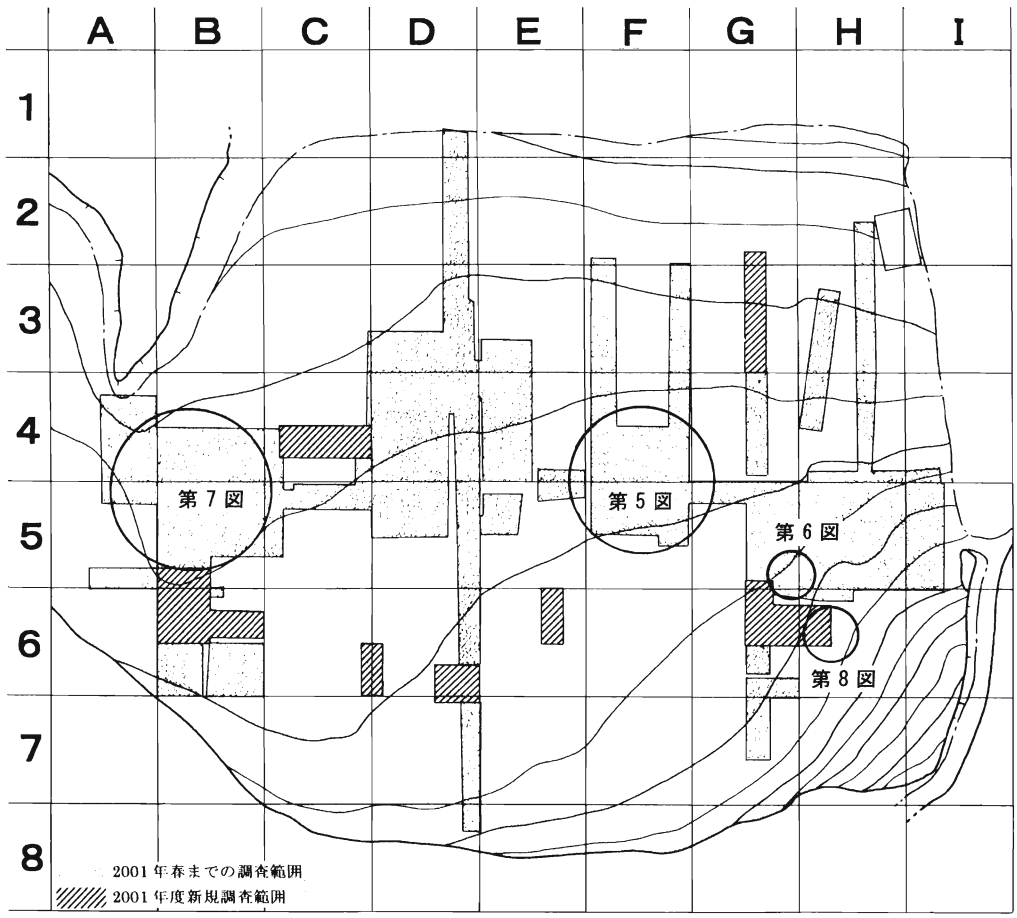
神奈川県津久井土木事務所・津久井城址調査団『津久井城』、1998

近藤英夫ほか『津久井城の調査Ⅰ～Ⅴ』津久井城遺跡調査会・津久井町教育委員会、1997～2001

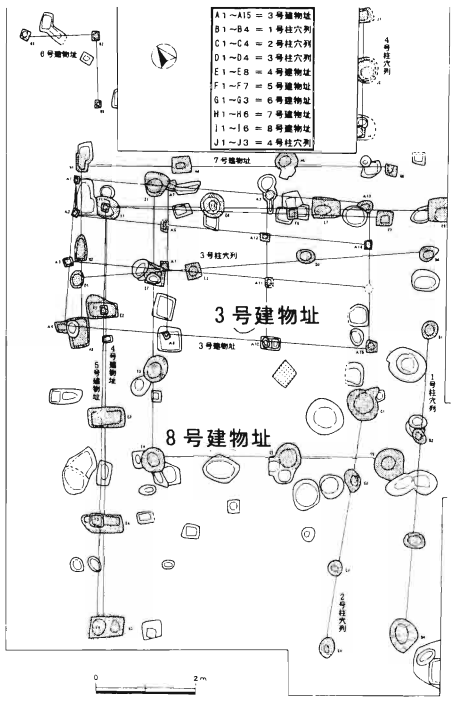
第２図　津久井城全体図



第３図　御屋敷跡周辺曲輪配置



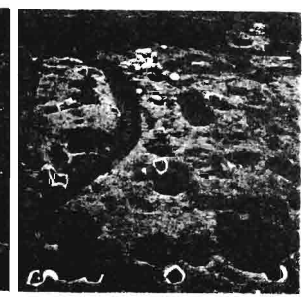
第４図　御屋敷跡全体図（1/700）



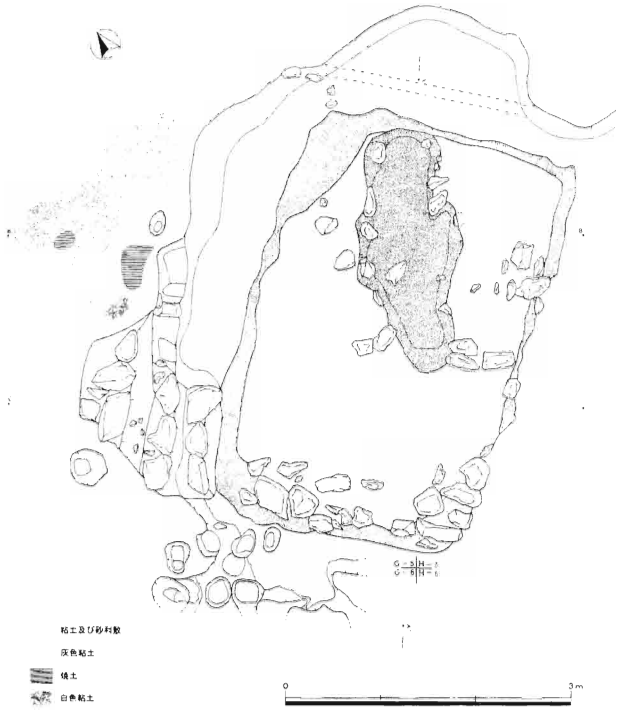
第５図　Ｆ－４・５区建物址（1/150）

Ｆ－４・５区全景

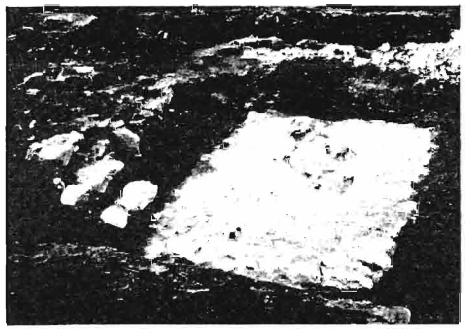
８号建物址



３号建物址

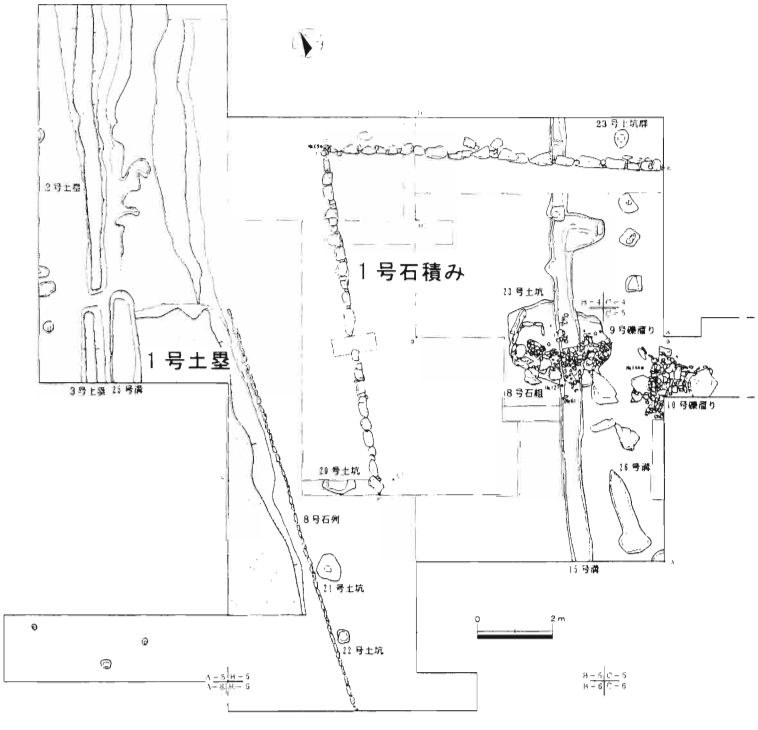


第６図　Ｇ・Ｈ－５区煙硝蔵（1/80）



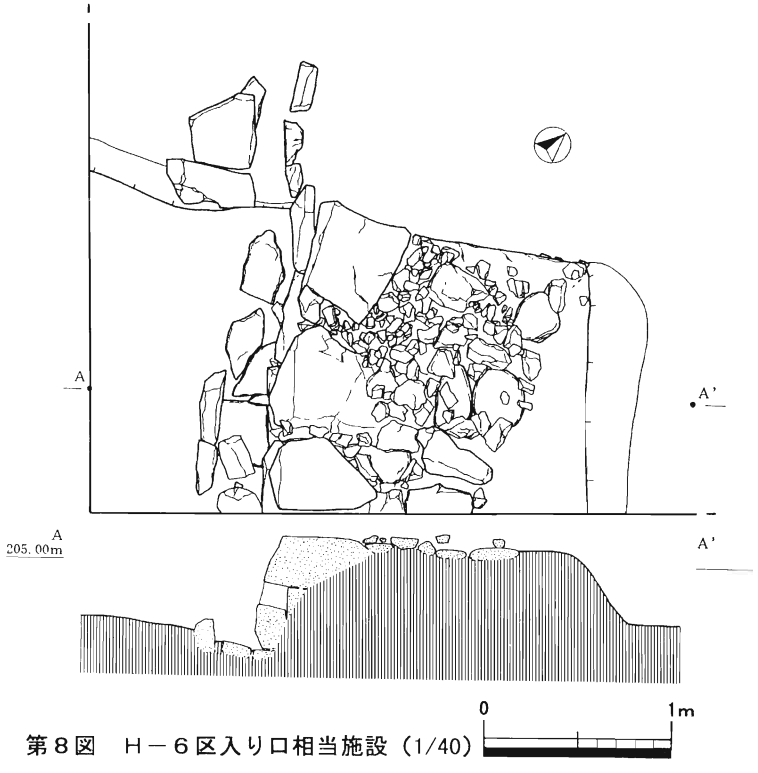
煙硝蔵（南から）

煙硝蔵（東から）



第７図　曲輪西側平面図（1/200）

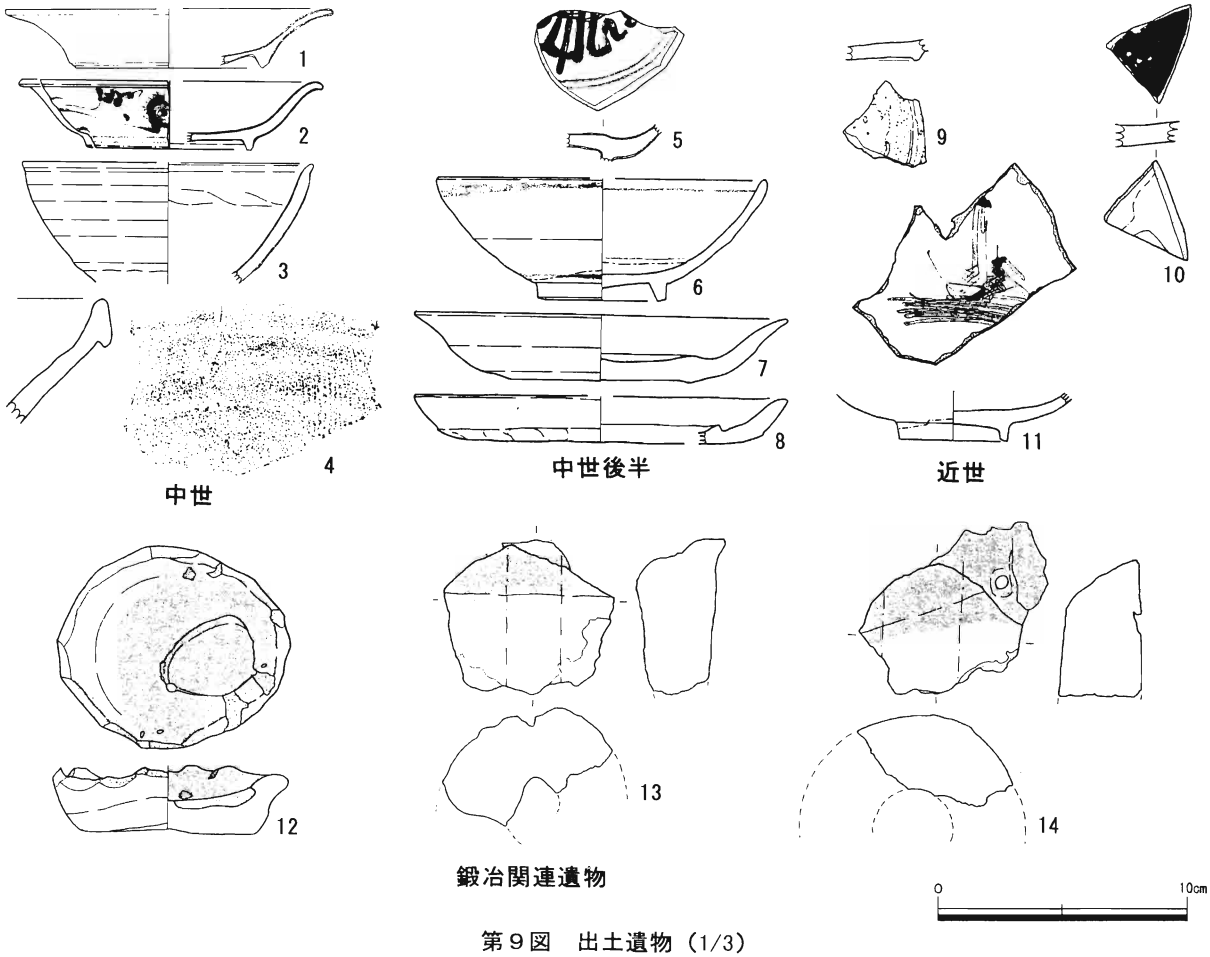
西側土塁と１号石積み



第８図　Ｈ－６区入り口相当施設（1/40）

入口相当施設（西から）

入口相当施設（南から）



第９図　出土遺物（1/3）

小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡

おだわらじょうさんのまるすぎうらへいだゆうていあと

－元禄期前後の武家屋敷の調査－

木村　吉行・井関　文明

所 在 地　小田原市本町一丁目７－９

調査期間　（財）かながわ考古学財団

調査担当　木村吉行・井関文明

調査目的　横浜地家裁小田原支部庁舎建替工事に伴う事前調査

調査期間　2000年10月１日～12月27日

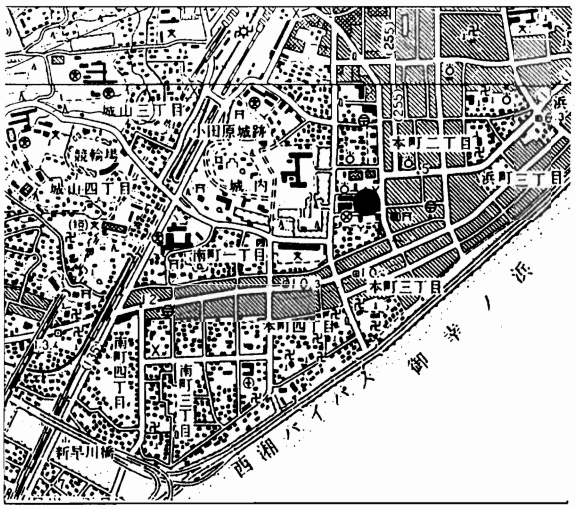
調査面積　314.42㎡

１．遺跡の立地

本遺跡はＪＲ小田原駅の南東約0.6km、小田原城天守閣より東南東約0.4km、同大手門跡より市道を隔てて南に位置する（第１図）。本地点は現地表面での標高が8.4mを測る。完新世に形成された沖積低地に位置し、その基盤層は縄文海進時の砂層であると言われている。本遺跡名の「杉浦平太夫」は「文久図」（1861～1863年頃）に由来する。これより前の「田辺図」（1660年）では「稲葉七郎兵平衛」、「松原図」（延宝～天和の頃）では「稲葉酒之允」、「静嘉堂元禄図」（元禄末～宝永の頃）では「加藤孫太夫」等の人物名が読みとれる。

２．調査経緯

調査はこれまで1988年５月と、同年７～11月に２回実施されている。２回目（第Ⅱ地点）の調査では近代の旧裁判所建物跡や近世の池跡等が検出された。



第１図　遺跡位置図

３回目（第Ⅲ地点）となる今回の調査は最高裁判所の依頼を受け、横浜地家裁小田原支部庁舎の建替工事で破壊される範囲を中心に、実施されることとなった。

３．調査概要

中世

遺構の種別及び数は、土坑51・溝状遺構２・礫群１・方形竪穴遺構６・石組遺構１・井戸址１・ピット群１である。遺構は近世以降の整地や造成による影響が少なく、全体で確認された。

その分布は、方形竪穴遺構群が北側を、土坑群・礫群・ピット群が南側を中心とする（第２図）。またこれらの遺構の年代は明染付、瀬戸・美濃大窯段階の陶器、初山窯製品、かわらけ等から、小田原編年のⅡb期に当たる天正年間（16世紀第４四半期）が中心とされる。

近世

遺構の種別及び数は、土坑26・溝状遺構３・砂利敷遺構３・集石２・礫群２・石組遺構２・瓦溜り１・ピット群１である。遺構は上・下層とも近代以降の土地改変等により本地点の北側では確認されなかった。

近世上層　出土遺物から19世紀前葉頃（幕末期）までと推定される最終整地層で、本層中で検出された遺構面を近世上面とした。遺構では屋敷地内の簡易的な排水施設と考えられる区画溝や建物跡の一部と思われるピット群等が検出され、遺物では肥前、瀬戸・美濃系磁器や瀬戸・美濃、京都・信楽、堺系の陶器が出土した。

近世下層　出土遺物から17～18世紀中葉までと推定される層で、本層中で検出された遺構面を近世下面とした（第３図）。遺構は大量の遺物を伴う廃棄土坑を中心とし、その年代は遺構間の切合いや検出層位、出土遺物全体の組成等から17世紀前～中葉（25号土坑・１号石組等）、17世紀中～後半（17号土坑等）、17世紀後～18世紀前半（19・20号土坑・１号砂利敷等）、18世紀中葉（18号土坑等）と異なる。25号土坑では生掛けの初期伊万里・明染付皿、総織部輪花皿の他、サザエ等の貝類や分析により食用犬骨とされた獣骨等が発見された。17号土坑では、古九谷様式の五彩手皿が出土した（第４図１）。

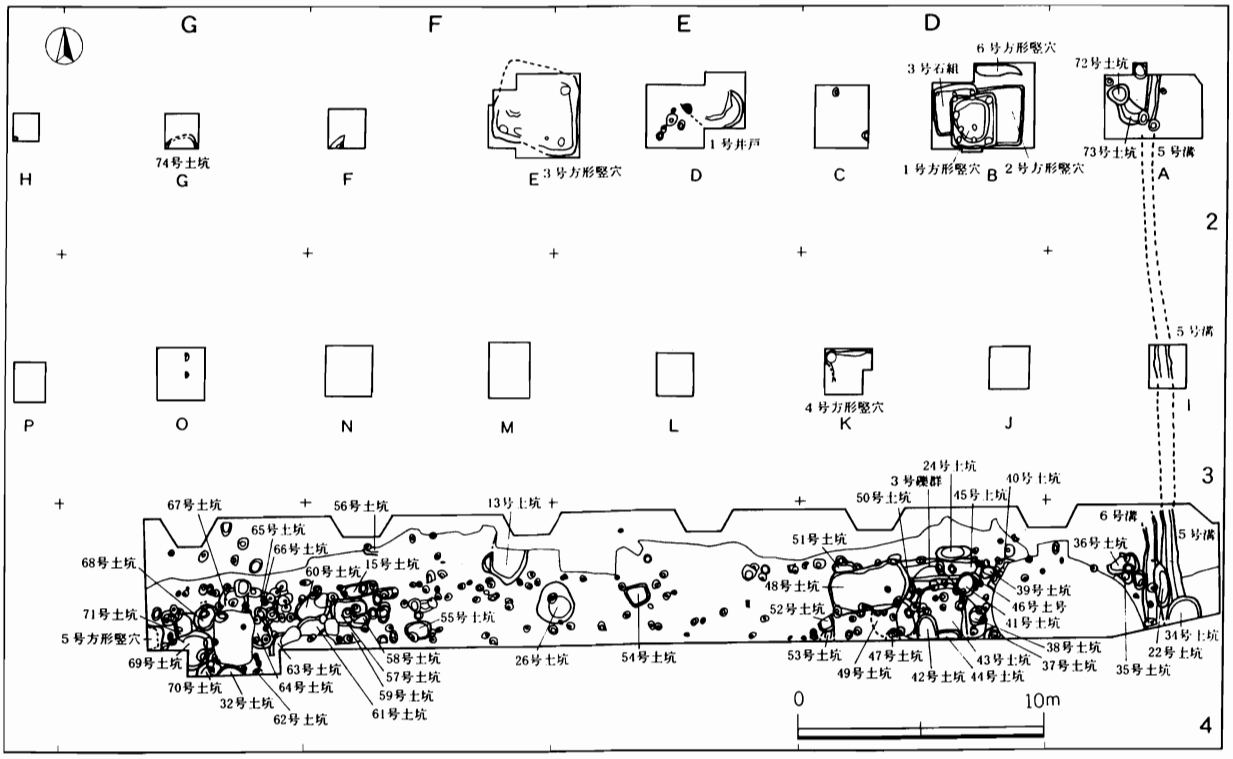
ところで伊万里磁器の出現を画期とする小田原編年のⅣ期（17世紀中～末）の中では、25号土坑の遺物群はより古く、17号土坑の遺物群はより新しく位置づけられる。石敷を底面に持つ１号石組は県内では類例がなく、覆土の分析から排水施設と類推される（第２図）。１号砂利敷は南側を区画する南砂利敷と北側を区画する北砂利敷に区別され、いずれも屋敷内の区画に関連する雨落ちと推察される（第４図）。切合い関係等から石列を伴う南砂利敷は19号土坑や北砂利敷よりも古く、上層から宝永火山灰が検出された北砂利敷は、下位に宝永以前の瓦を敷設し、南砂利敷を改変して構築されたものと判明した。19号土坑では17世紀後半～18世紀前半までの肥前系陶磁器が大半を占め、かわらけ、焼塩壷等も出土した。19号土坑と出土遺物全体の内容が類似する20号土坑では、本地点における遺構内最多の約1,800点の遺物を数え、広義の柿右衛門様式の色絵瓶・皿、ワイングラス形の染付小杯、瑠璃釉金彩仏飯碗が出土し、県内では類例がなく注目される（第４図２～５）。この20号土坑の遺物群は伊万里くらわんか手の出現を画期とする小田原編年のⅤ期（17世紀末～18世紀末）の中では、18世紀前半までの所産と理解される。他に近世の注目される遺物では稲葉の家紋瓦とされる「折敷に三」や、雌部内面を銅メッキした海老錠が出土した。

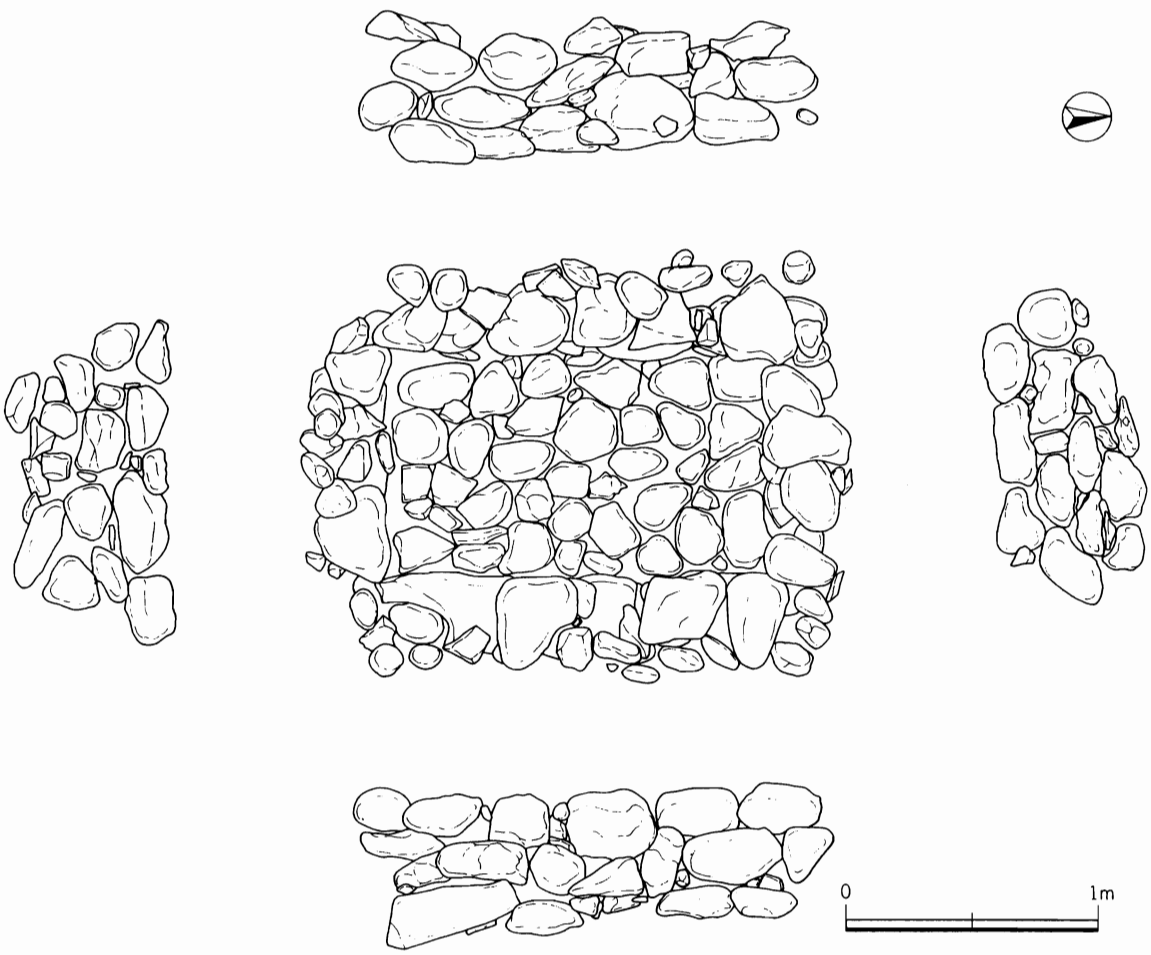
近代以降

遺構では関東大震災直後の廃棄土坑や大正時代に建替られた小田原区裁判所の官舎と調停判事室兼調停室跡が検出され、遺物では明治期の型紙・銅版摺りの印判染付磁器等が出土した。

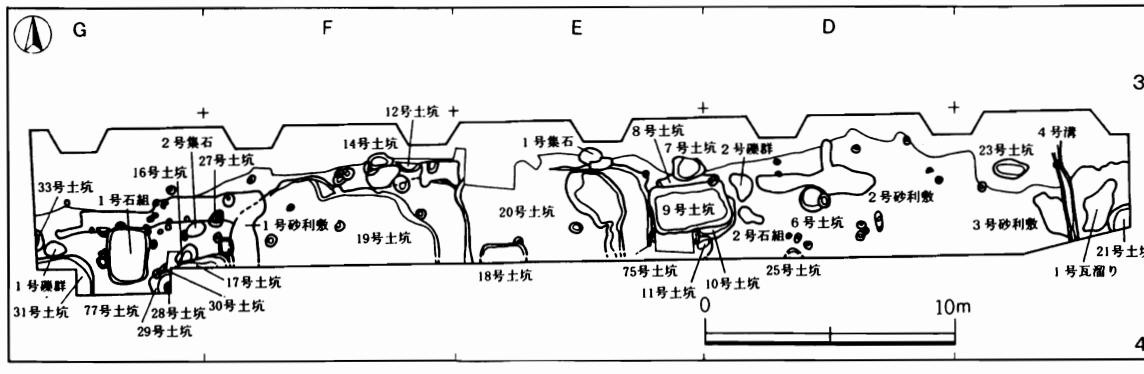
４．まとめ

本地点の調査では近世前半の遺物と遺構が主体を占め、その中でも時期によって遺構の占地や方向の違いが確認された。これらの違いにおいて特に重要なのは、古絵図に符合する元禄末～宝永頃と推定される遺構である。これらの遺構の変遷によって、稲葉氏から大久保氏への城主の交替とそれに伴う稲葉氏から加藤氏への家老の交替時に、本屋敷地内の改変があったものと理解される。さらに古絵図との関係から、これらの遺構と前後する近世遺構は、17世紀中～末では稲葉氏、18世紀代では加籐氏と異なる家老屋敷の所産と推定される。

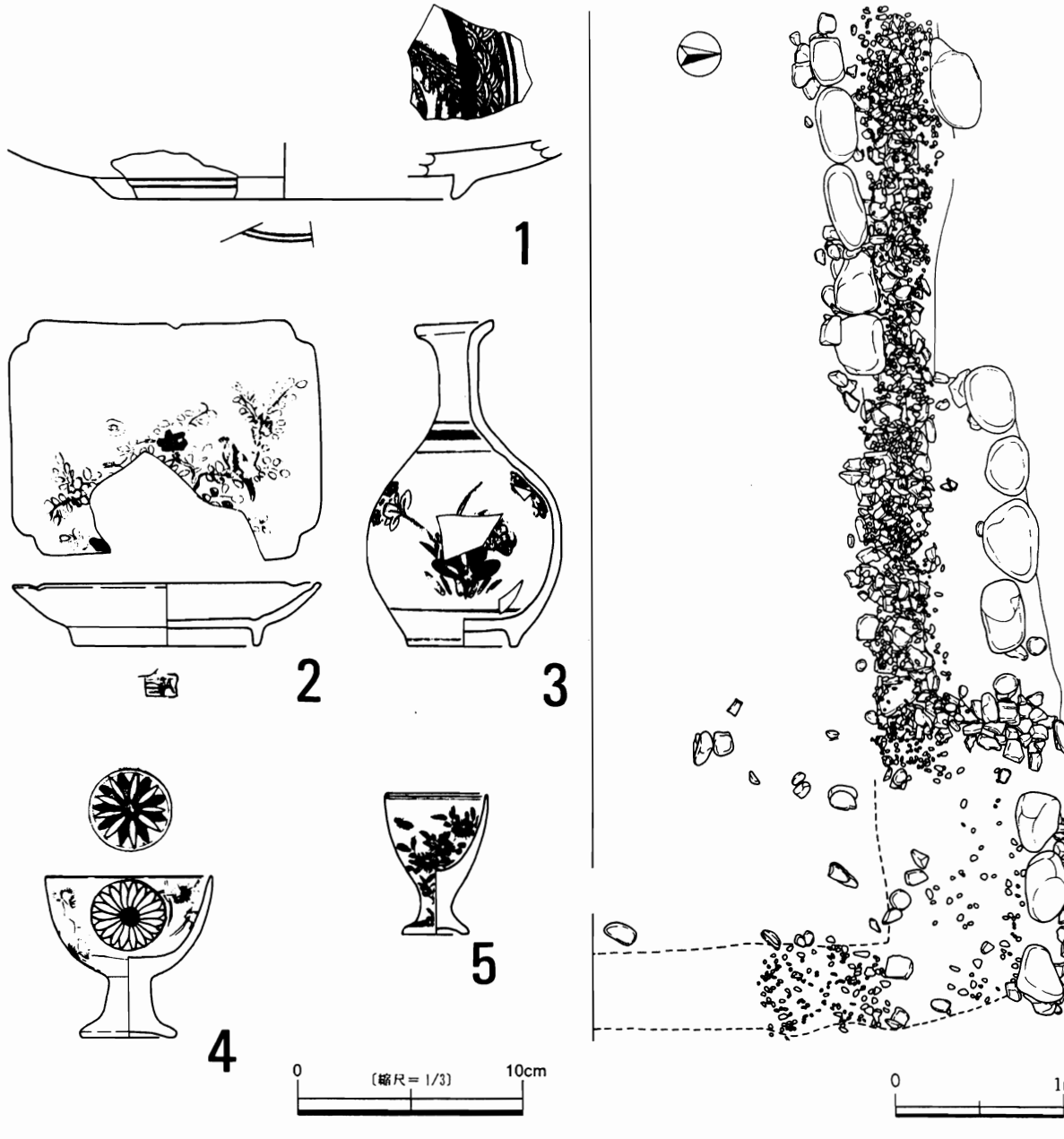




第２図　中世遺構全体図（1/300）〔上〕・１号石組遺構（1/30）〔下〕



第３図　近世下層遺構全体図（1/300）



第４図　17号土坑（１）・20号土坑（２～５）出土遺物〔左〕・１号砂利敷遺構（1/80）〔右〕

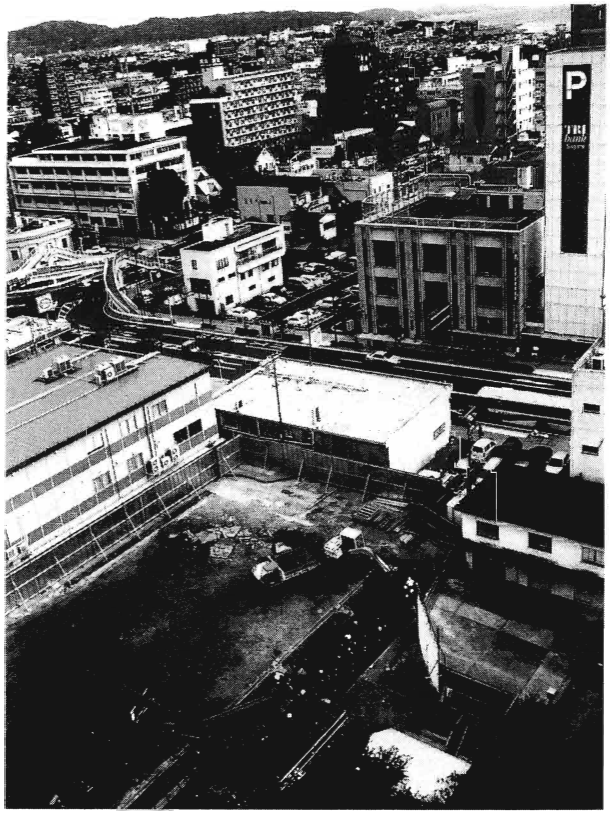


写真１　遺跡遠景

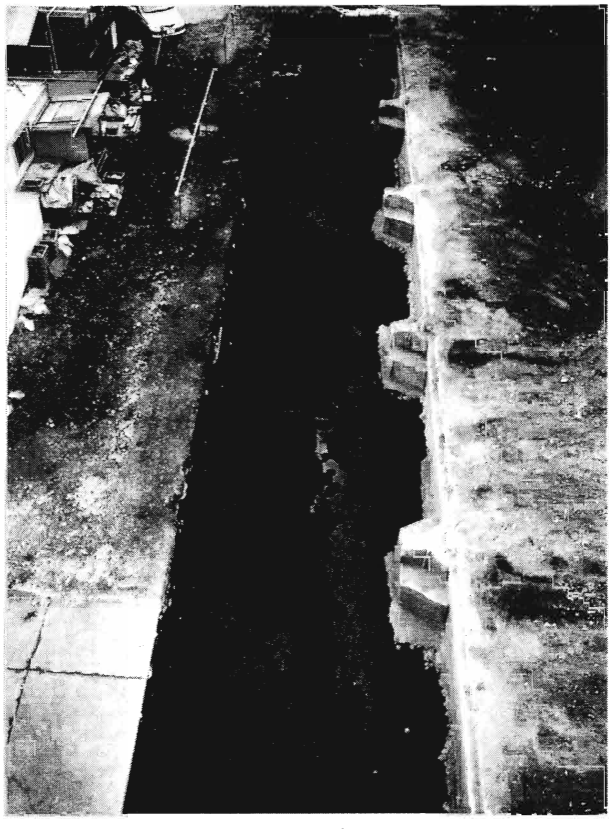


写真２　近世遺構遠景（20号土坑付近）

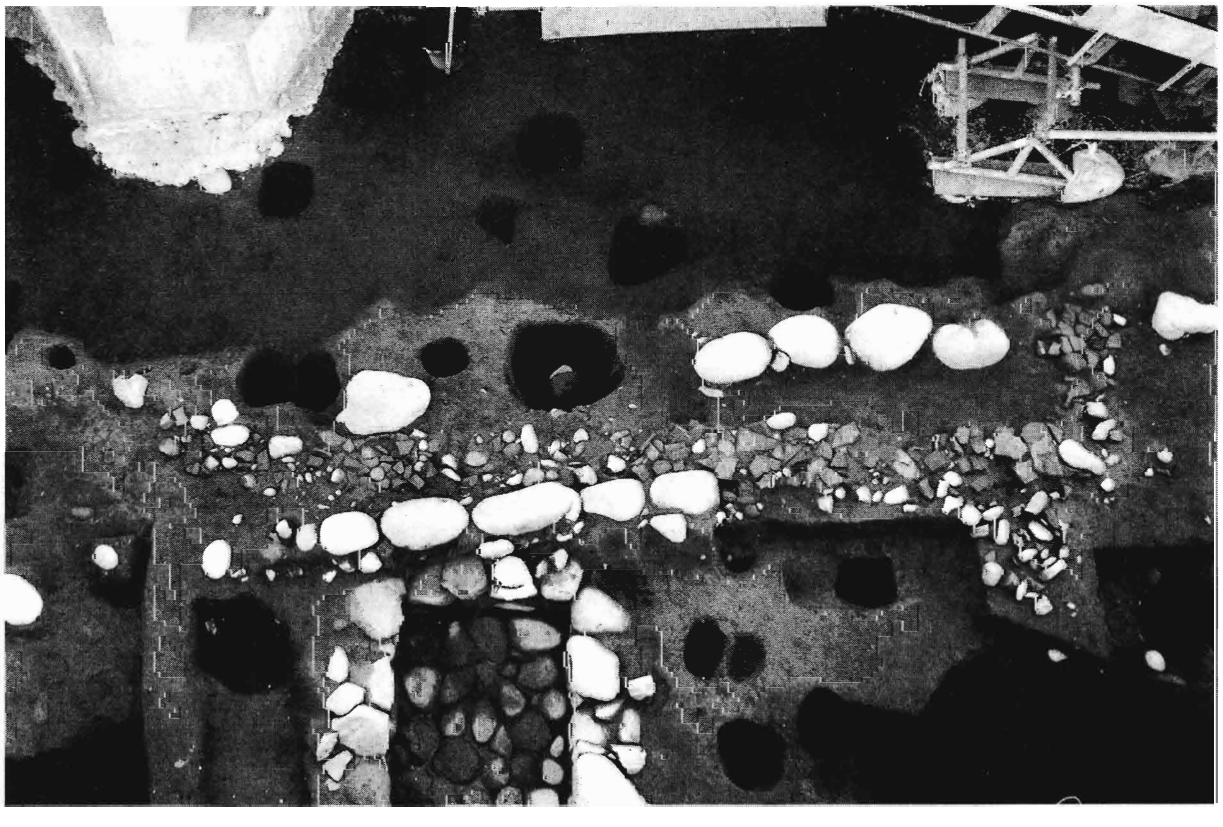
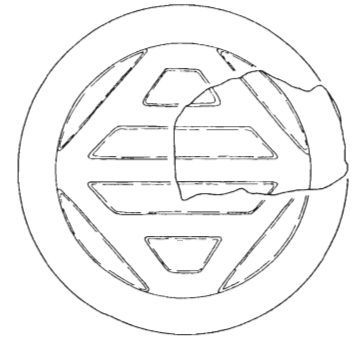


写真３　１号砂利敷遺構瓦敷（北砂利敷）〔上〕・１号石組遺構〔下〕



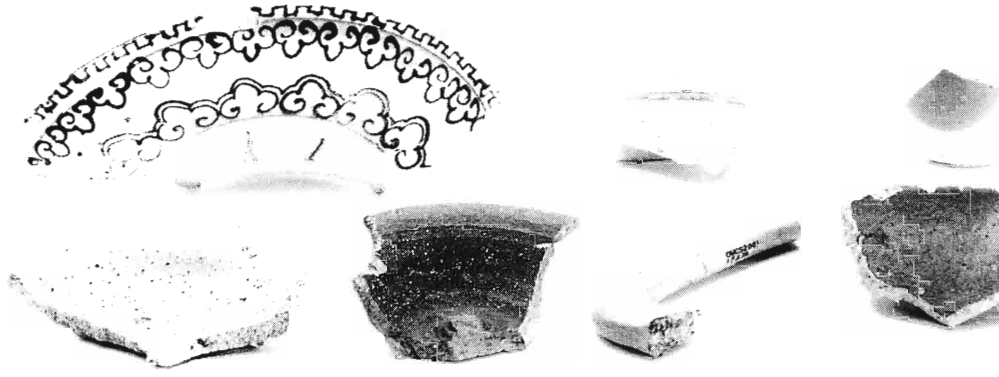


写真４　稲葉の家紋瓦（織敷に三）〔上〕・17号土坑出土遺物〔下〕

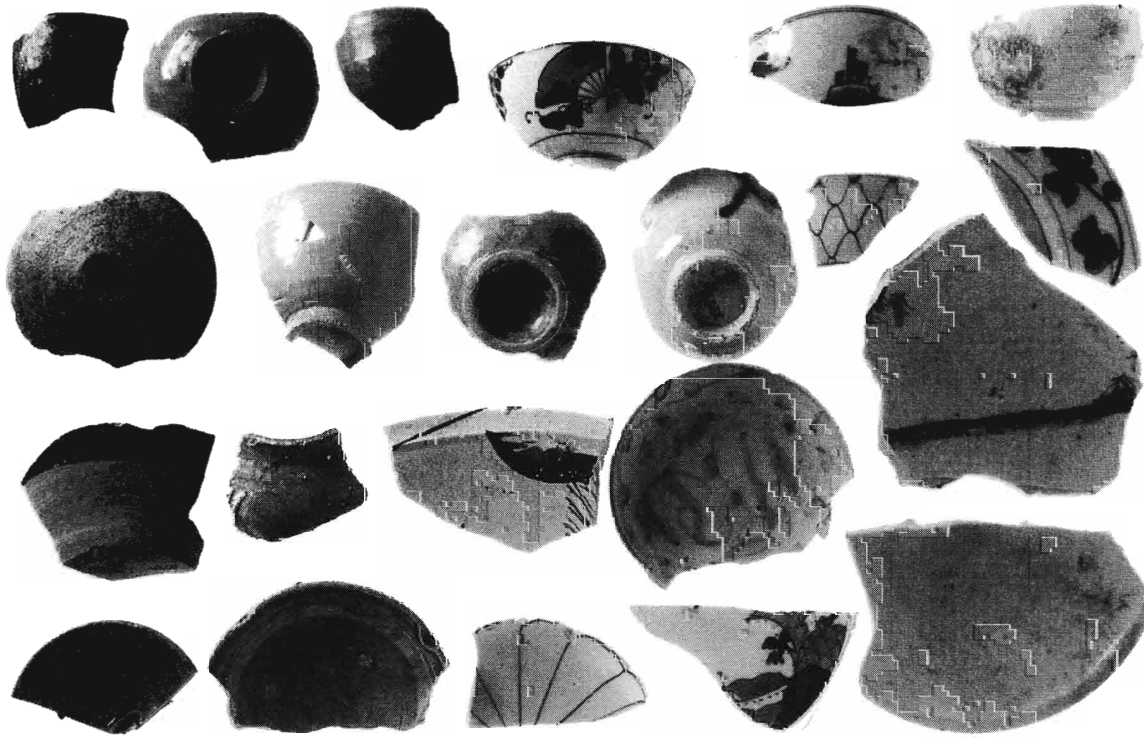


写真５　25号土坑出土遺物

小田原市　小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点

－城下きっての障子堀－

山口　剛志

所 在 地　小田原市板橋字堂屋敷730番35号外1筆
調査機関　小田原市教育委員会
調査担当　山口剛志
調査目的　個人住宅建設に伴う事前調査
調査期間　2001年10月22日～12月22日
調査面積　604㎡

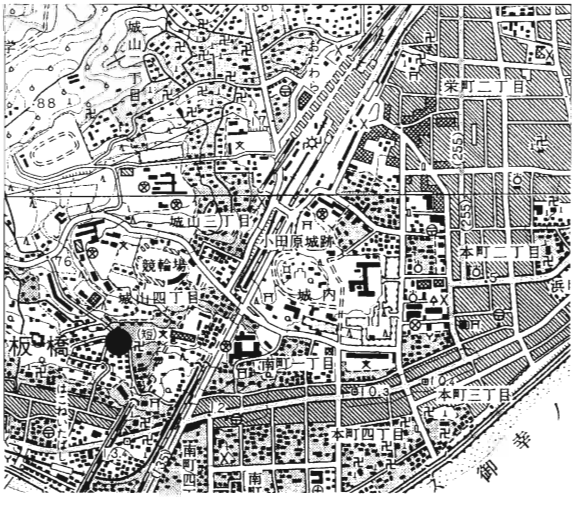
1．調査に至る経緯

当該地は、小田原市№62遺跡にあたる小田原城総構に位置する。個人住宅建設に伴う造成工事が行われることになったため、事前の発掘調査を実施した。また、発掘調査経費については、個人住宅建設に伴う事前調査であることから、全額を国庫補助事業で対応した。

2．遺跡の立地と環境

小田原城総構は、天正18年（1590）豊臣秀吉による小田原攻めに備えて北条氏が構築した遺構である。小田原城の周囲約9kmにわたって堀と土塁が巡っており、城下町をも城域に取り込んでいることが最大の特徴である。総構は、これまでに本地点を含め18地点で調査が実施されており、北条氏が積極的に採用した障子堀の形態であったことが確認されている。

本地点は、総構西側にあたる天神山丘陵西側斜面上に位置し、標高は38～45mを測る。伝肇寺西地点として仮称されており、現況では堀法面と土塁が確認できたところである。しかし、本地点周辺は、すでに開発が進んでいるために総構の面影はほとんど残されていない。



第１図　遺跡位置図（1/25,000）

3．調査の経過

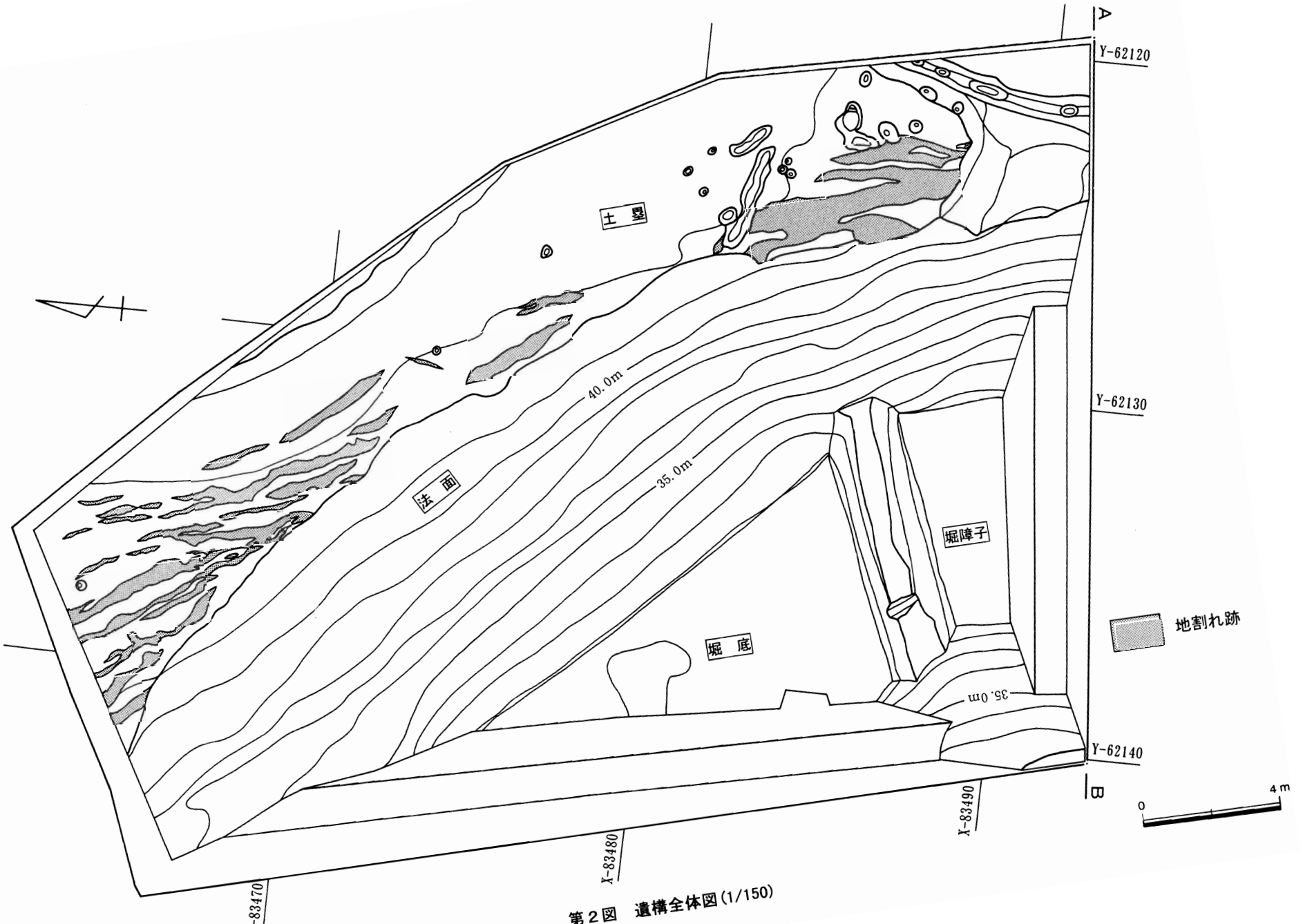
発掘調査は、樹木伐採後の2001年10月22日から土塁部分より開始した。版築された土塁を掘り下げながら、11月6日までには土塁の掘り込みを検出した。また、この上面で確認された溝・柱穴の調査も行い、11月21日までには土塁の調査をほぼ終了した。

堀法面については、10月30日より調査区南側から検出を開始し、11月8日までに法面上半部を検出した。そして、11月12日から堀覆土の掘り下げを開始して堀底の検出に努めたが、予想以上に大規模な堀であったために掘り下げは難航し、12月10日までを費やした。

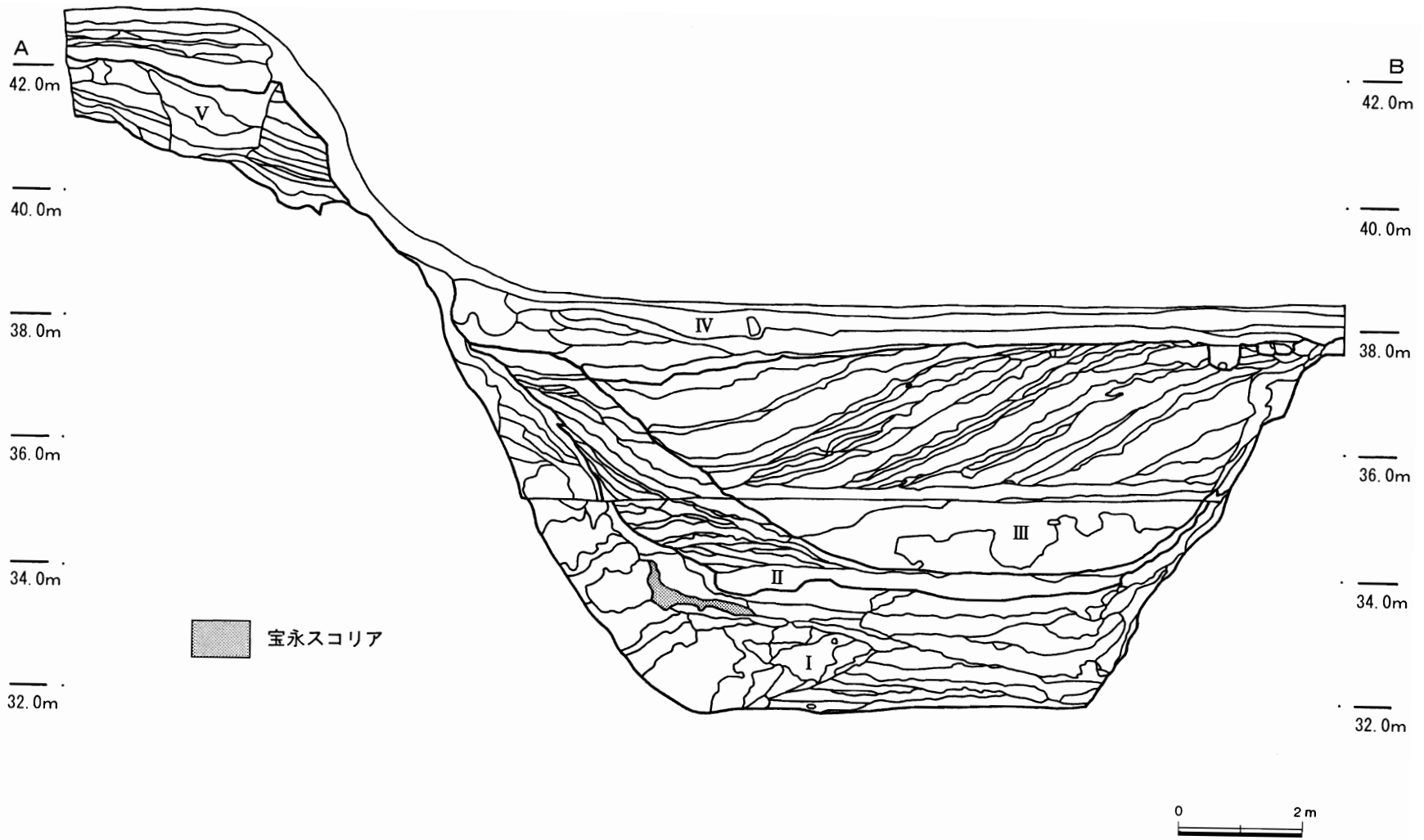
その後、写真撮影・実測を行い、12月22日までに調査をすべて終了した。

4．調査概要

本地点では、総構堀・土塁、溝2、柱穴16のほか、地震の地割れ跡が多数検出された。ここでは、



第２図　遺構全体図(1/150)



第３図　南壁土層断面図（1/100）

総構の堀と土塁について概説する。

(1) 総構堀

総構堀は、両側法面が検出できたために全体像を明らかにできた。規模は、長さ25.3m以上、堀幅15.8m、堀底幅6.35m、深さ10.2mを測り、非常に大規模な堀であった（第2・3図）。

法面は、東側で地震による地割れ痕が多数認められ、原形をとどめていない程に地滑りを起こして激しく起伏していた。西側は、地震の影響はあまり受けておらず、60°前後の角度で直線的に立ち上がり、比高差は6.2mを測る。

堀底には、長さ8.0m、上端幅0.5～1.0m、下端幅2.2～2.3m、高さ1.2～1.7mを測る堀障子が1箇所認められ、その上端西寄りには排水用と推定される溝が1箇所構築されていた。堀底は、この堀障子を境にして北側が高く、南側が低くなっている。

覆土は、自然埋没土と人為的埋没土に大別される。自然埋没土は第Ⅰ層が相当し、この上層付近で宝永4年（1707）降灰の宝永スコリアが確認されている。第Ⅱ層は、土塁に道路状遺構が構築された際に流れ込んだ人為的埋没土と推定され、近代の所産と思われる。第Ⅲ層は、本地点周辺が宅地造成された際に埋められた現代の人為的埋没土と考えられる。第Ⅳ層は、水平堆積を示す表土層である。

出土遺物は、中・近世の中国・肥前磁器、瀬戸・美濃陶器、かわらけのほか、五輪塔などの石製品や鉄滓などが少量認められた。

(2) 総構土塁

土塁は、自然地形を掘り込んで平坦面を形成したところから版築して築かれている。調査区ほぼ中央では、この掘り込み東壁が検出されており、堀法面までの上端幅3.9m、下端幅3.3m、深さ65cmを測る。壁が検出されなかった部分は、最大5.4m以上の幅を測る平坦面である。

土塁は第Ⅴ層が相当するが、これは近代に構築されたと思われる道路状遺構の覆土やその後の攪乱であり、本来の土塁を形成する土層ではない。調査区北壁では、上半部が近・現代の攪乱を受けていたものの、下半部は関東ローム層や黒色スコリア層などによってほぼ水平に版築された土塁を形成する土層が確認されている。ここでの土塁の高さは、2.35mを測る。

土塁からの出土遺物は、中国磁器、瀬戸・美濃陶器、かわらけなど16世紀に属するもので、総構の構築時期を示す資料として注目される。

5．まとめ

本地点の調査では、上端幅15.8m、下端幅6.35m、深さ10.2mを測る大規模な堀が検出された。このような大規模な堀が構築されたのは、本地点が総構西側の虎口のひとつ「二重戸張（ふたえとばり）」の南側に位置すること、秀吉のいる西からの攻撃に備えていたことなどが主な理由であろう。

また、堀底を仕切るための堀障子が1箇所検出されており、総構堀は北条氏が積極的に用いた障子堀の形態であったことが再確認された。

土塁は、上半部が攪乱されていたなど予想より遺存状態は不良であったが、自然地形を掘り込んで平坦面を形成し、ここからほぼ水平に版築して築かれていたことなど、その構造が明らかとなった。確認された土塁幅が最大5.4m以上の規模であることから考えて、大規模な堀に見合う土塁が構築されていたと推測される。

さらに、堀法面と土塁には、地震による地割れ痕が多数認められた。土塁が地割れでずれを生じていることから、総構が構築された16世紀末以降の地震によるものであるが、どの時期の地震によるものか、現時点では特定できない。

今後は、平成15年度の報告書刊行までにさらに検討を加え、総構の構造を明らかにしたい。

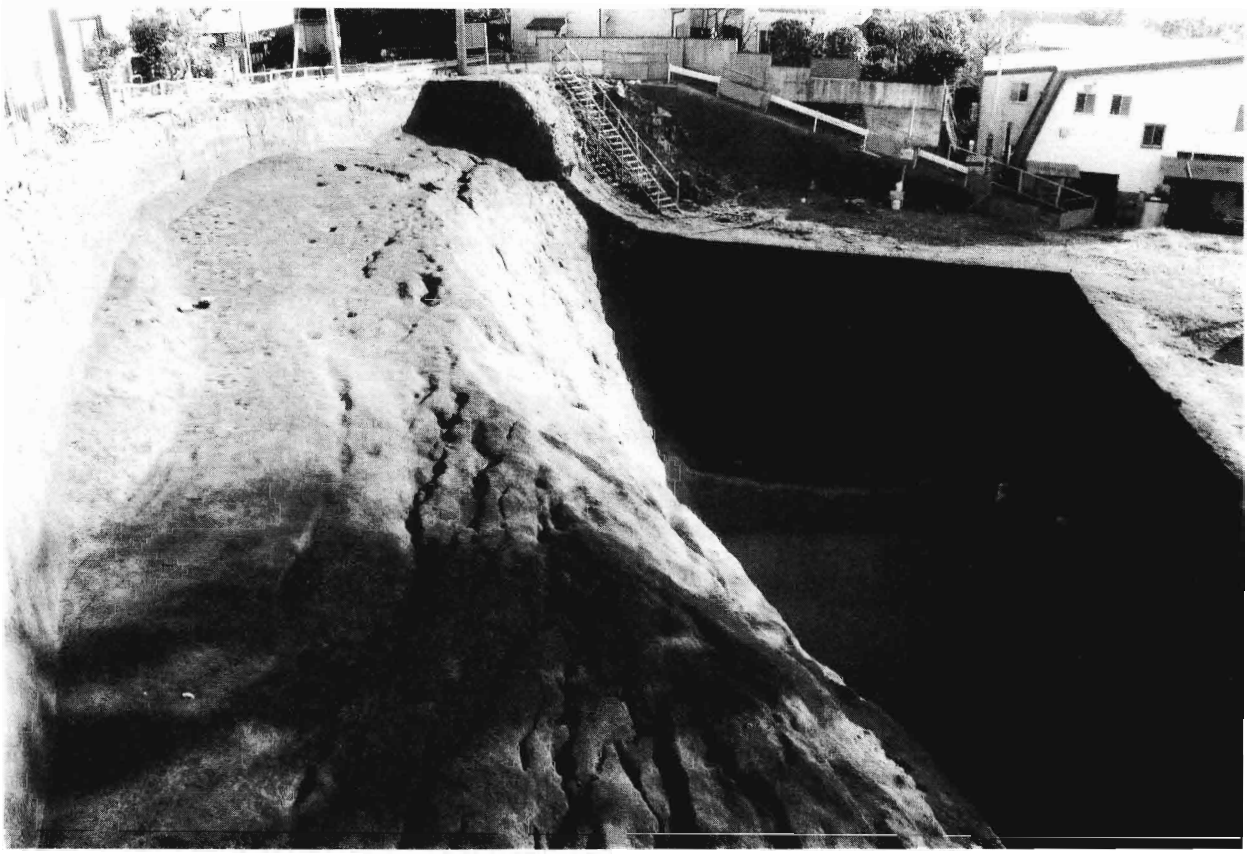


写真１　調査区全景（北から）

写真２　堀土層堆積状況（北から）

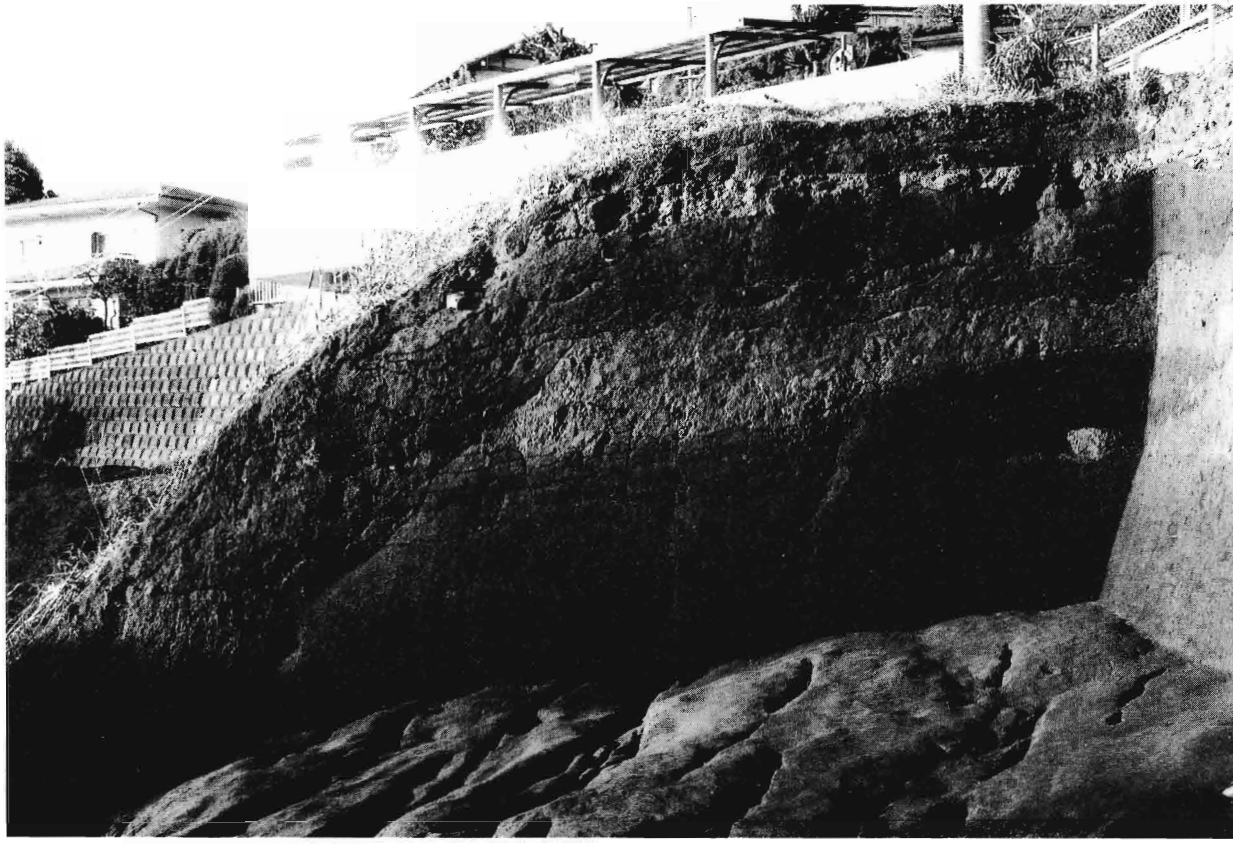


写真３　土塁土層堆積状況（南から）

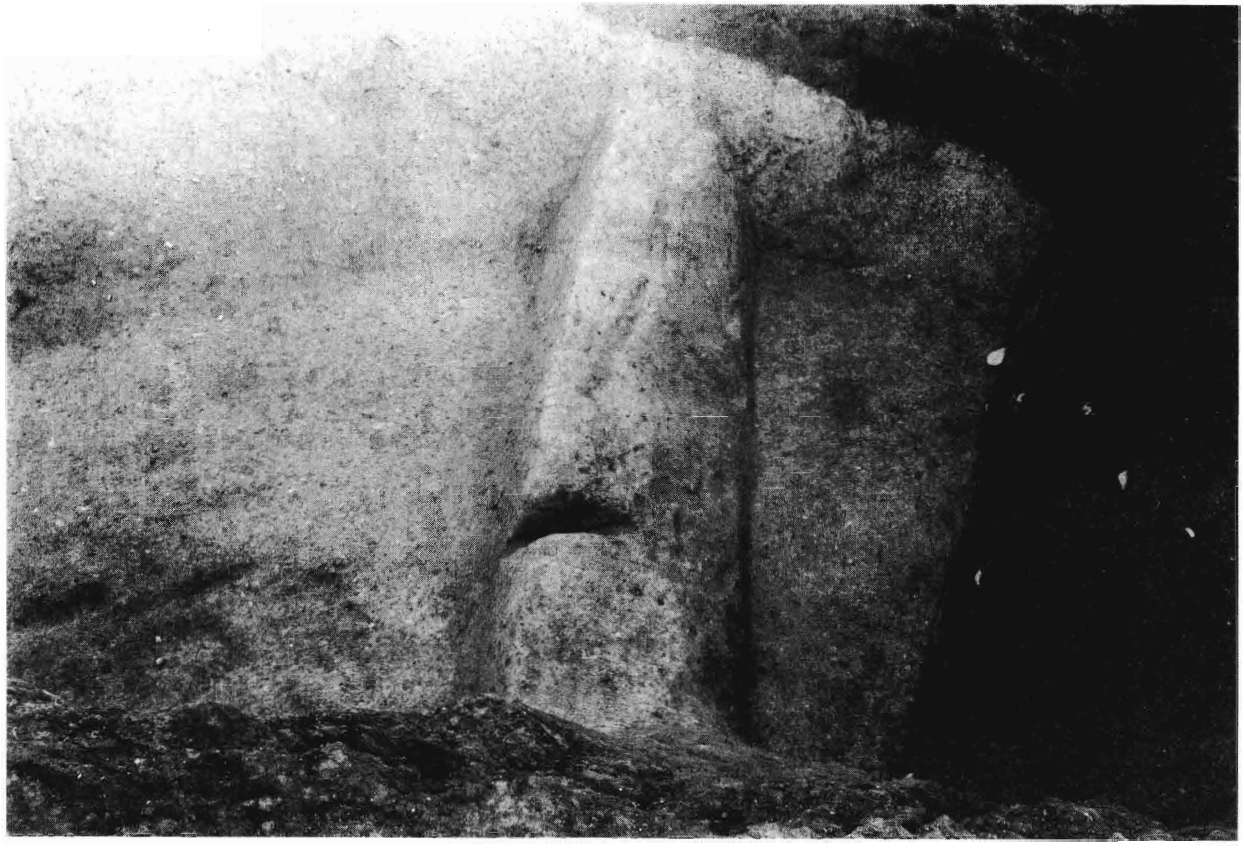


写真４　堀商事検出状況（西から）

横須賀市　猿島遺跡群

－近代の土木技術を伝える洋式砲台の調査－

野内秀明

所 在 地　横須賀市猿島１

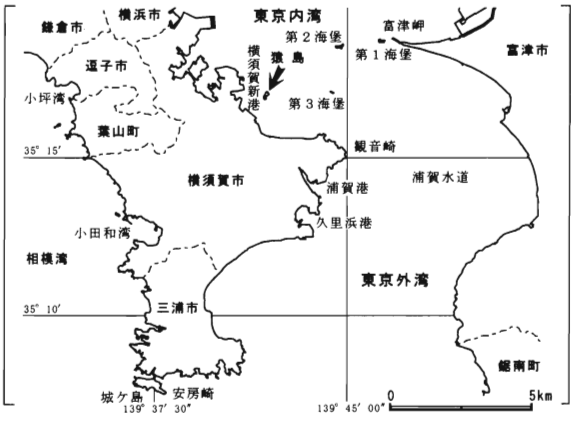
調査機関　横須賀市教育委員会

調査担当　野内秀明

調査目的　公園整備に伴う確認調査

調査期間　2000年5月15日～9月14日

調査面積　547.33㎡



第１図　遺跡位置図

１．遺跡の位置

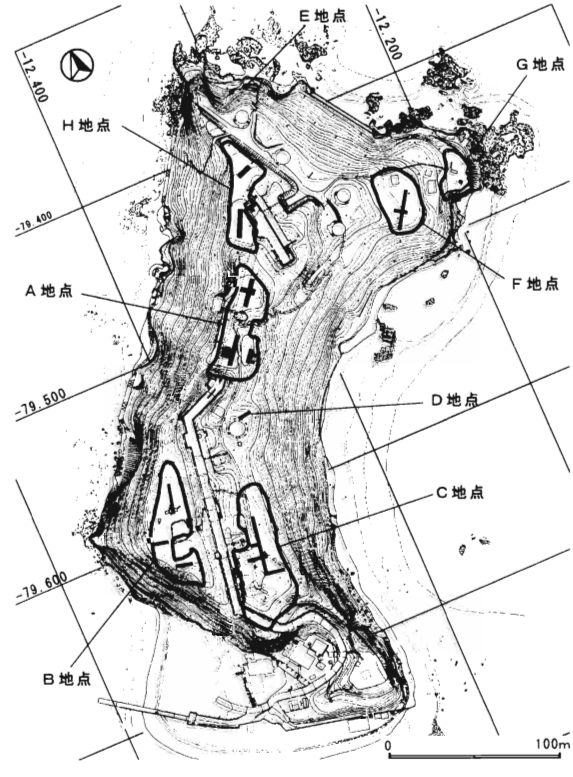
猿島は横須賀新港沖1.7kmに位置する無人島で、北緯35°17′、東経139°40′に位置している（第１図）。南北約450m、東西約200mの細長い島で、周囲の海岸は急峻な海蝕崖が形成され、島の頂部に標高40m前後の平坦面が存在する。

猿島の頂部は縄文時代の猿島遺跡、島北端部の海蝕洞穴は弥生～古墳時代前期の貝塚を伴う猿島洞穴遺跡である。島全体は幕末の猿島台場跡、近代の猿島砲台跡で、同時に第２次世界大戦中に高角砲陣地が築かれた戦跡遺跡としての性格もあわせもち、時期・性格の異なる遺跡が存在するため、猿島遺跡群と総称する。調査では縄文～近世の遺物・遺構も発見されたが、ここでは近代遺跡としての猿島砲台に関わる遺構を紹介する。

２．調査経過

猿島は国有地であるが、平成７年度以降、横須賀市が財務省から管理委託されている。その後、旧軍港市転換法にもとづき無償譲渡を受けるため、横須賀市緑政部によって猿島を都市公園として整備する計画が策定された。

今回の確認調査は公園整備の実施計画策定に先立って行ったもので、島全域を調査対象とした（第２図）。また、猿島砲台に関連する煉瓦構造物が地表に露出していたため、これらも調査対象とした。



第２図　調査地点位置図

３．猿島砲台の概要

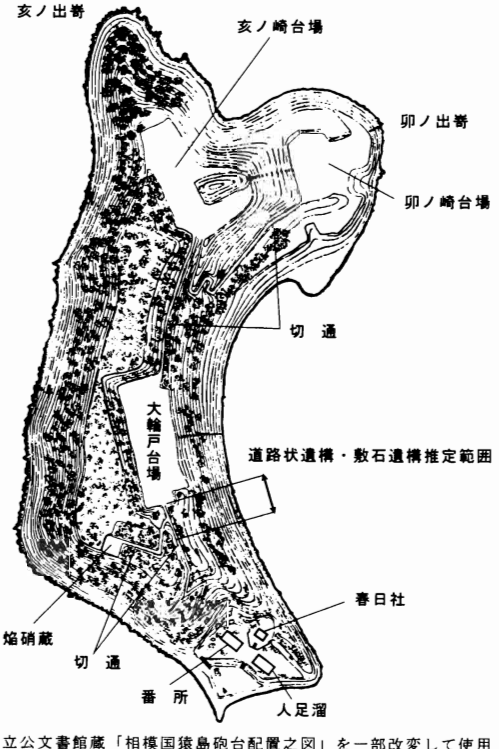
明治政府は台場に代え、ヨーロッパの近代技術にもとづいた洋式砲台による海岸防備計画を模索したが、明治12(1879)年に陸軍大尉西田明則によって提出された「東京湾要塞建設論」が採用され、明治13(1880)年、観音崎第１・２砲台築造をかわきりに諸砲台建設が進められていった。

猿島砲台は明治14(1881)年11月５日に起工し、明治17(1884)年６月30日に竣工したもので、砲台の幹道は島中央を縦断している。島南端の桟橋から、電気灯機関舎等の施設が存在する土地を回り込む坂道が直線的な切通しに連続し、隧道を抜け、露天掘り空間に至っている。露天掘り空間の東端には島の東側に抜ける小隧道が存在する。

切通しに至る坂道は西側には開けているが、南東から北側にかけては自然の尾根を垂直に切った切岸で掩蔽されている。切通しは石積擁壁によって護岸され、その東壁には煉瓦壁の入口をもつ弾薬庫、兵舎などの地下施設が存在する。この上の土地は24センチ加農砲が配備された第２砲台で、１門ごとに胸墻と横墻が設けられた４門編成の露天砲台である。切通しは幕末に形成された大輪戸台場と西側山頂間の斜面に沿って、第２砲台は台場の平坦面を南側に拡張して構築されている（第３・４図)。

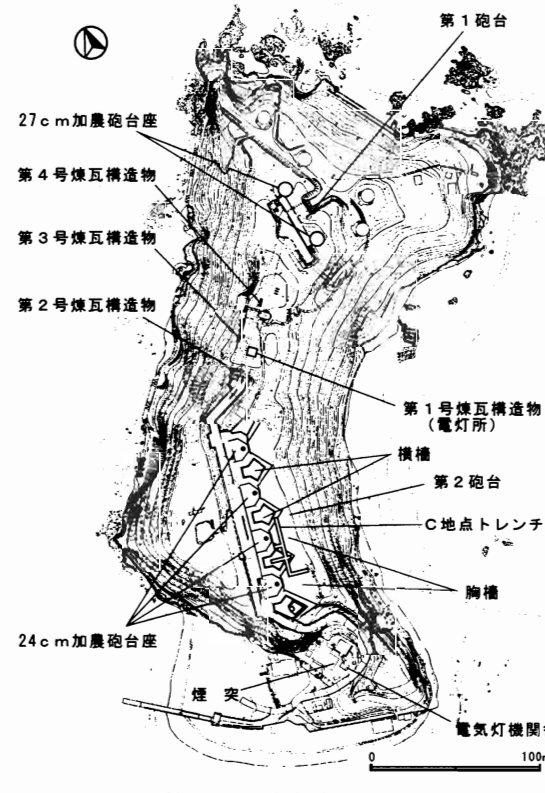
隧道は島の主軸に平行に作られているため、入口は大輪戸台場の北側斜面とは異なった方向となっている。そのため、隧道入口から切通しの直線的な部分へ連結する屈曲した導線が作られることになる。隧道北側に存在する露天堀の空間の東側山頂は27センチ加農砲が配備された２門編成の第１砲台で、その地下に弾薬庫が存在する。この露天掘り空間は亥の崎台場と西側の山頂部との間に存在する斜面に沿って、第１砲台は亥の崎台場地の平坦面を利用して構築されている。

これらの施設が猿島砲台の基本的な造営物で、第１砲台が第２海堡を中心とした火線、第２砲台が第３海堡と観音崎砲台方面の火線をとることで、両海堡、観音崎砲台と連動して東京湾西岸の防備機能を果たしている。



国立公文書館蔵「相模国猿島砲台配置之図」を一部改変して使用
春日社・番所・人足溜は推定位置

第３図　猿島台場説明図（約1/１000）



第４図　猿島砲台説明図

4．現存する砲台関連の遺構

猿島砲台の造営物は山頂部の施設以外は保存状況が良好で、明治前期から中期にかけての土木技術を伝える海岸護岸、切通し石積、隧道、煉瓦構造物などの近代遺産が現存している。

猿島の海岸線は横目地の通った布積護岸で覆われている(写真１)。護岸石積は70°前後の勾配で直線的に積み上げられ、上部には跳出部が存在している。護岸前面には断面が弧状の曲線を描く幅１ｍの布積の消波工石積みが伴い、このふたつの構造体で護岸が構成されている。消波工石積と護岸は安山岩の間知石が使用され、さらに裏込石の内側には凝灰岩の角柱状の切石を用いた階段状の石積が存在している。切通し東西壁の石積は横方向の同じ段に小口と長手が交互に並べられた布積護岸で、ブラフ積と呼ばれる積み方である（写真２)。東壁は石積下部にゆるやかな勾配をもつ形状で、積石は小口一辺45cm、長手90cm前後の角柱状の凝灰質礫岩が用いられている。西壁は東壁のような反りを持たずに垂直に立ち上がり、積石には小口一辺30cm、長手90cm前後の角柱状の凝灰質礫岩が用いられ、東壁とはその形状と積石の規格が異なっている。

隧道は幅４ｍ、全長は88.7ｍで、内面はフランス積の煉瓦壁で覆われている。隧道西側の壁にはアーチ状の入口部をもつ地下施設が存在し、フランス積の煉瓦積で構築された二層構造で、１階南側の施設群、１階北側の施設群、２階の施設群の各々独立した３施設群から構成されている（写真２)。ここで採集される煉瓦の刻印はすべて「東洋組西尾分局士族就産所」である（写真４－５)。

島南部に存在する煉瓦建造物は明治28(1895)年に竣工報告の出された電気灯機関舎で、室内は煉瓦壁で仕切られた２室と壁から外側に突出した小部屋からなる（写真３)。室内の煉瓦壁にアーチ状の木枠をはめ込んだ窓が存在する。使用されている煉瓦は小口60×110mm、長手220mmの赤褐色を呈するもので、出隅部の処理は七五煉瓦が用いられ、煉瓦組積法はイギリス積(狭義のオランダ積)である。この煉瓦建造物の西側には近接して煉瓦積の煙突が立っているが、使用される煉瓦は電気灯機関舎に使用される煉瓦と近似し、煉瓦組積法はイギリス積ないしはオランダ積である。

写真１　西海岸の護岸石積

写真２　切通しと隧道入口

写真３　煉瓦造電気灯機関舎

５．Ａ地点の煉瓦構造物群

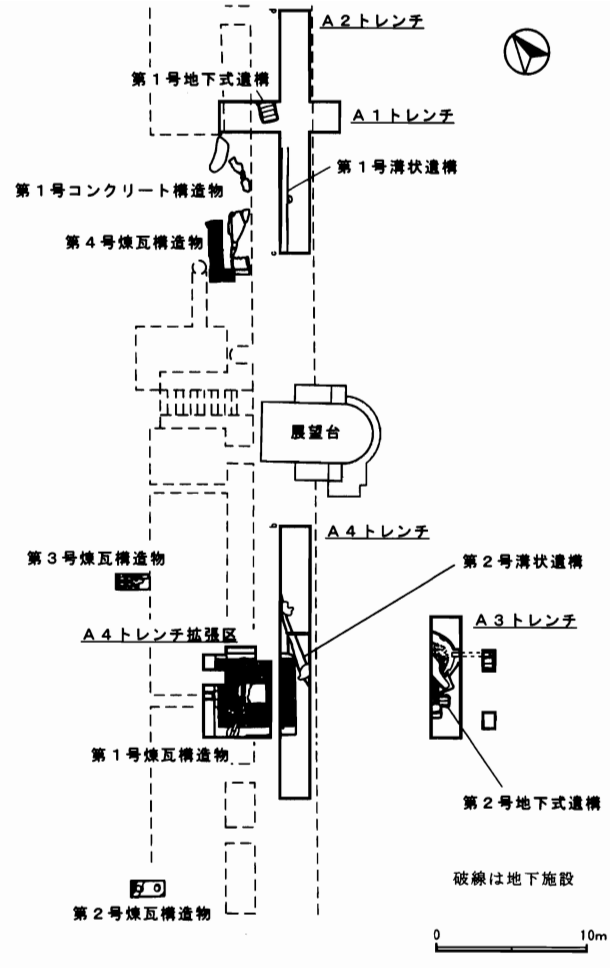
Ａ地点は地表に露出した煉瓦構造物（第２～３号煉瓦構造物）が存在するだけで、砲台としての機能については詳細が不明な土地であった。今回の確認調査では新たに煉瓦構造物（第１号煉瓦構造物）１基、コンクリート構造物１基、地下式遺構２基、溝状遺構２基が検出された（第５図）。

第１号煉瓦構造物は上部構造が撤去され、地下の基礎部分だけが遺存していたもので、先行して行われた土木工事による積土整地層を掘り込んだ方形竪穴と竪穴内に構築された煉瓦積、および排水管・連結土管などの附帯施設から構成されていた（第６図）。

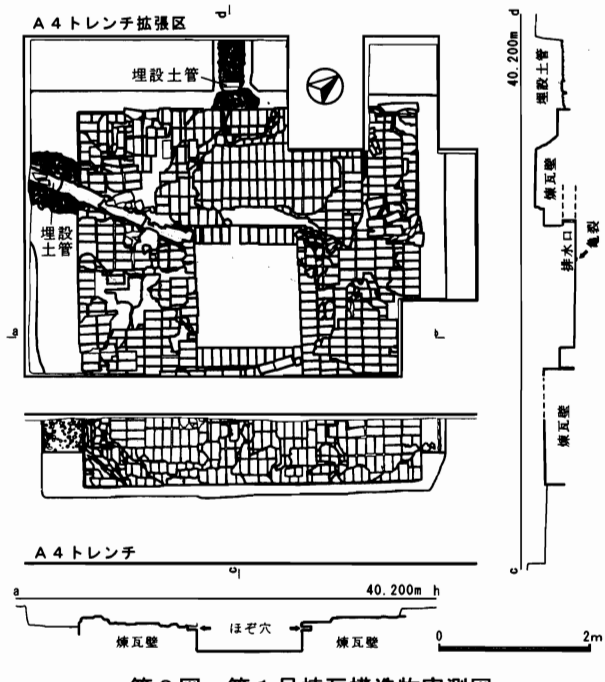
掘り方の平面形は一辺約5.40ｍのほぼ正方形に近い形状で、底面に煉瓦積を乗せるコンクリート基礎が作られ、その上にモルタルが厚さ４ｃｍほど塗られた後、約5.00×4.50ｍの規模で煉瓦が積み上げられている。煉瓦組積法は出隅部に七五煉瓦を用いたイギリス積（狭義のオランダ積）で、使用された煉瓦は東京小菅集治監製であった（写真４－１～４）。

煉瓦構造物を構成する煉瓦壁は６枚半積みで積まれ、中央に1.87×1.40ｍほどの長方形を呈する凹部施設が存在する。凹部施設の底面はモルタル敷きで、西壁と東壁に接して煉瓦１列３段が積まれ、南北壁には対称的な位置に各々２個のほぞ穴がうがたれていたことから、何らかの附帯物が設置されて機能した施設と考えられた。また、東壁には底面に接して土管を連結させた排水管が存在し、南壁中には底面から34cmほどの位置に連結土管が埋設されていた。

第１号煉瓦構造物については、報告書作成時には同規模で類似した基礎構造をもつ北九州市手向山砲台の探照灯台座跡などの類例から、また、猿島砲台内での立地条件から、探照灯（電燈所）の下部構造を検出したものと推定していたが、その



第５図　Ａ地点遺構配置図



第６図　第１号煉瓦構造物実測図

後、防衛庁防衛研究所蔵の海軍省公文備考付図の「東京湾防御猿島砲台之図」において手向山例と近似した上部構造をもつ電燈所であることが確認された（注）。

第２号煉瓦構造物はＡ地点の南西端に位置し、第１号煉瓦構造物の西方約10.8ｍに存在している。幅0.96×長さ2.12ｍの長方形の施設で、上面に径0.4ｍの円形縦坑２ヶ所が存在し地下に延びている。ほぼ全面にモルタルが塗られているため、煉瓦組積法の詳細は不明だが、モルタルが剥離していた南端の出隅部では七五煉瓦が用いられていた。

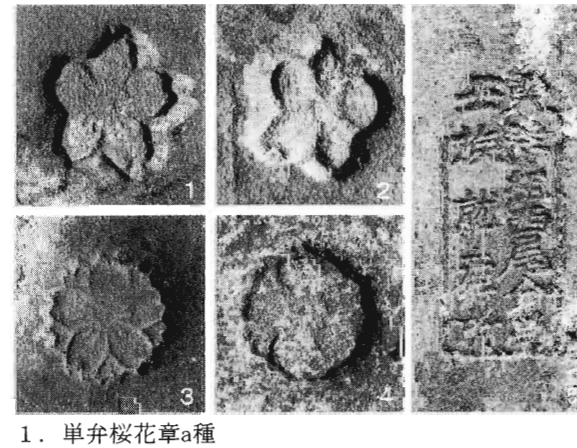
第１号煉瓦構造物に付設されていた一尺土管を使用した連結管は地下で西方向に延び、その延長上に第２号煉瓦構造物が存在している。このふたつの煉瓦構造物は土管によって連結されていることから、有機的な関係をもった構造物と考えられ、第１号煉瓦構造物と同時期の工事によって構築されたと考えられる。

第３号煉瓦構造物は幅1.05×長さ2.20ｍ以上の規模で、Ａ地点西側の斜面に位置している。上面に方形縦坑４ケ所が存在し、地下に延びていることから、トンネル内の地下施設と関連するものと考えられる。煉瓦組積法は、イギリス積ないしはオランダ積である。

第４号煉瓦構造物は幅0.86ｍ×長さ4.07ｍの長方形煉瓦壁と接して存在する0.68×0.78ｍの方形煉瓦壁によって構成されている。ともに、煉瓦組積法は出隅部の処理に七五煉瓦を使用したイギリス積（狭義のオランダ積）である。長方形煉瓦壁の東側に第１号コンクリート構造物が存在するが、その壁は長方形煉瓦壁東壁に平行して構築されており、深さ0.82ｍ以上を測る。

「東京湾防御猿島砲台之図」には、電燈所から20ｍほど北側に司令所と記載された円形の構造物が存在し、第１号コンクリート構造物の位置とほぼ一致することから、第１号コンクリート構造物はその基礎で、第４号煉瓦構造物はそれに附帯する施設の可能性が高い。同図では電燈所と司令所は通路で連結していること、また、第１号煉瓦構造物と第４号煉瓦構造物のほぼ中央の西側斜面には地下施設からの出入口が存在することから、Ａ地点に構築された煉瓦構造物群は相互に有機的な関係をもった施設群で、かつ地下施設とも連絡する性格をもっていたと考えられる。

これらＡ地点の煉瓦構造物に対し、隧道内の地下施設は東洋組西尾分局製煉瓦（写真４－５）が使用され、煉瓦組積法はフランス積である。切通しなどに存在する兵舎・弾薬庫もフランス積で、煉瓦の色調や胎土から東洋組西尾分局製煉瓦の可能性が高い。猿島砲台の煉瓦構造物は東洋組西尾分局製煉瓦を使用し、フランス積の煉瓦組積法を採用した施設群と小菅製煉瓦を使用し、イギリス積（狭義のオランダ積）の煉瓦組積法を採用した施設群が存在することが確認された。前者は主として明治17（1884）年に竣工した砲台の主要施設にみられ、後者はＡ地点の煉瓦構造物など、それ以降に増築された補助施設に見られる。



１．単弁桜花章a種
２．単弁桜花章b種
３．複弁桜花章a種
４．複弁桜花章b種
５．東洋組西尾分局士族就産所

写真４　猿島砲台出土煉瓦の刻印

6．砲台築造にかかわる土木工事跡

Ａ・Ｃ地点では共通の工法にもとづく積土整地層が検出されたが、その工法は20～30cmほどの厚さで積土し、地固めを行う作業を１工程とし、その上面に薄く砂を敷き、次の積土・地固めを繰り返すものである。最初の工程は第三紀層ないしはローム層上に行われ、整地に使用される土はローム土に限られ、表層堆積物である腐食土や縄文時代の包含層はまったく含まれない。この積土整地層が基盤となって、煉瓦構造物などの遺構が構築されていることから、Ａ・Ｃ地点の整地が建造物の構築以前に行われた砲台建設初期の土木工事であることを示している。

Ｃ地点に設定したトレンチは、第２砲台の胸墻中央の南北方向と横墻中央に位置している（第４図）。したがって、検出された積土整地層は第２砲台の胸墻と横墻を構築したものである。積土整地層下からは大輪戸台場へ至る切通しの道路面と考えられる硬化面とその直下に敷石遺構が検出された（写真５）。敷石遺構は、トレンチ北側で長さ18.4mにわたって28列確認されたが、トレンチ南側の敷石列が欠落する周辺で、敷石が抜き取られ、積土整地層が埋めている部分が確認された。このことは砲台築造にともなう土木工事が大輪戸台場面を大きく改変することなく、敷石遺構の存在する部分までを埋め、台場を外れた標高の高かった南側の土地では表層堆積物を除土して行われたことを示していると考えられる。

写真５　積土整地層下敷石遺構・道路状遺構

7．さいごに

Ａ・Ｃ地点では砲台築造にかかわる土木工事跡が検出されたが、これらは兵舎・弾薬庫などの造営物構築以前に行われた切通し開削などと一連の砲台築造初期の土木工事で、その導線には猿島台場築造で改変された人工地形が利用されていたことが確認された。また、Ａ地点では煉瓦構造物などが検出され、詳細の不明であったこの土地の砲台内での機能が判明したことによって、猿島砲台の全体像をより明確にすることができた。

国立公文書館蔵「相模国猿島砲台配置之図」（第３図）と「東京湾防御猿島砲台之図」はそれぞれ、砲台築造以前の地形、陸軍の洋式砲台としての最終的な構造が知られる史料である。この２史料の存在によって現存遺構、検出遺構の性格などが明確になったが、いずれも整理作業中、あるいは報告書刊行後の発見であった。本来、砲台跡に限らず近代遺跡の発掘調査は、このような文献の事前調査を行い、効果的な位置に調査坑を設定すべきで、また、煉瓦、モルタル、碍子などの工業生産物が出土し、その情報の多様性が想定されることから、自然科学的、産業考古学的分析などを視野にいれた試料採取、調査体制が必要と思われる。

（注）防衛庁防衛研究所原　剛氏のご教示による。

文献

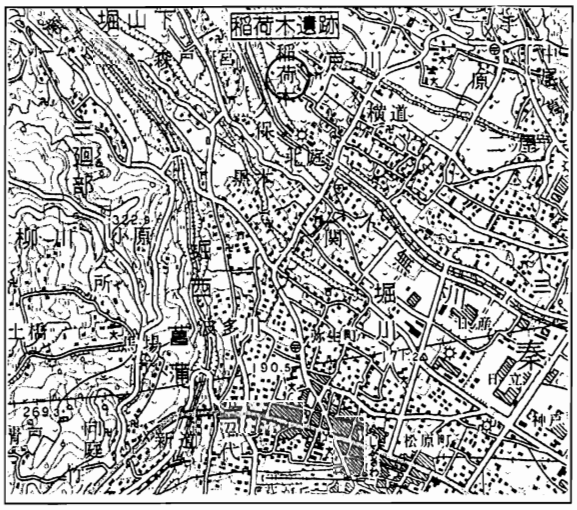
野内秀明他　2002「猿島遺跡群」『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第９集』横須賀市教育委員会

稲荷木遺跡

ー縄文時代中期末葉の柄鏡（敷石）住居跡ー

天野賢一

所 在 地　秦野市戸川1053-1番地先他
調査機関　（財）かながわ考古学財団
調査担当　天野賢一・井関文明
調査目的　農道整備事業に伴う調査
調査期間　2001年４月３日～６月18日
調査面積　745.8㎡



第１図　遺跡位置図

１．調査概要

事業は、湘南地区農政事務所による秦野農免農道整備事業に伴う発掘調査として実施された。遺跡は、秦野市北西部の丹沢山地裾部で、水無川左岸の標高240m付近にあたる丘陵上に位置する。調査区は、水無川と直行するよう幅８m、長さ約200mにわたって設定され、遺跡に細長いトレンチを入れるような形となった。

２．縄文時代の調査

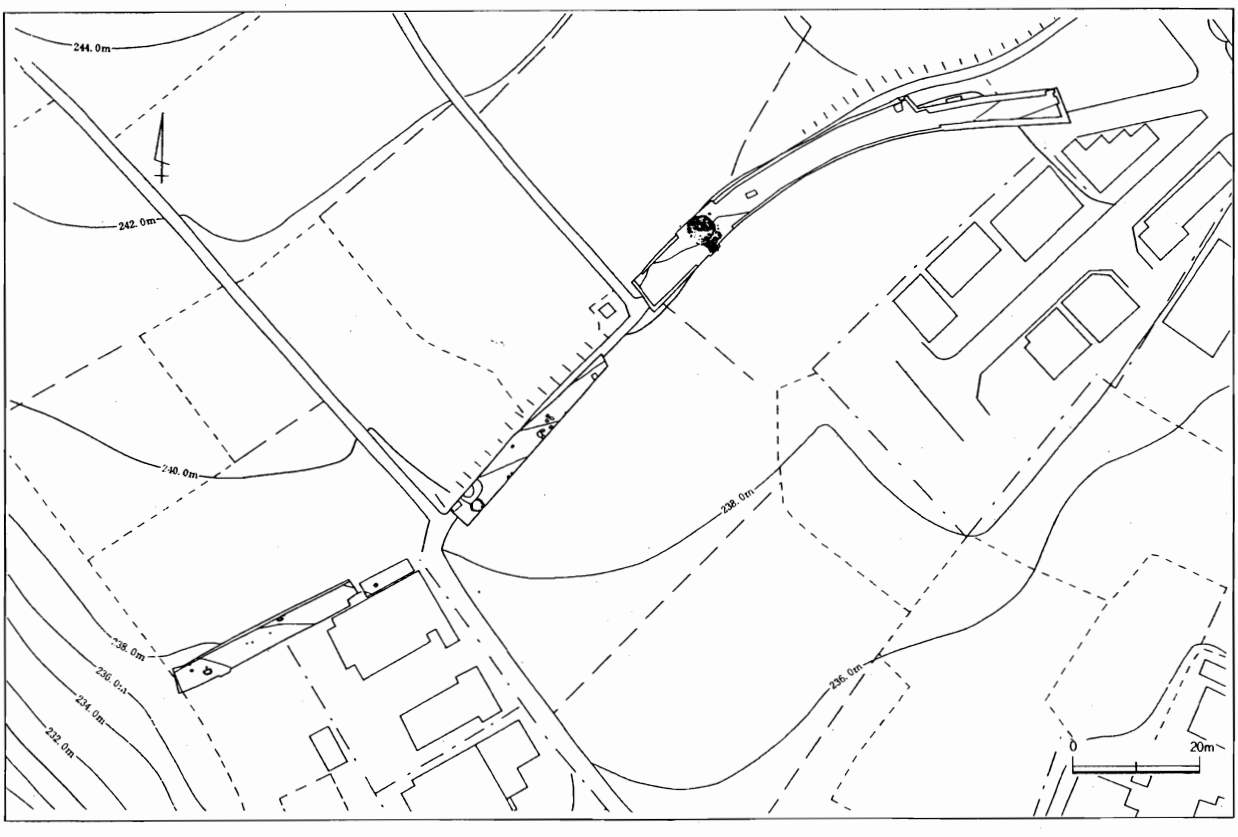
今回の調査では、縄文時代の住居跡１基・集石３基・土坑２基・ピット34基が発見されている。

出土遺物は、縄文時代少量であるが各時期のものが認められ、早期中葉沈線文系土器（田戸下層式）５点、押型文系土器１点、前期末葉土器（十三菩提式）12点、中期初頭土器（五領ヶ台式）６点、中期中葉土器（勝坂式）28点、中期後半土器（加曽利Ｅ式・曽利式）190点、後期土器（堀之内式）31点が出土している。いずれも散漫な分布ではあるが、出土層位は、早期土器は基本層序の第Ⅷ層、前期末葉土器は第Ⅶ層、後期土器は第Ⅵ層である。

３．敷石住居跡

住居跡は、中期末葉の柄鏡形（敷石）住居跡などと呼称されるもので、ほぼ完掘に近い状況で調査を実施できた。遺存状況は、後世のピットの影響を受けている部分と、地割れなどの影響で若干床面の敷石が動いている状況が認められた。

礫の分布を見ると、主体部の炉南西部については、敷石が遺存していない部分が認められるが、主体部の外縁にあたる縁石と張出部の敷石の遺存状況は良好な状態であった。また張出部の東側には床面とほぼ同一のレベルで敷石が広がっている状況が認められる。張出部の西側にかけても東側



第２図　調査区全体図（1/1200）

と同様小数であるが敷石の広がりが認められ、共に縁石と同方向に沿っているように見受けられる。

敷石に用いられた礫の特徴を見ると、第１号住居跡出土礫の総数は、877点（2,337kg）である。覆土及び掘り方出土のものを除く敷石面の礫460点（2,239kｇ）について見ると、被熱を受け、顕著に赤褐色化しているものは106点（794kg）で、構成礫の点数比で約23%（重量比35%）を占めている。被熱礫の分布を見ると炉石・床面・縁石・張出部・張出部外側の礫などそれぞれの場所に認められ、特定の場所に偏在する傾向は認められない。

礫の石材は、凝灰岩が点数比で85%を占め主体となっているが、板状に節理面で割れる根府川石などと呼称される安山岩は、炉の北側に多く分布する傾向が認められる。

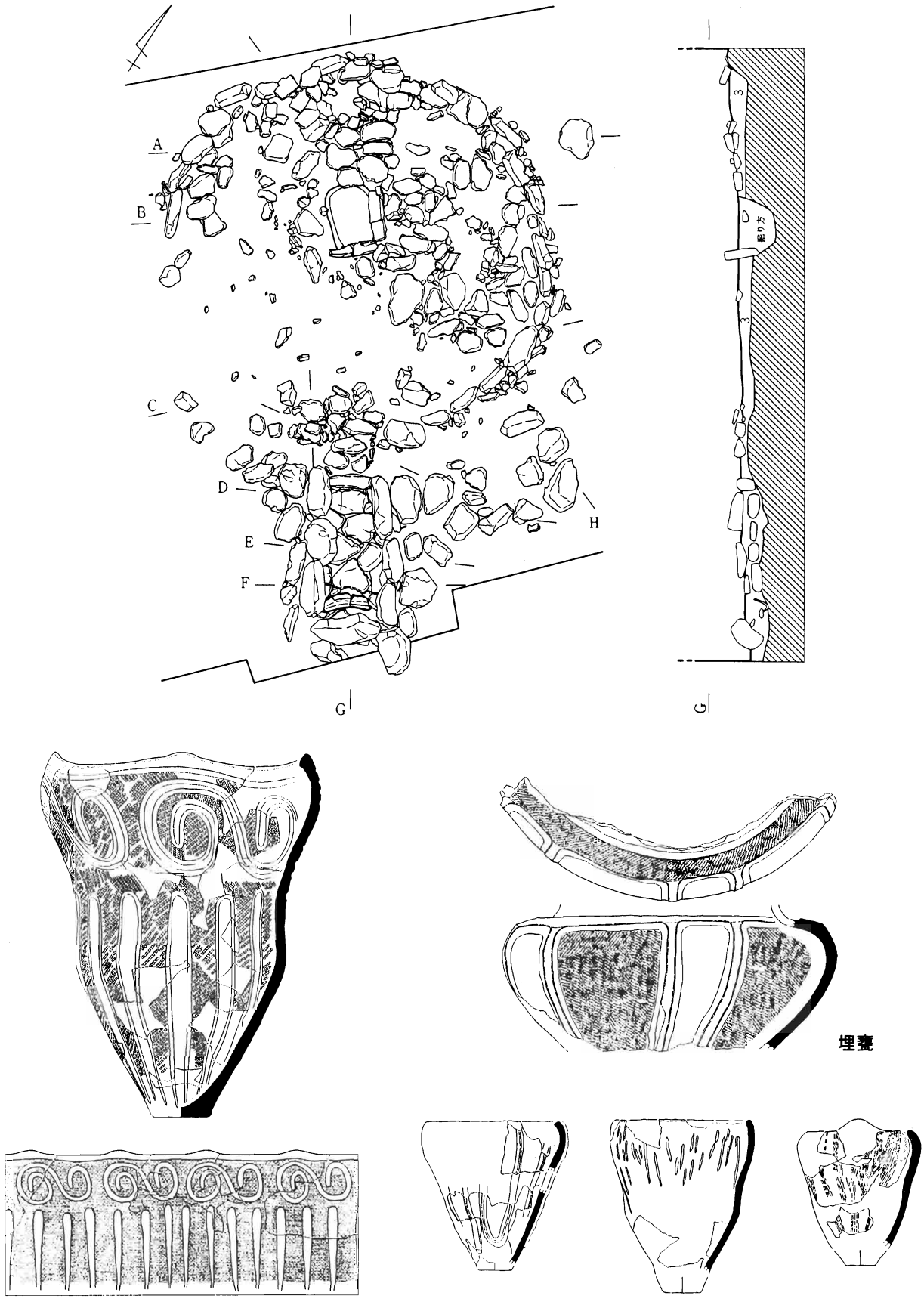
遺物の出土状況は、住居床面直上のものが主体であるが、比較的良好な遺存状態であった深鉢形土器は、住居主体部の東外側に多く分布する傾向が見られる。石棒は欠損品であるが、炉南西部にあたる敷居面の隙間に設置されるよう斜方向に横倒した状態で出土している。

４．まとめ

住居跡の帰属時期は、加曽利ＥⅣ式土器と曽利式土器が認められ、共伴関係を把握するうえでの良好な事例を事例を得ることができた。

文献

天野賢一・井関文明　2002「稲荷木遺跡」『かながわ考古学財団調査報告127』（財）かながわ考古学財団



第３図　第１号住居跡・出土土器

メ　モ

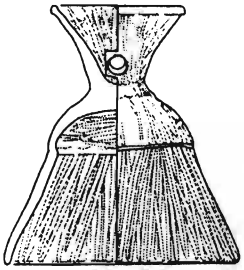
第26回 神奈川県遺跡調査・研究発表会　組織構成

実行委員会　神奈川県考古学会・横須賀市教育委員会・横須賀考古学会
委 員 長　寺田　兼方（神奈川県考古学会　会長）
副委員長　伊藤　秀吉（神奈川県考古学会副会長）
芦澤　雄一（横須賀市教育委員会　生涯学習課長）
川上　久夫（横須賀考古学会　会長）
事務局長　加藤　信夫（神奈川県考古学会　発表会担当）
事務局員　天野　賢一・大村　浩司・小池　　聡（神奈川県考古学会　発表会担当）
大塚　眞弘・中村賢太郎（横須賀考古学会　記念事業担当）

第26回 神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨

編　集　第26回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 実行委員会

発　行　神奈川県考古学会

発行日　2002（平成14）年11月24日

印　刷　アール印刷　252-1103綾瀬市深谷1434-8　TEL0467-70-8153